

八里をへだてたりと云ふ、又近く初島みも、めぐり一里ばかりにして三里のおきにあり、この二島、朝夕の雲きりにみえがくれして、晴れぬる日はことにおもしろし、かくて一人ながめつゝあるはとに、としもくれぬ、おもへばけふはつもどりなりけり、都にあらばさわがしかるべきを、もあみをやくとする身には、何のわざもなく、いとつれづれなるに、山田のいね子、弟をたづさへてとぶらひ来て、梅園を見に也かんどいふ、やがて三人して鎮守の社のあたりより、左にをれて山あひのみちをめぐりてゆく、大よそ五六町ばかりあるべし、園の入口に一すぢの山川あり、いと清き水の音たてゝながるゝ上に橋をわたして、かたへに石を立て、漸佳とするせり、さて右にをれ左にをれて斜にのれば、撫松亭といふ小さき家一つ、松のしたにあり、立よりにてみるに、園内のをちこちくまもなく見ゆ、亭の記をから文してかきたるを、なげしにかけたり、三亭五橋のあらましをかけり、あるじのおうな茶をたてすゝむれば、三人してのみながら歌をも口ずさむ

めり、梅は六七分の花ざかりにて、そとはかどにほひあひたるに、山水處々に石ばしりて、白うおちくるなど、いづれかまことの花ならんと思ゆるもおかし、そこら大なる石どもものたてざまなるも、横ざまなるもあり、やすらふべき亭も遠近に見ゆ、いと暗うしげれる森の中にあけの玉垣の立てるは山神の社なり、その前をながるゝやう水にそひて、おくさまにもけば、梅のそとはかどさきこばれて、水のいはこゆるあたり、小さき橋をもわたして、雙眉駐杖なほ標せる石あり、げにも心あらん人の立ちどまりぬべきところなりけり、猶水上の幽なるところをさぐらんごてもけば、香浮と標したるあたりはことさらにをかし、又東さまにむかひて林を出づれば、やゝ廣き芝生の中ひに、いと高やかなる石文あり、長興氏のかける漢文にて、此園の故よしをしるせるが、させるをかしきふしもなきものから、

こけむせる石もたけあり山里の梅みてたつはわればかりかは
といへば、いね子のよめる

瀧つせの音のみたかくきこゆれと花しづかなる山のかげかな
 小高きところに、一の亭あるを北に見て、川にそひてくだれば、少し
 長き橋をわたせり、例の石を立て迎目と標せり、此あたりより西南の
 山をかへりみれば、峰ども打つゝきて、この園をかこめるが如くなる
 に、たゞ東の一方のみ山かけて、蒼海のはるかに見ゆるもをかし、げ
 にこの橋のあたりにて、夕月をまち出でたらんには、林和譜の詩もた
 いならぬ心ちすべし、日ごろ家の立ちとみたるどころにこもりて、海
 原をのみながめつるに、けふしもまたく、おくまりたる山里の梅さ
 へ、波の花さへ、にはひあへるあたりにて見れば、いとおもしろく
 て時のうつるもしらず、すでに二時にすぎたりといへば、いざとて園
 を立ちいで、さまにこし道をかへるも、又をかし、此園は、明治十
 九年のころ、横濱なる茂木某ら、人々と共に心をあはせてつくれるな
 りとぞ、山水いとをかしけれども、梅は若木なればものくしからず、
 今年も過ぎて、木ども老いかいまりて、苦むしたらんには、いかに

をかしからまい、さておのづからにあるべきを、わざとからめかした
 るは、すこしうるさき心ちしてなん。

養老の瀧 (大八洲學會雜誌)

木村正 辭

關が原より三里ばかりにして、高田といふ所あり、又三十丁ばかり行
 けば、白石といふ村なり、白石より山道十丁餘のぼれば、養老山の中
 腹なり、豆馬亭といふ旅店に着きて、此樓上よりみわたせば、いと廣
 くうちはれて、目にさへざるものなくして、美濃國內はさらなり、東
 南に尾張、三河の山嶽を望み、また南西に伊勢の連峰を遙に見さぐる
 など、實に佳景なり、ひるの飯をはりて、やがて試みんとて、山によ
 ちのぼれば、此家のむかひの少し高き所に、千歳樓といふあり、前面
 に古木の櫻多し、春のながめおもひやらる、こゝを過ぎて少し下りて
 またのぼれば、養老神社あり、そこに菊水とよべる冷泉湧き出づ、山
 中冷水多しといへども、其ひや、かなることこれを第一とす、名物の
 養老酒は、もと此水にて醸造したるなりとぞ、

いざさらばまづ立ちよりて汲みとらん老も若ゆくどくの眞清水
 このかたへに人造の温泉場あり、こゝよりやゝのぼれば、瀧の響近く
 聞ゆ、瀧は前面の巖にかくれて、遠くのぞむにはみえず、此巖のさし出
 でたるあなたに、めぐりいたれば、とみに瀧のあらはれみえて、その
 にはかなるに、一層の壯觀をそふるなり、左右より生ひしげれるかへ
 での木の間にみえすけるなど、そのけしきたとふるにもものなし。

染めつくす秋の錦やいかならん瀧の白糸みてもあかぬを

かくてまた少しのぼれば、瀧壺のもとにいたる、その入口には二つの
 自からなる巖、左右にたちて恰も家の門に入るが如し、こゝを入れば
 瀧壺のもとなり、たきは高さ九丈幅九尺ありといふ、壺の中央に巖の
 おちかさなりたるうへに、自から樹木生ひしげりて、島山のかたちを
 なせり、いと奇觀なり、しばしたゝすむほせに、瀧のしぶきにて袖も
 しとくにぬれそぼちて、総身冷かになりたるに、雨さへふり出でたれ
 ば、もとの道をくだりぬ、

瀧つせにひちたる袖をかへるさの雨にもいたくぬらしつるかな
 此瀧は、そのむかし元正天皇の御時、はじめて世に發見あはれて、かしこく
 も、天皇のかゝる荒山中に、二たびまで行幸遊ばし、此たきのあらは
 れたるを祥瑞として、年号をさへ養老とぞ改め給へりし、その時の行
 宮の趾は、ふもとなる白石村にありて、行宮神社と奉祀せり。」

城の崎海岸

蘆原蟹麿

いでや此浦々島々の景色をみんと、立ち出づる川口に、催す舟の數は、
 も、山や、桃島のわたりを漕ぎ行く岸に、烏帽子岩をみては、奇なり
 と感じ、日敷石に故郷をおもひ、八疊岩を聞きては、狸をおもふより、
 はらつみならぬ浪の音にたゆたふ、舟もほととなく津居山に入り、瀬戸
 よりのぼりて、頂福寺とかいへる唐木建の御堂にまうで、此うしろな
 る山のこしよりみわたせば、岸には磐石をたゝみ、うみづらは藍より
 も青くして物すぞし、右手のかたは、若狭につゞく丹後の山高く聳え、
 向うは高麗唐土とやら、久かたの空にのづく浪間に、孤帆の遠影幽に

して、絶景筆につきず、舟にもどりおほ海に漕ぎ出づれば、荒浪のうねりにて船高く上り、又ひさく落るときは、なぞやらん海底にも入りぬべき心地して、いとあやふし、十丁計行く海中に、千疊あまりたる巖あり、命島といふ、こゝに舟をよせ酒汲みかはし、遠くのぞめるうち、浪の音のしげきが、らうかはして、亦船にうつり漕ぎ行く程に、右の方に燕が洞、猿が城を見て、津居山をめぐり、絹卷の白濱より船上りす、此磯より氣比の松原へ行くに、山の尾崎より長くさし出でたる巖有り、龍の鼻といふ、常に此岩に浪打ちかけて、かはく隙なし、されどもこゝをこえざれば、外に道なし、寄りてはかへる浪のひまに、岩のはざまをつたひて行く處なれば、こなたよりみやりて絹卷の神社にまうす、常盤木の茂れる中に、時ぞと咲く卯の花や、また残れる藤の花など、立ち交りてえならぬ景色なり、貝つもの拾ひて、つぶやきける歌の中に、

此神の名にやおふらん絹卷のいはほにかゝる浪のしらゆふ

わくらばに來てみれば藤の色そひていといはえある絹卷の山
 岩つゝ紅葉とみしもけふは早照るかげかはる卯の花の月
 ひまもなくよせてはくなく岩波のかゝる中にも宿かりの貝
 此湯もとの町はづれ、あたゝ山の麓のあせ道をつたひて、今津なる木や某の客亭に至るに、うしろは來日くわひが嶽の高山につづく、さやまを、おのづからなる庭の景色として、前は清々たる大河をおびたり、此樓閣より見わたせば、遊さん舟かまびすく、警女おとせ法師なぞうたひ弾く三絃の音を浪にたゞへ、少ちとだみたる聲したるさつまぶしも、また一つの興とはなりぬ、めづらしきもてなしに、さけをもすぐし時を移して、永き日も暮におよぶ比、向ひ山のいたゞきに、月代の雲ほのかに映じて、ほどなく立ちのぼれるが、水の面に涼しくうつりて、一しほおもしろく、彼の順が「今よひぞ秋の最中なりける」の歌も、思ひ出たされて、夏ながらあはれにもまたかんど深し。」

○第三節 時 令

立春 (源氏物語初音の卷) 紫式部

年たちかへるあしたの空の景色、名残なく曇らぬうら、けさには、数
ならぬ垣ねの内だに、雪間の草若やかに色づきそめ、いつしかと景色
だつ霞に、木の芽も打けふり、おのづから人の心も、のびらかに見ゆ
るかし。ましていと玉敷ける御前は、庭よりはじめ、見所多くみが
き増し給へる御方々の有様。まねびたてんも言の葉たるまじくなん。
春の御殿のお前とり分て、梅の香もみ簾の内の匂にふきまがひて、生
ける佛の御園と覺ゆ、さすがに打とけてやすらかに、住なし給へり。」

正月 (四季物語) 鳴長明

鳥も聞えぬ山里なれど、家を守る犬の聲も、春めきたるやうに覺えて、
東の戸ざししばしばかりあけものすれば、空の氣色昨夜見しに變りて、
縹の紙に白粉つけたるやうに、所々白う見なされて、耀く星のかけも
見るが中に薄く覺えて、東のかた御神の立たせ給ふべき辰巳のあたり
に、横居る雲一すぢは本細う末ふとし、又一つは虹の懸橋と覺えて、

小紫の平緒の長う續きたるが如し、その平緒だつ物も、いつのほかに
か、薄墨の紙屋紙の色になりもて行くは、又何方よりかは、暫しが程
暗うなりて、山蔭のものあひ艶やかならぬに、外面の鳥の聲、花待つ
ばかりにや、心から長閑に囀り出で、谷の水も音添へて聞ゆるに、三
明六通の佛の御耳にはなと、掛巻も畏くも羨み奉るに、此度は星の八
十河原いづち往きけん、一つ二つそれかあらぬかと残るやうに見えて
山の端にほひ出づる朝彦の御かけ、唯朱の玉垣、いかなる工匠の塗
りみそなはせしとか、常のながめもかうあるものから、一層たふとく
もいみじうも覺えたるに、九重の御わざ、我神垣の藏司の御物申しも
今ばかりおぼえたる、この御わざはさる御事にて、四方拜の神さびた
る御事よ、まだしの、めもわいためあらぬより、ありがたくも、天皇
の五の御印物なしおはして、御軟障引き廻らし給ひ、その御内つ庭に
して、屬星と唱へおはしますし、天つ神國つ神、なべての御陵、雨の師
風の伯、五つの穀物まで祈り物しへば、天が下豊に、國久しかれどの

御祈誓にて、千早振神の御心を執らせ給ふことなるべし、御壺々々の
 あたりの御舎のたゝすまひ、掃部の司の箒とりくくに仕う奉り、穢を
 やらひ遣るに、すゝやかなる童の、年立つ朝よろこびて、そこらちり
 ふて、御このみのあまひ打ち遣りたるを、後にもあらで箒又つかうま
 つり、はしたなの殿上童など、はなにかけて守るに、御しらすのかた
 少納言のかくともものすれば、雅樂寮、なれたる袍衣ひきかけて、主
 殿のきよめたぐひなしなど、聲ゆがみ老いだつ、つかさこゝら行かふ
 にとかくして御業事終り、御幸ならせおはしませば、曲薬司の、疾う
 しあげ仕うまつりたる、屠蘇、白散、度障、散當薬など、宮内の上司
 藏人に傳へて奉り、この藏人は後取の司なるべし。それより小朝拜
 の御事いそがれ、又今夜の節會にあふべき三の星の位、上達部、君達、
 なべて殿上のおのこたち、又擬侍従のなにくれとの定書、それかれ仕
 う奉りて、日くれにければ、春としもなく寒くおぼえ、衛士の司の燃
 く火あたりのみ、人多くゆすりよりて、内辨もこのあたりゆかし

もやど、誰もしうちほゝるむべし、その神々しさいはんかたなし、
 九重のかくうづたかく續かせ給ひ、百代千世と榮ゆく春にあはせ給ふ
 もかゝる御装のたゝならぬにこそ。」

初 春 (榮花物語つばみ花の巻) 作者詳ならず

新玉の年立ち返りぬれば、雲の上もはれくしう見えて、空を仰がれ、
 夜のはとに立ちかへりたる春の霞も、紫に薄く濃くたなびき、日の氣
 色うらゝかに光さやく見え、百千鳥もさへづりまさり、萬皆心ある
 さまに見え、枝になかりつる花もいつしかひもとぎ、植根の草も青
 み渡り、朝の原も萩の焼原かさばらひ、春日野の飛火の野守も、萬代
 の春の初の若葉を摘み、氷解く風もゆるく吹きて枝をならさず、谷の鶯
 も行末はるかなる聲に聞えて耳とまり、船岡の子の日の松も、いつし
 かと君にひかれて萬代を經んと思ひて、常磐堅磐の緑の色ふかく見え、
 もたひのほとりの竹葉も末の世はるかに見え、はしのもとのさうびも
 夏をましかばになどして、さまごまめでたきに、朝拜よりはじめて萬

にをかしきに、宮の御方の女房のなりとも、常にだにゐるに、まいて物あざやかに、かをりふかきもことわりと見えたり。」

子の日 (源氏物語初音の卷) 紫式部

今日は子の日なりけり、げに千年の春をかけ祝はんに、理なる日なり、姫君の御方に渡り給へれば、童下仕など、御前の山の小松ひき遊ぶ、若き人々の心地をも、おき所なく見ゆ、北のおとよりわざとがましくしあつめたる鬢籠をも、檜破子など奉り給へり、えならぬ五葉の枝に移れる鶯も、思ふ心あらんかし。」

二月 (四季物語)

鳴長明

二月の空の氣色はたゞならぬに、残の雪に咲き交る梅の匂ひなつかしう、里にはまた事どもなき曙に、山の櫻は早う花をつけぬれど、霞の深う立ちへだいで、外山の空のうらみ少からず、過し氷の機はさらにて、今日も主水司氷を奉れる、生野の道の遠き心ばへなぞ、所につけ國に觸れたること、さ言ひしらふ男ども、春の光に心ひかれ

て、あらぬ野山を心をやり、ゆかしう見ならはせども、御曹司に籠めたる檻の内の獸籠の内の鳥は、春とも知らず、花に巣くふ妹脊のちざりも物せで、みかきが原の明暮心苦しう、遠き海山八重たつ雲のよそをも、戀ひ悲しむをなん、あはれと聞き知るべき聖も物せねば、唯言ひ知らず、をかしきふしに聞えなせど、さぞな悲みあまひあるべきを思へば、いみじき御座のあたり、やんとどなき御傍は、忌み憚りもすべきにこそ。」

彌生 (四季物語)

鳴長明

春風も稍深く吹きわたりに、青柳の枝に宿かる百千鳥の聲を、瀬にうち囀り、園生に遊ぶ胡蝶の、垣根の露を命とや、夢ばかりの浮世のすさび、昔の夢も、かうやうの身にはうらやましくて、いとゆふにさへつながるべき、老がかばそき脚にも、芝生の弱竹を杖に切りて、こはらの野をあさるに、桃のうち笑ふばかり、艶に咲きほこりて、道の傍は春の草生ひ茂れり、春いくばんか暮れなんと、つゝしりうたして、

谷に下りて、携へし物を搔き鳴せば、流るゝ水を調べたちて、及ばぬ
ひいきに、みづからも片腹いたう、つくくと昔ありける貞敏公の面
影も通ふばかり、涙も水もなごいひまてぬ、今日なん曲水の御宴、今
ばかり始まるべきにこそ、元來土器もたらぬ谷のとざし、まいてこの
もしからぬ身なれば、巴の文字も書き流すべきにあらす、司召の除目
この日ごろにやと、百敷の御わざも、久しういひ入れたらずまぬ身は、
思ひもよらで、暫しありては猶思ひ出づる所もあれば、それかかれか
と、その司々心當しるし、現のやうに覺えたり。」

暮 春 (狭衣物語一)

大 貳 三 位

三月二十日にもなりぬ、御前の木立、何となく青みわたりて、木ぐら
きなかに、中島の藤は、松にとのみおもはず咲きかゝりて、山時鳥ま
ち顔なるに、池の汀の八重山吹は、井手のわたりにこそならず、見渡
さるゝ夕ばえのをかしさを、獨りみ給ふもあかねば、さぶらひわらば
の、をかしげなるして一枝折らせ給ふ。」

初 夏 (四季物語)

しばし染にし花の衣のみかは、御簾のたれ、御調度までひとへに換へ
みとなはしすさまじかりける、扇なを賜ければ、おのづから夏山の蔭
も、すゝみ取るべく覺えたり、九重の内は人の家居しげ、れ、さこそ
あらぬこのあたりの山かけは、青葉にまじる木の花の、雪耻しう咲き
ものし、若楓の緑は、六位過ぎぬ人の衣かけぬれど、御爵賜はりし松
の緑には劣りぬ。」

同 (枕草紙一)

清 少 納 言

祭のころはいみじうをかし、木々のこの葉、まだしげうはなくて、わ
かやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空の景色の、何となうそら
にをかしきに、少し曇りたる夕つがた、夜なご、忍びたる杜鵑の、遠
うそら耳かど覺ゆるまで、たゞくしきを聞きつけたらん、何こゝち
かはせん。」

五月五日 (枕草紙三)

清 少 納 言

せちば五月さつきにしくはなし、菖蒲よもぎなどの薫りあひたるも、いみじ
うをかし、このへのうちをはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、
いかでわがもとしげくふかんと、昔き渡したる、猶いと珍らしく、
いつの他折ことわりはさはしたりし、空のけしきの曇りわたりたるに、后宮きんぐうな
ぎには、縫殿より御薬玉とて、いろくの糸をくみて参らせければ、
御凡帳みまじやうたてまつる、母屋の柱の左右につけたり、九月九日の菊を、綾
と生絹のきぬに包みて参らせたる、同じ柱にゆひつけて、月ごろある
薬玉取り替へて捨つめる、又薬玉は、菊のをりまであるべきにやあら
ん、されどそれは、皆糸をひき取りて、物ゆひなとてしはしもなり、
御節供みせせぐまるり、わかき人々は、菖蒲のさし櫛さし、物忌つけなとて、
さまとく唐衣からぎぬ、汗衫、ながき根、をかしき折枝とも、村濃むらなのくみして
結ひつけなとしたる、珍らしう言ふべきことならねど、いとをかし、
さて春ごどに咲くとして、櫻をよろしう思ふ人やはある、つじありく童わら
女はなのはとくにつけては、いみじきわざしたると、常に袂をまもり、

人に見くらべ、えもいはず興ありと思ひたるを、そばへたる小舎人童こどねりわらわ
なとに、ひきとられて泣くもをかし、紫の紙に櫛あぶらの花、青き紙に菖蒲
の葉、はそうまさて引き結ひ、又白き紙を根にしてゆひたるもをかし、
いと長き根なと、文の中に入れなとしたる人ともなと、いと艶なる
返事かへりごとかゝんと、言ひ合せかたらふとちは、見せ合せなとするをかし、
人の女、やんごとなき所々に御文聞え給ふ人も、今日は心ことにぞな
まめかしうをかしき、夕暮のはとに、杜鵑の名のりしたるも、すべて
をかしういみじ。」

六月 (四季物語)

鳴 長 明

五月雨さみだれの晴間なき空も、いつしか名残なくなりて、雲の峯へ立ち重なり、
いみじき金剛の手にも、かうやうにはたくみ得難う、梢の蟬の聲
聲かしかましと、枕上まくらの上うるさけれど、實にや里のかたへのこほくと
鳴る唐臼の音とはや、變りたり、垣根に咲ける夏草の花よりも、猶さ
ゝやかなる池といへど、濁にそまぬ蓮の花つけたるばかり、心も清ま

る事はあらじかし、同じ花紅葉も、人により心によりて、かすまへら
れものすれど、わきて佛の御足膝のもとに仕う奉り、或はいきとし生
ける人草も、皆このやどり願はぬものやはあらぬ

納涼 (源氏物語常夏の巻) 紫式部

いと暑き日、東の釣殿に出で給ひて涼み給ふ、中時の君もさぶらひ給
ふ、親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れる年魚、近き川の
いしぶしやうの物、御前にて調じて参らす、例の大殿のきんぢち、中
將の御わたり尋ねて参り給へり、さうざうしくねぶたかりつるをり、
よく物し給へるかなとて、大御酒まゐり、ひみづめして、水飯なご、
とりくくにさうとさつ、くふ、風はいとよく吹けど、日のどかに曇り
なき空の、西日になるほど、蟬の聲なごも、いと苦しげに聞ゆれば、
水の上むとくなる今日の暑かはしきかな、無禮の罪はゆるされなんや
とて、よりふし給へり、いとかゝる頃は、あそひなごもすさまじく、
さすがにくらしがたきこそくるしけれ、みやづかへする若き人々、た

へがたからんな、帯紐もとかぬほどに、こゝにてだに打ちみだれ、こ
の頃世にあらん事の、少しめづらしく、ねぶたさ覺ぬべからんこと、
語りてきかせ給へ、何となく翁びたる心地して、世間の事もおぼつか
なしやなごのたまへど、珍らしき事とて、うちいで聞えん物がたりも
覺えねば、かしてまりたるやうにて、皆いと涼しき高欄に、背なかお
しつゝさぶらひたまふ。」

夕納涼 (枕草紙九) 清少納言

いみじう暑き頃、夕すいみといふほど、物のさまなどおほめかしきに、
男車のさきおふはいふべき事にもあらず、たいの人も、しりの簾わけ
て、二人も一人も乗りて、走らせ行くこそいと涼しげなれ、まして琵琶
ひきならし、笛の音聞ゆるは、過ぎていぬるも口惜しく、さやうな
るほどに、牛の鞆の香の、怪しうかぎ知らぬさまなれど、うちかくれ
たるが、をかしきこそ物ぐるほしけれ、いと暗う闇なるに、さきにと
もしたる松の烟の香の、車にかゝれるもいとをかし。」

七夕 (四季物語)

鴨 長 明

せこが衣もうらさびしきに、秋風吹き初め、萩の葉もそよ風に、をり
 知り顔に打ち靡きて、夕々は螢みだれ飛び、思ひさうせんと悲しく思
 ひなされて、同じ筈なれど、主殿寮の朝清め、今朝よりは露けくなり
 行けば、玉箒と物せし昔の言の葉も、折ならぬねざしいとあはれ深し
 かし、七夕の御祭はさせる事ながらねど、京家の女の童のこしらへも
 のする事を、今は上るに見そなはせ給ひぬ、されど相撲の節に言ひ入
 れ、た、すまんよりは、つきなくもあらぬ事にや、廣き御庭に何くれ
 の机物奉り、いろくの願の糸奉るに、若き女の童など、後れ先だち
 て騒ぎ集ふに、或は高欄にて裳裙を引破り、或は人の簪にかゝりて、
 袂を綻ばせなぞ、衣の行方も亂る、かし、願の糸よりはまづこの衣の
 願をと、糸のみだれ覺束なし、姫蜘蛛とてさやかなりし物、その机物、
 或は願の糸に、いをひきぬるを圖として、私の願かなへりとするこ
 なるべし、大かたははかなき心はべにや、七夕といへども、身の上の

願かなはぬ例は、一年に唯一夜の逢瀬さへ、雲行き雨施し、或は月く
 らうて、逢ふ事稀に傳へ物せしに、今宵の星の御心づかひ、人の願は
 よも聞き入れ給ふまじと、ほゝゑむ方もあるべし、

孟蘭盆會 (全上)

鴨 長 明

亡靈祭ること、一年に數多度あるものか、わきてこの月の祭りは、
 年の終よりもいや添ひて、悲しう思ひなざるに、百味の飲食とや、
 いろくの木の實、羹調じ、振蓮の葉に乗せて手向け奉るに、秋風の
 名殘悲しう吹き誘ひたる夕暮、夜居の僧の勤の聲など、折から哀も深
 かるべし、都の良馨と聞えし人の古墓記にも、凡情の愚なるは、雞牛
 犬馬よりも劣れり、唯世路につかはれて、惑の上に醉をなし、醉の中
 に夢をなし、夢の中に死をなすどか物せし如く、誰もくやがて靈に
 なるべきを、我も人を祭り、又祭らる、道理知らぬ、人情のあさまし
 さいふも更なり。」

秋 夕 (狭衣物語一)

大 貳 三 位

此秋は、虫の音しげき淺茅が原にことならず、なきくらし給ひても、晝はおのづからまぎれ給ふ、心のつまどかいひふるしたる夕暮の空霧わたりて、ありか定めたる雲のたすまひ、うらやましうながめやり給へり、西の山もどは、げに思ふ事なき人だに物あはれなりぬべきに、雁さへ雲井はるかに鳴さわたりつゝ、涙の露も盛過ぎたる萩の上に玉と置き渡しつゝ、鳴弱りたる虫の聲々さへ、常よりも哀れなるに、御前近き透垣のつらなる吳竹を吹なびかしたる木枯の音さへ、身にしみて心細くきこもれば、簾を少し捲き上げ給へるに、木々の梢も色づきわたりて、さと吹入れたり、

せき袖に洩りて涙や染つらんこそ色ます秋の夕ぐれ

野 分 (源氏物語野分の卷) 紫 式 部

中宮のおまへに、秋の花をうるさせ給へる事、常の年よりも見どころ多く、色くさをつくしてよりある黒木、あか木のませをもひませつゝ、同じき花の枝ざしすがた、朝露の光もよのつねならず、玉かどか、や

きて、つくりわたせる野邊の色を見るには、た、春の田もわすられて、涼しうおもしろく心もあくがる、やうなり。春秋のあらそひに、昔より秋に心よする人は、數まさりけるを、名だる、春のおまへの花園に心よせし人々、またひさかへしうつろうけしき、世のありさまに似たり。これを御覽じつきて、里居し給ふはせ、御あそびなせもあらまほしけれと、八月は、故前坊の御忌月なれば、こゝろもとなくおぼしつゝ、あけくるに、この花のいろまさるけしきをも御覽するに、野分の例の年よりもおどろしく、空の色かはりて吹いづ、花なども萎るゝを、いとさしも思ひしまぬ人だにも、あなわりなと思ひ騒がるゝを、まして草むらの露の玉の緒亂るゝまゝに、御心まどひもしぬべくおぼしたり、おほふばかりの袖は、秋の空にしもこそ、ほしげなりけれ、暮行くまゝに物も見えず、吹きよはして、いとむくつけければ、御格子なせまゝぬるに、うしろめだくいみじと、花の上をおぼし歎く、南のおとゝにも、前裁のくろはせ給ひけるをりにしも、かくふきいで

、もとあらの小萩、はしたなく待えたる風のけしきなり、折れかへり露もとまるまじらふきちらすを、少しは近うて見給ふ。」

九月九日 (枕草紙一)

清 少 納 言

九月九日は、あかつきがたより雨すこしふりて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿なともいたくぬれ、うつしの香も、てはやされたる、つとめてはやみにたれど、猶曇りてや、もすれば、ふりおちぬべく見えたるこそをかしけれ。」

暮 秋 (源氏物語夕霧の巻)

紫 式 部

九月十六日、野山の景色はふかく見しらぬ人だに、たゞにやは覺ゆる、山風に堪へぬ木々の木末も、峯の葛葉も心あわたいしう、争ひ散るまざれに、尊さき讀經の聲かすかに、念佛などの聲ばかりして、人のけはひいとすくなう、木枯の吹き拂ひたるに、鹿は唯籬のもとにたゞすみて、山田のひたにも驚かす、色こき稻どもの中にまじりて、うち鳴くもうれへがほなり、瀧の聲は、いと物思ふ人を、驚かしがほに、

耳かしましうと、ろき響く、叢の虫のみぞ、よりところなげに鳴きよわりて、枯れたる草の下より、龍膽のわれひとりのみ、心ながうはひ出で、露けく見ゆるなど、皆例のこの頃のことなれば、折から所がらにや、いと堪へ難き程の物悲しきなり。」

神無月 (四季物語)

鴨 長 明

月こそあれ神無月とか、淋しげなる社の朱の玉垣いかにぞや、この垣の荒れわたる風の心ばへ、千早振神代もかうありぬべし、古き文には、風立つ我神山のふるき祈草は、いつもものせしは、神の陽の精、神鬼の陽の精魂なり、この月は一陽もあらで、つとめての月より一陽來復の徳をあらはせば、陽神のおはしみそなはし給はぬといふ心ばへにて神無月といへるなるべしとなん、深う神秘にせしことよ。」

十一月 (全上)

鴨 長 明

梟の聲すさまじかりける、松楓の枝も雪にあつこえ、狐山彦の遊びかけりし、蘭菊の叢も霜白う置きわたして、所々の山里の焼火も、見る

月さへ暖げなり、澤田の面はいつしかに、大路のやうに行き通ひ、池の水鳥うさねの枕、いたづらに見なされ、宇治の綱代木時を得てなん、小野の山人も暇なき頃なり。」

十二月 (全上)

鳴 長 明

あやしう色も香もなき山里の冬の氣色、春は花に身をなして、さまざまふも人こそあれ、それならでも、青葉に春の面影を慕ひ、郭公のしのび音に、岩の懸路を踏みならしても、秋は千里の外もとめて、月にあぐがれ紅葉にめづるもあり、山路の菊をかごとくに御酒暖めて、鹿の鳴く音を何よけんぞ、一人聞しめし渡るなぞ、折につけたる所のつでも、このころはなかく絶えて、窓うつ嵐の隙には、里の童のよこなまれの唱歌の聲は、耳にならばしの、妻木こる賤女の折ならぬゑみの聲、口のはどむくつけう思ひ渡さるゝのみ、山里のはだしなりけり、さはいへども、都の内は年の忙はしきも、こもるぎの名にしならねど、この日ころは、百數もかすまふべき人は暇なりこそ、さこそいへど、御

佛名經讀みたて、所せきまで法の師のもすりて、三ヶ日の内の作法作法しき御公事、いへばいみじき御事ぞかし、心あるかぎりは、百數の内を、さらでも心に世を遁るゝを、さは侍らぬぞあさましきや、この翁今あらんに、まさに遁れてんやと、思ふ給へられ侍る。」

四季の評 (徒然草)

兼 好 法 師

折節の移り變るこそ、物毎にあはれなれ、物のあはれは秋こそ勝れど人毎にいふめれど、それもさる物にて、今一際心もうき立つものは、春の氣色にこそあめれ、鳥の聲などもこの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づるころより、や、春深くかすみわたりて、花もやうくけしきだつほどこそあれ、をりしも雨風打ちついで、心あわたいしう散りすぎぬ、青葉になりゆくまで、よろづに唯心をのみぞなやまず。「花橋は名にこそおへれ、なほ梅のにはひにぞ、いにしへの事も立かへり戀しう思ひ出でらるゝ、山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きことおほし、灌佛のこ

るまつりのころ、若葉の梢すいしげに繁りゆくほどこそ、世のあはれも人の戀しきもまされど、人のおほせられしこそ實にさるものなれ、五月菖蒲ふくころ、早苗とるころ、水雞のたぐな心ぼそからぬかは、六月のころあやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり、六月菘又をかし。七夕まつるこそなまめかしけれ、やうやう夜さむになるほど、雁なきて來るころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈りはすなど、とり集めたることは秋のみぞおほかる、又野分のあしたこそをかしけれ、いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙なぞに事ふりにたれど、おなじ事また今さらにはじともあらず、思しき事いはぬは、腹ふくる、業なれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにてかいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ、汀の草に紅葉の散留まりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟のたつこそをかしけれ、年の暮果て、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる、すさまじき物に

して、見る人もなき月の寒けく澄める、二十日あまりの空こそ心細き物なれ、御佛名荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき公事ともしげく、春のいそぎに取重ねて、催ふし行はるゝさまぞいみじきや、追儼より四方拜につゞくこそ面白けれ、晦日の夜いたうくらきに、松ともしもして、夜半すぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあちんことしくしくの、しりて、足を空にまよふが、明方よりさすがに音なくなりぬること、年のなごりも心ぼそけれ、亡人の來る夜とて魂まつるわざは、このころ都にはなきを、東の方にはなほすることにてありしこそあはれなりしか、かくて明行く空の氣色、昨日にかはりたりとは見えねど、引かへ珍らしき心地とする、大路のさま、松たて渡して、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。」

○第四節 動物

鶯 (枕草紙三)

清少納言

鶯は、ふみなせにもめでたきものに作り、聲よりはじめて、さまかた
 ちもさばかり貴に、美しきほせよりは、九重の内に鳴かぬぞいとわろ
 き、人のさなんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばか
 り侍ひて聞きしに、實に更に音もせざりき、さるは竹も近く、紅梅も
 いとよく通ひぬべきたよりなりかし、まかで、聞けば、あやしき家の
 見どころもなき梅なせにや、花やかにぞ鳴く、夜なかぬもいぎたなき
 心地すれども、今はいかせん、夏秋の末まで老聲に鳴きて、むしく
 ひなせ、やうもあらぬものは、名をつけかへていふぞ口惜しくすでき
 心地する、それも雀なせやうに、常にある鳥ならば、さもおぼもまじ、
 春なく故かうはあらめ、年立かへるなせ、をかききことに、歌にもふ
 みにも作るなるは、猶春のうちならましかば、いかにをかしからまし、
 人をも人げなう、世のおぼぬあなづらはしうなりそめにたるをば、謗
 りやはする、鶯鳥なせのうへは、見れ聞れなせする人、世になし
 かし、さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心

ちするなり、祭のかへさ見るとて、雲林院、知足院なせの前に、車を
 たてたれば、杜鵑もしのばぬにや、あらん鳴くに、いとよまねび似せ
 て、木高き木なせの中に、諸聲に鳴きたるこそさすがにをかしかれ。

朝鶯 (松屋文集)

藤井高尚

年老いて夕ませひするけにや、あらん、人よりとく目さむれば、ひとり
 おき出で、有明の月のかげうすくかすみわたれる、庭の木かけをた
 いずみありくに、鶯の枝つたふさまもやうく見え行く、おぼせかに
 打ち鳴きたるが似るものなく、初音やなにの色ならんといひしふるこ
 と思ひ出でられて、實に身にしむばかりをかき朝ぼらけなりかし。」

歸雁 (源氏物語須磨の巻)

紫式部

朝ぼらけの空に、雁つれてわたる、あるじの君、
 故郷をいづれの春か行て見んうらやましきは歸る雁がね
 宰相更に立ち出でて、ちせで、
 あかなくに雁のどこよを立ちわかれば、花の都に道やませはん。

蛙 (狭衣物語二)

大貳三位

宮は久しく御覽せざりつる故郷に、立ち出でさせ給へるに、いと荒れまさりて、物舊りにける山の氣色も物恐ろしげにて、池の水も水草居て、昔のかげもとまらぬに、蛙の聲ばかり頼もしきしるべにて、事とひまゐる人もなきまゝに、おきふしつくくと、思し歎く事かぎりなし。」

胡蝶 (松屋文集)

藤井高尚

莊周が夢の中に身をかへて胡蝶となりしといへるは、本より空ごとながら、をかしふるごととて、昔より歌にも文にも作りあへり、さるは胡てふといふもの、見る目もいと美はしく、名さへあしからぬぞかし、衰むしなきになりたる夢語ならば、かからんやは、花園に始めは三つ四つと數ふばかり稀れにみえしも、いづくよりか來つらん數多になりて、空に飛び木がくれをゆく、あしたには露にぬれて、小さき羽も重きにやあらん、立ちかねてなほ花びらにすがりて眠り居たるに、風の

さ、吹きくれば、驚きて亂れ飛び、夕べにはふしとを争ふにやあらん、こ、かしの花にすだきて、立居ひまなきが踊るやうに見ゆるなど、いとをかし、まいてやんごとなきわたりの前裁の花にすみて、玉簾近く飛びありきたらんは、あひくしてひたひつきも羽衣も、一際あてに美しうぞ見ゆらんかし。」

郭公 (枕草紙三)

清少納言

杜鵑は、猶更いふべきかたなし、いつしかしたり顔にも聞え、歌に卯の花、花橘なごにやどりをして、はたかくれたるも、おたげなる心ばへなり、五月雨の短夜に寝ざめをして、いかで人よりさきに聞かんごまたれて、夜深くうち出でたる聲の、らうらうしう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし、六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべていふも愚かなり、夜なくものすべていづれもくめでたし兒どものみぞさしもなき。」

同 (全上九)

清少納言

日は出でたれど、空は猶うち曇りたるに、いかで聞かんと、目を醒し
起き居て待ちたる杜鵑の、數多さへあるにやと聞ゆるまで、鳴きひい
かせば、いみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にて、かれ似
せんとおぼしくうち添へたるこそ、にくけれど又をかし。」

同 (全上二)

清少納言

祭のころはいみじうをかし、木々のこの葉、まだしげうはなくて、わ
かやかに青みたるに、霧も霞もへだてぬ空の景色の、何となくそいろ
にをかしさに、少し曇りたる夕つかた、夜なと忍びたる杜鵑の、遠う
空耳かど覺ゆるまで、たどしくしきを聞きつけたらん、何にかはせん。」

同

(更科日記)

菅原孝標女

念佛する僧の、曉にぬかづく音の尊く聞ゆれば、戸を押しあげたれば、
はのくくと明けゆく山際、こぐらき梢もきりわたりて、花紅葉のさ
かりよりも、何となく茂りわたれば、空のけしきもくもらはしくをか
しきに、杜鵑さへいと近き梢にあまた、びないたり、

誰に見せたれにきかせん山里のこのあかつきもをちかへる音も
この晦日の日、谷のかたなる木のうへに、杜鵑かしがましくないたり、
都には待つらんものをほとぎす今日ひねもすに鳴きくらすかな

同

(源氏物語花散里の卷)

紫式部

五月雨の空、珍らしう晴れたる雲間にわたり給ふ、何ばかりの御よそ
ほひなく、うちやつして御前なども殊になく、忍び給へり、中川の程
おはするに、さゝやかなる家の木立なとよしばめるに、能くなる琴を
あづまに調べて掻き合せ、賑はしく弾き鳴すなり、御耳とまりて門近
なる所なれば、少しさし出で、見入れ給へば、大なる桂の木の追風に、
祭の頃思し出でられて、そこはかどなくけはひをかしきを、唯一目見
給ひし宿なりと、思ひ出で給ふにたゞならず、程經にけるを、おぼめ
かしくやとつゝましけれど、過ぎがてにやすらひ給ふ、折しも郭公鳴
きわたる、もよほし聞えがほなれば、御車推し返させ給ひて、例の惟
光を入れ給ふ、

をちかへりえぞ忍ばれぬほど、ぎすほのかたらひし宿のかきねに
寢殿とおぼしき屋の、西のつまに人々居たり、さきくも聞き知る聲
なりければ、こわづくり氣色とりて、御消息聞ゆ、若やかなる氣色ど
も數多して、おぼめくなるべし。

郭公こと、ふ聲はそれなれどあなおぼつかなさみだれのそら
殊更にたどると見れば、よししくうゑし垣根も、とて出づるを、人知
れぬ心には、妬うもあはれにも思ひけり、さもつゝむべきことぞかし、
ことわりにもあればさすがなり、(中略)まづ女御の御方にて、昔の御
物語なぞ聞え給ふに、夜更けにけり、二十日の月さし出づる程に、い
とい木高きかげども、木間う見えわたりて、近き橋のかをり懐しく匂
ひて、女御の御けはひわびにたれど、あくまで用意あり、あてにらう
たげなり、勝れて花やかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじう
懐しきには、思ひしたりしものをなぞ、思ひ出で聞え給ふにつけても、
昔の事かきつらね思されて、うちなき給ふ、郭公ありつる垣根のにや、

同じ聲にうち鳴く、慕ひきにけるよと思さるゝほどに、艶なりかし、
いかにしりてかなど、忍びやかに誦し給ふ、

橘の香をなつかしみほど、ぎすはなちる里をたづねてぞとふ

水鶏 (源氏物語明石の巻) 紫式部

はるくど物のとこぼりなき海づらなるに、なかく春秋の花紅葉
の盛なるよりは、たゞそこはかとなく茂れるかげども、なまめかしき
に、水鶏のうちたゝきたるは、たが門さしてとあはれに覺ゆ。」

螢 (全上夢浮橋の巻) 紫式部

小野には、いと深くしげりたる青葉の山に對ひて、まぎるゝ事なく、
遣水の螢ばかりを、昔おぼゆるなぐさめにてながめ居給へるに、例の
はるかに見やらるゝ谷の軒端より、さと心ことに追ひて、いと多うと
もしたる火の、のどかならぬ光りを見るとき、尼君たちもはしに出居
たり。」

都鳥 (十六夜日記)

阿佛尼

鳴海の瀉を過ぐるに、干潮のほとなれば、障なく干瀉を行く、をりしも濱千鳥いと多くさき立ちて行くも、しるべがほなる心ちして、濱千鳥なきでどさそふ世の中にあと、めんとは思はざりしを隅田川の邊にこそありと聞きしかと、都鳥といふ鳥の、背と足の赤きは、此浦にもありけり。

こと問はん背と足とはあかざりしわが住む方のみやと鳥かと
 蟬 (狭衣物語一) 大貳三位

はしつ方に人々と物がたりし給ふに、御前の木立こぐらくあつかはしげなる中に、蟬のあやにくに鳴出でたるを、見いだし給ひて、
 聲たて、鳴かぬばかりぞ物思ふ身は空蟬に劣りやはする
 など口ずさびにいひまぎらはして、蟬黄葉に鳴て漢宮秋なりと、忍びやかに打ち誦し給ふ御聲、めづらしげなきことなれど、若き人々は、しにかへりめでたしと思ひたる、ことはりなり。」

虫 (枕草子三)

虫は、鈴虫、松虫、促織、蟋蟀、蝶、われから、蟬、螢、蓑虫、いとあはれなり、鬼の生みければ、親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて、親のあしききぬひき着せて、今秋風吹かんとぞこんする、待てよといひて、逃げていけるも知らず、風の音聞き知りて八月ばかりになれば、ちよよととはかなけになく、いみじうあはれなり、茅蠹、叩頭虫、又あはれなり、さる心に道心起して、つきありくらん、又おもひかけず、暗き所などにはとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。」

玉 蟲 (四季物語) 鴨 長 明

宮の若人たち、后宮或は内の宮の仰言にて、内野、鳥部野、栗栖野などにて、くさぐさの蟲撰と申して、それかれなと奉るに、形かどろくしうも、聲の限をつくし、をかしきもあり、又形は美しう、玉蟲などいひていみじけれど、蟋蟀、促織、絡繹にさへ劣りて、聲立てぬもあれど、この蟲がやんどとなき幸あるものにて、宮の曹にて、何くれの

御局にも、御櫛筒の中なる白粉の中にまろびて、骸は人をさへ、野邊にふてたんめるならひなるに、十年廿年の後までも、御物の中に包ませ置かせ給ふことよ、かうやうの物等、雲井にまうのぼる、昔賢き人も草を耕して、位にのぼりしをさへ、珍らしうありがたき事に物するに、殊にこれはやうかはれり、又淺茅が原の露深きあたり、妹が門さしこめて語らふ頃、薄なと生ふべき隈に啼き出でたる、昔物語めきて、おはれ限なかるべし。」

鈴虫 (源氏物語鈴蟲の卷)

紫式部

實に聲々聞えたる中に、鈴蟲のふり出でたるぼとはなやかにをかし、秋の蟲の聲いづれとなき中に、松蟲なんすぐれたりとて、中宮の遙けき野邊を分けて、いとわざと尋ねとりつゝ、はなたせ給へる、しるく鳴きつゝ、ふるこそすくなかなれ、名にはたがひて、命の程はかなき蟲にぞあるべき、心にまかせて人聞かぬ奥山、遙けき野の松原に、聲をしまぬも、いとへたて心ある蟲になんありける、鈴蟲は心やすく、

今めいたるこそらうたけれなどの給へば、宮、

大かたの秋をばうしとしりにしをふりすてがたきすゝ蟲の聲

と忍びやかにの給ふ、いとなまめいてあてにおほどかなり、いかにとかや、いで思ひの外なる御事にこそとて、

こゝろもて草のやどりをいとへもなほすゝ蟲の聲ぞふりせぬなど聞え給ひて、きの御琴召して、珍しく彈き給ふ。」

松蟲 (全上賢木の卷)

紫式部

やうく明け行く空の氣色、殊更につくり出でたらんやうなり、

あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋のそらかな出でかてに御手を執へてやすらひ給へる、いみじうなつかし、風いとひややかに吹きて、松蟲の鳴きからしたる聲も、折知りがほなるを、さして思ふことなきだに、聞き過し難げなるに、ましてわりなき御心惑ひどもに、なかくこともかぬにや、

大かたの秋のわかれもかなしきに鳴くねなそへぞ野邊の松蟲

悔しきこと多かれどかひなければ、明け行く空もはしたなくて出で給ふ道のはといとつゆけし。」

鴈 (四季物語)

鴨 長 明

叢の蟲の聲々も、枕いささき夜々、月は有明まで隈なき空なるに、端居の小簾疊みあげ、香爐峰の雪ならねど、月にもなほひとりちて、松風の聲吹きまくる、夜半の中空言はん方なく、おもしろう思ひなさるゝに、後れし鴈の飛びちがひたる、思ひ盡させぬ世の中など、これをさへいとうこそ憂き身の種に取り蒔きたり。」

同 (源氏物語須磨の巻)

紫 式 部

沖より船どもの謠ひ語りて、漕ぎ行くなとも聞ゆ、ほのかに唯小き鳥の浮べると見やらるゝも、心ぼそげなるに、雁の連ねて鳴く聲、梶の音にまがへるを、うちながめ給ひて、御涙のこぼるゝを、かきはらひ給へる御手つき、黒木の御珠念にははえ給へるは、故郷の女戀しき人々のこゝち、皆慰みにけり、

はつかりは戀しき人のつらなれや旅の空とぶこゑのかなしきとの給へば、良清、

かきつらね昔のことぞおもほゆる雁はそのよの友ならねども 民部大輔、

心からはこの世を捨て、なくかりを雲のよそにも思ひけるかな 前の右近の丞、

常世出で、たびの空なるかりがねもつらにおくれぬ程ぞなぐさむ 同 (住吉物語) 作者詳ならず

頃なかつきは九月二十日餘りの事なれば、有明の月影も哀れなるに、出で、行き給ひけん心の中如何ばかり悲しかりけん、嵐烈しき空にかつ絶えぬ音を鳴き渡る雁も、折り知り顔に聞ゆ、雲間を出づる月の、常よりも我をとふらん心地ぞしける。」

同 (狭衣物語三)

大 貳 三 位

一條の宮におはしぬ、まだ夜深う起きたる人もなければ、格子を一間

手づからわけ給ひて、やがてながめふし給へるに、雁のおまたつらねて鳴わたるは、たが玉章をどひとりごちて、青苔の紙の色紙と誦し給へる御聲など、げに御門の御妹といふとも、世の常ならんはあかず思されんも、ことわりなる御さまなり、

聞せばや常世離れし雁がねの思ひの外にこひてなくねを、など獨ごち給ふを、聞く人だになきぞいとかひなき。」

同 (源氏物語幻の卷)

紫式部

神無月は、大かたもしぐれがちなる比、いとやながめ給ひて、夕暮の空の氣色なとも、えもいはぬ心ばそさに、ふりしかと、ひとりごちおはす、雲をわたる雁のつばさも、うらやましくまもられ給ふ、

大空をかまふまぼろし夢にだに見えてぬたまのゆくへたづねよ何事につけても、まぎれずのみ月日にそへておぼさる。」

鹿 (更科日記)

曉になりやしぬらんと思ふほどに、山のかたより人あまた來るおどす

驚きて見やりたれば、鹿の椽のもとまで來てうち鳴いたる、近うはなつかしからぬもの、聲なり、

秋の夜のつまこひかぬる鹿のねはと波山にこそきくべかりけれ

水鳥

(源氏物語橋姫の卷)

紫式部

春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの羽うちかはしつゝ、おの、かじしさへづる聲などを、常ははかなき事に見給ひしかども、つがひ離れぬを羨しとながめ給ひて、君達に御琴ども教へ聞へ給ふ、いとをかしげに小き御程に、とりとくかき鳴し給ふ、物の音ども哀れにをかしく聞ゆれば、涙をうけ給ひて、

うちすて、つがひさりにし水鳥のかりのこの世にたち後れけん、心づくしなりやと、目押しのごひ給ふ。」

同

(更科日記)

菅原孝標女

御前にふしてきけば、池の鳥どものよもすがら、聲々はぶささるわぐ音のするに、目もさめて、

わがごとぞ水のうきねにあかしつゝうは毛の霜をはらひわぶなる
とひとりぢちたるを、傍に臥し給へる人聞きつけて、

まして思へ水のかりねのはどだにぞうはげの霜をはらひわびける

同 (枕草紙三)

清少納言

水鳥は、鴛鴦いとあはれなり、互に居かはりて、羽のうへの霜を拂ふ
らんなどいとかし、都鳥、川千鳥は、友まとはすらんこそ、雁の聲
は、遠く聞えたるあはれなり、鴨は、羽の霜うら拂ふらんと思ふにを
かし。」

千鳥 (狭衣物語二)

大貳三位

凄まじき物にいひおきたるしはすの月も、見る人からにや、宵すぎで
出づる影さやかに澄み渡りて、雪すこしふりたる空のけしきの、さえ
わたりたるもいひしらす心細げなるに、さよ千鳥さへ妻よび渡るに、
貫之が妹がりゆけばとよみけんもうらやましくながめわび給ふ。」

鷹 (古今著聞集)

橘成季

一條院御時、御秘藏の鷹ありけり、たゞしいかにも鳥をどらざりけり
御鷹飼ども、面々にとりかひけれども、すべて鳥に目をだにかけざり
ければ、件の鷹を、栗田口十禪寺の辻につなぎて、行人に見せられけ
り、若しおのづからいふ事やあるとて、人をつけられたりけるに、た
いの直垂上下にあみがさきたるのぼり人、馬よりかりて、この鷹を立
ちまはりく見て、あはれ逸物や上なきものなり、但しいまだとりか
はれぬ鷹なれば、鳥をばよもどらじといひて過ぐる者あり、その時御
鷹飼出で、かの行人にあひて、只今のたまはせつる事少しもたがはず
是は御門の御鷹なり、しかるべくはとりかひて、叡感にあづかり給へ
といへば、このぬしとりかはんこといとやすき事なり、われならでは
この御鷹とりかひぬべき人おぼえずといへば、いと希有の事なり、速
にこのよし叡聞にいるべしとて、宿なを委しく尋ね聞きて、御鷹する
て参りて、このよし奏聞しければ、叡感ありて、即ち件の男召されて、
御鷹をたまはせけり、すべて罷り出てよくとりかひて参りたり、南殿

の池の汀に候ひて、叡覽にそへけるに、出御の後、池にすなごをまきければ、魚あつまり浮びたりけるに、鷹はやりければあはせてけり、即ち大なる鯉をとりてあがりたりければ、やがてとりてかひけり、御門よりはじめて怪み目をおどろかして、そのもゑを召し問はれければこの鷹はみさご原の鷹にて候、まづかならず母が振舞をして、後に父が藝をば仕うまつり候ふを、人そのもゑをしり候はで、今まで鳥をこらせ候はぬなり、この後は一つもよもにがし候はじ、究竟の逸物にて候なり、と申しければ、叡感はなはだしく、所望何事かある、申さんに随ふべきよしを仰せ下されければ、信濃の國みちの郡に、屋敷田園などを申しうけゝる、みちの檢校豊平とは、これが事なり、大養役にのぼりける時の事なり。

○第五節 植物

梅 (濱松中納言物語)

作者詳ならず

年たちかへりぬる朝の空は、何處もかはらぬものなれば、霞める空も鶯の音も、春やむかしとのみ思ひまがへたるにも、去年のこのころの人々の御氣色とも思ひ出づるに、哀に戀しきなぐさめに、梅の木のかぎりあると聞く山を歩いて見れば、遠くより風の吹き散らすにはひかゝりて、まことにこと木はまじらず、一度に咲きわたりて、唯しら山とぞ見ゆる、

しろたへに降りつむ雪と見えつるは梅さく山のとほめなりけり、

全 (源氏物語早蕨の巻)

紫式部

箏の御琴掻きならしつゝ、例の御心よせなる梅の香をめでおはする、しづえを押し折りて参り給へるにはひの、いとえんにめでたきを、折をかしうおぼして、

折る人の心にかよふ花なれやいろには出でずしたににはへる
とのたまへば、

見る人にかごとよせける花のえを心してこそ折るべかりけれ

わづらはしくと、戯れかはし給へり。

全 (同上若菜の巻)

紫 式 部

もゑあるたそがれ時の空に、花は去年のふる雪思ひ出でられて、枝も
撓よむばかり咲き亂れたり、もるらかに打ち吹く風に、えならず匂ひた
る御簾の内の薫りも吹き合せて、鶯さそうつまにしつべく、いみじき
おといのあたりのはひなり。

全 (更科日記)

菅原孝標女

ひろくと、物深き深山のやうにはありながら、花紅葉のをりは、四
方の山邊も何ならぬを、見ならひたるに、たゞしへなく狭き所の庭の
ほどもなく木なともなきに、いと心憂きに、向ひなる所に、梅紅梅な
と咲き亂れて、風につけてかゝり來るにつけても、住み馴れし古郷か
ぎりなく思ひ出でらる、

にはひくるとなりの風を身にしめてありし軒端の梅ぞこひしき

柳 (枕草紙十一)

清 少 納 言

三月ばかり、物忌しにどて假そめなる人の家にいきたれば、木ともな
どはかたしからぬ中に、柳といひて例のやうになまめかしくはあら
で、葉廣う見えてにくげなるを、あらぬものなめりといへば、かゝる
ものなといふに、

さかしらに柳の眉のひろどりて春のおもてをふする宿哉
とこそ見えしが。」

水邊柳 (土佐日記)

紀 貫 之

相應寺のほとりに、しばし船をとめて、さかくさだむることあり、
ある人この柳のかげの河のそこにうつれるを見てよめるうた。
さうれ浪よする紋をば青柳の影の糸して織るかぞを見る

紅 梅 (源氏物語紅梅の巻)

紫 式 部

この東のつまに、軒近き紅梅の、いとおもしらく匂ひたるを見給ひて、
御前の花心ばへありて見ゆめり(中略)この花を奉れば、うちゑみてう
らみて後ならましかばとぞ、うちも置かず御覽ず、枝のさま花房、色

も香も世の常ならず、園に匂へる紅の色にとられて、香なん白き梅に劣れるといふめるを、いと加しこくとりならべて咲きけるものかなとて、御心留め給へる花なれば、かひありてもてはやし給ふ。」

同

(辨内侍日記)

辨内侍

里に春のはじめとて、疾く咲く紅梅ありと聞かせおはしまして、折らせて参らせよと仰言ありしに、たづねに遣しければ、さかりなる枝にむすびつけて、

雲井までいともかしこく匂ふかな垣根がくれの宿の梅が枝

その花の枝を瓶にさして、萩の戸におかれて、めんくにかへされたるを、やがてぬしくの書きて、結びつけゝる。

太政大臣實氏

雲井までにはひきぬれば梅の花かきねがくれも名のみなりけり

四條大納言隆親

垣根より雲井に匂ふうれしさを色に出でゝも花ぞ見せける

冷泉大納言公相

咲きそむるかきねがくれの梅の花君が八千代のかざしにぞ折る

萬刀小路大納言公基

君が代に垣根がくれもあらはれてあまねく匂ふ梅のはつ花

權大納言實雅

雲井まで垣根の梅は匂ひけりいともかしこき春のひかりに

この數にかへすべきより、仰言ありければ、辨内侍、

雲井にて見れば色こそまさりけれうゑし垣根の宿のうめがえ

梅 (徒然草)

兼好法師

梅は白きうす紅梅、一重なるがとく咲きたるも、かさなりたる紅梅の匂ひめでたきも、みなをかし、おそき梅は櫻に咲きあひて、おぼえかとりけおされて、枝にしほみつきたるこゝろうし。」

桃 (榮花物語)

作者詳ならず

三日になりぬれば、ところくの御節供ともまゐり、いまめかしき事

ともおほく、西王母がもくのはなも、をりえたるさまおもしろく、こころよくすきもの見えたり。」

同 (濱松中納言物語)

作者詳ならず

たうくえむといふ水のはとりを見れば、岸にそひてひとへに桃の木のはるくうるはしくなみたちて、開け渡りたるさま、めもあやかなり。」

櫻 (徒然草)

兼好法師

花は一重なるよし、八重櫻は奈良の都にのみありけるを、このころぞ世に多くなり侍るなる、吉野の花、左近の櫻、皆ひとへにてこそあれ、八重櫻はことやうのものなり、いとちたぐねちけたり、植ゑずともありなん、遅櫻またすさまじ。」

同 (狭衣物語四)

大貳三位

彌生のついたち頃、齋院の御前の櫻、いみじう盛なるを、徒然なる畫つ方、みくしげあげの間にいざり出でさせ給ひて、見出ださせ給へる

に、空の色淺緑りにて、うらうらと長閑なる野邊の霞は、み垣の内までつくめれど、猶こぼれたる匂所せげなるに、この對の御前なる櫻の、匂ひえならぬかたはらに、賢木の青やかにもてはやしたるなど、外の木立には似ず、さまかはりてをかしく御覽せらるゝにつけても、明くれ御覽じなれし故郷の八重櫻、いかならんと思しめし遣りて、一重をだに今は見るまじきぞかしと、花の上には、猶口をしき御心のうちなり、

一重づゝにはひおこせよ八重櫻こちふく風の便すぐさず、など、おぼしめすも待遠なれば、女御のにきこえさせたまふ、

時しらぬ柳の枝にをりかへてよそにも花を思ひやるかな、

柳の枝につけさせ給へり、思しやるもしるく、殿の櫻は峰つゝさもかうやと見えて、ちるも盛なるもさましくめでたきを、女御は惱しき御心地のまぎらはしにも、ながめ出ださせ給ひける程に、此かはらぬ色珍らしう思されて、過ぎし方いと戀しく思し出ださせ給ひけり、

柳葉になほをりかへよ櫻花またそのかみの我身と思はん
なべてならぬ枝にさしかへてぞ奉らせ給ひける。

同 (更科日記)

菅原孝標女

三月の朔日ごろに、西山の奥なる所にいきたるに、人目も見えず、のどくと霞わたりたるに、あはれに心細く、花ばかり咲き亂れたり、里とほみあまりおくなる山路には花見にとても人來ざりけり

同 (松屋文集)

藤井高尙

いとよく晴れたる朝日の長閑なるに匂ひあひて、一際うつくしう、或は霞める月の影に心にくきに、ほのくと見ゆるが、言ひしらぬなど、他時にかゝらんやは、さるをかしき折に、又たぐひなき櫻の咲き出でたるよ、いかでかは斜ならんぞぞ。」

夜の花 (中務内侍日記)

中務内侍

夜もすがら御あそびどもあるに、いつもといひながら、廳の屋の花の梢おもしろく、秋ならぬども、身にしむばかり風もはげしき花のあた

りは、げにもきても恨みまほしき心地して、おぼつかなき程に、霞める月はしく物なくおぼえて、折からは物の音もすみのぼり面白きに、定めなく曇る村雨の空、作りいでたらんやうなり、かこち顔なるともいひぬべうながめたるに、三位、

はれくもり花のひまもる村さめに

とあれば、うちまざれつゝ、つくるひともなければ、こゝろのうちには、

あやなく袖のぬるゝ物かは

とぞおぼえし、こよひはげに春の宮居もかひある心地して、

月影にいく春経てか花も見し今宵ばかりの思ひ出でなき

名所の花 (伊勢物語)

作者詳ならず

昔惟喬の皇子と申す御子おはしましけり、山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり、年毎の櫻の花盛には、其宮へなんおはしましける。其時右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり、時世経て久しくなりにければ、其人の名忘れにけり。狩はねんごろにもせで、

酒のみつゝやまど歌にかゝれりけり、今狩する交野の落の院の櫻殊に面白し、其木のもとにあり居て、枝を折りてかざしにさして、上中下皆歌詠みけり、馬の頭なりける人の詠める、

世の中に絶えて櫻の咲かざらばはるの心はのどけからまし
となん詠みたりける、又人の歌、

散れば社いと、櫻はめでたけれ憂世になにか久しかるべき
とて、其木のもとをおちて歸るに、白暮になりぬ、御ともなる人、酒

を持せて野より出で來たり、この酒を飲みてんとて、よき所をもとめ行くに、天の川といふ所に至りぬ、皇子に馬頭おは御酒まゐる、皇子のたまひける、交野を狩りて天の川のはどりに至れるを題にて、歌よみてさかづきをさせとのたまひければ、よみてたてまつる、

狩暮し棚機つめに宿からん天のかはらに我は來にけり
と聞えければ、この歌を皇子、かへすく誦じたまひて、かへしえしたまはず、紀の有常おほんどもにつかうまつれり、それがかへし、

一年に一度きます君まてばやどかす人もあらじとぞ思ふ、

歸りて宮に入らせ給ひぬ。酒のみ物語して、主の皇子酔ひて入り給ひ
なんとす、十一日の月も隠れなんとすれば、かの馬の頭の詠める、

飽なくにまだきも月の隠るゝか山の端遁けて入れずも有なん
皇子に代りて、紀の有常、

押並て嶺もたひらに成ならん山の端なくば月も入らじを

落花 (徒然草)

兼好法師

花は盛に月は隈なきをのみ見るものかは、雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし、咲きぬべきは
世の梢、散りしはれたる庭などこそ見どころおほけれ、歌のことばか
きにも、花見にまかりけるに、はやく散り過ぎにけれども、さばる事
ありてまからでなとも書けるは、花を見てといへるに劣れることかは、
花のちり月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくなな
る人ぞ、この枝かの朶散りにけり、今は見所なしなどはいふめる、萬

の事もはじめをはりこそをかしけれ。」

梨花 (枕草紙三)

清少納言

梨花の花、世にすさまじく怪しき物にして、月にちかく、はかなき文つけなぞだにせず、愛敬おくれたる人の顔なぞ見ては、たどひにいふも實にその色よりしてあいなく見ゆるを、唐土にかぎりなき物にて、文にも作るなるを、さりとあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらののはしに、をかしき匂ひこそ、心もどなくつきたのれ、揚貴妃、皇帝の御使に逢ひて、泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帯びたりなぞいひたるは、おほろけならじと思ふに、猶いみじうめでたき事は、類あらじと覺えたり。」

山吹 (源氏物語真木柱の卷)

紫式部

三月になりて、六條殿の御前の藤、山吹のおもしろき夕ばへを見給ふにつけても、まづ見るかひありて、居給へりし御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうちすて、こなたに渡りて御覽す、吳竹のませ

に、わざとのう咲きかゝりたる匂ひ、いとおもしろし、色に衣をなごの給ひて、

思はずにゐでのなか道へたつともいはでこそふる山吹の花かほに見えつゝなごの給ふも、聞く人なし。」

藤 (源氏物語藤の裏葉の卷)

紫式部

四月のついたらちをろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲きみだれて、世の常の色ならず、たゞに見過さんこと、惜しき盛なるに、あそびなごし給ひて、暮れ行くはごのいと色まされるに、頭中將して御消息あり、一日の花のかげの對面、飽かず覺え侍りしを、御いとまわらば、立ちより給ひなんやとあり、御文には、

わが宿の藤の花こそたそがれに尋ねやはこぬはるのなごりを實にいとおもしろき枝につけ給へり、待ちつけ給へるも、心時めさせられて、かしてまり聞え給ふ、

なかしくをりやまとはん藤の枝たそがれ時のたどしくは、

と聞えて、口惜しくこそ懐しにけれ、取りなほし給へよと聞え給ふ、
 (中略)ひきつくるひて對面し給ふ、物まめやかにうべしき御物語
 は、少しばかりにて、花のけうに移り給ひぬ、春の花いづれとなく、
 皆開け出づる色ごとに、自驚かぬはなきを、心みじかく打ち捨て、散
 りぬるが、うらめしう覺ゆるころほひ、この花のひとりたちおくれ
 夏に咲きかゝるほそなん、怪しく心にく、哀におぼえ侍る、色もはた
 なつかしきもかりにもしつべしとて、打ちほゝるみ給へる、けしきあ
 りて、匂ひ清けなり、月はさし出でぬれど、花の色さだやかに、見え
 ぬ程なるをもてあそぶに、心をよせて大御酒まゐり、御あそびし給ふ、
 (中略)頭中將、花の色濃く、殊に房長さを折りて客人の御盃にくはふ
 どりてもてなやむに、大臣、

紫にかごとはかけん藤の花まつよりすぎてうれたけれども

宰相盃を持ちながら、氣色ばかり拜し奉り給ふさま、いとよしあり、
 いくかへり露けき春をすぐしきて花のひもとくをりにあふらん

頭中將に給へば、

たをやめの袖にまがへる藤の花見るひとがらや色もまさらん
 つぎ／＼に皆誦しながるめれど、ゑひのまぎれにはか／＼しからで、
 これよりまさらず。」

同 (伊勢物語)

作者詳ならず

昔、左兵衛の督なりける、在原の業平といふ人ありけり、その人の家
 によき酒ありと聞きて、殿上にありける人々飲まんとしてきにけり、
 左中辨藤原の良近といふ人をなんまらうとさねにて、その日はあるじ
 まうけしたりける、情ある人にて瓶に花をさせり、その花の中にあや
 しい藤の花ありけり、花のしなひ三尺六寸ばかりなんありける、それ
 を題にして歌よむ、よみはてがたに、あるじのはらからなるあるじま
 うけ給ふと聞きて來りければ、とらへてよませける、もとより歌のこ
 とは知らざりければ、すまひけれど、強ひてよませければ、かくなん、
 咲く花のしたにかくる、人おほみありしにまさる藤のかけかも

など、かくしもよむといひければ、大臣おほきみの榮花の盛にみまそかりて、藤氏の殊に榮ゆるを思ひてよめるとなんいひける、皆人誇らずなりにけり。」

新 樹 (松屋文集)

藤 井 高 尙

片岡のこのむかつをに椎まかばといひしふることをおもふにも、げに夏はこかげこそ、さるからにいとなつかしくて、卯月來ぬれば、青やかにしげれるに、まづ目につきてなまめかしう見ゆかし、ましてむらさめのなごりのゆふ露にぬれたるは、ひときはうつくしきに、暮ればて、はをかしきはなる燈籠の光に、淺みどりの若葉の色のことく見ゆるも、またいはんかたなし。」

卯 花 (枕草紙三)

清 少 納 言

卯の花は、品おとりて何となけれど、咲くころのをかしう、杜鵑のかけにかくるらんと思ふに、いとをかし。祭のかへさに、紫野の邊近きあやしの家もおどろなる垣根などに、いと白う咲きたることをかし

けれ、あを色の上に白き單ひとへがさねかづきたる、青朽葉あせなどにかよひて、いとをかし。」

橘 (全上)

清 少 納 言

四月うづきの晦日、五月朔日さつきなどのころはひ、橘の濃くあをきに花のいとしろく咲きたる、雨のふりたる翌朝つぎあしたなどは、世になく心あるさまにかし、花の中より實のこがねの玉と見えて、いみじきはやかに見えたるなど、あさつゆにぬれたる櫻にも劣らず、杜鵑のよすがとさへおもへば、猶更にいふべきにもあらず。」

菖 蒲 (枕草紙六)

清 少 納 言

卯月のつもごりに、長谷寺に詣つとて、淀のわたりといふものをせしかば、船に輿をかきすすんで行くに、さうぶ菖あやむなどの、末短かく見えしを、取らせればいと長かりけり、菰こものみたる船のありさしこそ、いみじうをかしかりしが、高瀬の淀には、これをよみけるなめりを見えし、三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲あやむ蒨あざるとて、

笠のいと小さきをきて、脛いと高きをのこ童などのあるも、屏風の繪によく似たり。」

杜 若 (伊勢物語)

作者詳ならず

三河の國八橋といふ所にいたりぬ、そこを八橋といふことは、水の駒手に流れ別れて、木八つわたせるによりてなん、八橋とはいへる、その澤の邊の木蔭におり居て餉くひけり、その澤の燕子花いとおもしろく咲きたり、それを見てある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅のこゝろをよめといひければ、よめる。

唐衣きつゝなれにしつましあればはるく、來ぬる旅をしぞおもふとよめりければ、皆人餉の上になみだ落してほとびにけり。」

苗 代 (更科日記)

菅原孝標女

四月晦日いた、さるべき故ありて、東山なる所へうつろふ、道のはど、田の苗代、水まかせたるも植ゑたるも、何となく青み、をかしく見えわたりたる山の、かげくら前ちかく見えて、心ばそくぞあはれなる。」

桐の花 (枕草紙三)

清少納言

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろどり、さまざまのうたれあれども、又他木もとひとしういふべきにあらず、唐土にてとくしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん心ことなり、まして琴に作りて、さまざまなる音の出でくるなど、をかしとは尋常にいふべくやはある、いみじうこそはめでたけれ。」

瞿 麥 (更科日記)

菅原孝標女

船にて渡りぬれば、相摸の國になりぬ、にしとみといふ所の山、繪よく書きたらん屏風を、立て並べたらんやうなり、片つかたは海濱のさまも、よせかへる浪の氣色も、いみじうおもしろし、唐河原といふ所も、砂子のいみじう白きを二三日ゆく、夏は倭なでしこの濃く薄く、錦をひけるやうになん咲きたる、これは秋の末なれば、見えぬといふに、猶所々にうちこぼれつゝ、あはれげに咲きわたれり、唐河原に倭瞿麥の咲きけんこそなほ、人々をかしがる。」

夕顔 (源氏物語夕貌の卷) 紫式部

むつかしげなる大路のさまを見渡し給へるに、この家の傍に、檜垣といふもの新しうして、上は半蔀四五間ばかりわけ渡して、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影數多見えてのぞく、立ちさまよふらん下つかた思ひやるに、あながちに長高き心地ぞする、いかなる者の集へるならんと、やうかはりて思さる、御車もいたうやつし給へり、前驅もおはせ給はず、誰と知らんとうち解け給ひて、少しさし覗き給へれば、門は蔀のやうなるを押しあけたる、見入れの程なく物はかなき住居を、あはれにいづこかさしてとおもほしなせば、玉の堂も同じことなり、きりかけだつものに、いと青やかなる葛の心地よげに蔓ひかゝれるに、白き花ぞおのれひとり笑の眉ひらけたる、をちかた人に物まうすとひとりとち給ふを、御隨身ついで居て、かの白く咲けるをなん夕顔と申し侍る、花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん、咲き侍りけると申す、實にいと小家がちにむつかしげなるわ

朝顔 (源氏物語寄生の卷) 紫式部

たりの、このもかのも怪しう打ちよろぼひて、むねくからぬ軒のつまごごに蔓ひ纏はれたるを、口をしの花のちぎりや、一房折て參れど給へば、この押し開けたる門に入りて折る、さすがにざれたる遣戸口に、黄なる生絹の單袴、長く着なしたる童のをかしげなる、出で來てうちまねく、白き扇のいたうこがしたるを、これに置きて參らせよ、枝もなさけなんめる花を、とて取らせれば、門あけて惟光の朝臣の出で來たるして奉らる。」

常よりもやがてまどろまず、明し給へるあしたに、霧のまがきより、花の色々おもしろく見えわたる中に、朝顔のはかなげにまじりたるを、猶殊にめどまる心地し給ふ、あくるまさをとてか、常なき世にもなすらふるが、心苦しきなんめりかし、格子も明けながら、いと假初にうち臥しつゝ、明し給へば、この花の開くる程をも、唯一人のみぞ見給ひける。」

薄 (枕草紙三)

清 少 納 言

秋の野のおしなべたるをかしさは、薄すすきにこそあれ、穂ほさきの蘇す枋はにい
と濃のかさの、朝霧あさぎりにぬれうち靡なきたるは、さばかりの物やはある、
秋のはてぞいと見どころなき、いろ／＼に亂れ咲きたりし花の、かた
もなく散りたる後、冬の未ままで頭かぶいと白く、おほせられたるをも知らで
昔思むかしひ出でし題だいになびきて、かひろぎ立てる人にこそ、いみじう似た
んめれ、よそふる事ありて、それをしもこそ哀れとも思ふべけれ。」

女郎花 (狭衣物語四)

大 貳 三 位

御前の花さかりに咲き亂れて、夕霧ゆふぎりおもたげにてひもとさわたしたる、
いろ／＼いづれともなく見おきがたき中にも、女郎花ぢやうがの人の見る事や、
くるしからん、霧きりのたえま、わりなげなるけしきにて、立ちかくれた
るは、猶いと過ぎがたく思召おもさる、

立かへり折らで過すにき女郎花ぢやうが猶なほやすらはん霧きりのまがきに

とながめ入らせ給へる、御かたちの夕ゆふばえ、猶いとかくるためしはあ

萩 (枕草紙三)

清 少 納 言

らじと見えさせ給ふ。」

萩はぎはいと色ふかく、枝えだたをやかに咲きたるが、朝霧あさぎりにぬれて、なよ／＼
とひろどりふしたる、牡鹿さむしかの分わかきてたちならすらんも、心こころことなり。」

稻 蒨 (枕草紙十)

清 少 納 言

八月晦つぎ日がたに、水みづ秦あまにまうづと見れば、穂ほに出でたる田いに、人多く
さわぐ、稻蒨いなづまるなりけり、早さ苗なへとりしかいつのまにとはまこと、實みに
さいつころ賀が茂もに詣よつとて見しが、哀あはれにもなりにけるかな、これは女
もまじらず、男おとこの片手かたてに、いと赤あかき稻いの穂ほもとは青あおきを蒨あざりもちて、刀かたな
か何かあらん、もとを切るさまのやすげに、めでたきことにいとせま
はしく見ゆるや、いかでさすらん、穂ほをうへにて並ならみ居いる、いとをか
しう見ゆ。」

菊 (四季物語)

鴨 長 明

菊はその名くさくあれど、そがいに立てる曾我菊そがなど、そこらけき

色あはひは、帝の御目にとまる御事よ、櫻は平城の帝の御惠に物せしかども、異様の花の中には、後れて咲き出でぬれば、弟だつものから、草の名も神さびて、翁草とか、濱成の御許は翫ばしき、八日の夕つ方より、典藥寮露をつけて、宮内卿に傳へて奉れば、藏人頭瓶にもりて、露ながら奉り、つとめての宴に、めでたう逢ひぬるもやうかはりたり、列見のためし、やんごとなき花なれば、一本一つの花の莢にさへ、五百年の齡を保てりし翁草、遼東の豚の子はづかしかりぬべし。」

同 (榮花物語)

作者詳ならず

ところづくの草前裁うち霜枯れていかにぞやあるに、一本菊むらぎくなどの、あるは盛りに、あるはうつろひたる、また花のなきはどなればにや、今日はいとわびしまささりぬべし。」

紅 葉 (辨内侍日記)

辨 内 侍

鳥羽殿の御所の景氣のおもしろさ、道理に過ぎたり、いろくの紅葉も、をりを得たる心地す、れうとうげます、浮べる池の汀の紅葉たど

へんかたない、髪上の内侍、勾當内侍、少將内侍なり、目ぐらし髪あげて、さまざまの内侍、おもしろくめでたき事ども見わたして、老の後の物語は、いくらも侍るべしなと言ひて、少將内侍、かたり出でん行末までの嬉しさは今日のみゆきのけしきなりけりこれを聞きて、辨内侍、

同 (更科日記)

菅原孝標女

春ころ鞍馬に籠りたり、山際かすみわたり長閑なるに、山の方より僅に薯蕷なほりもて来るもをかし、出る道は花も皆散りはてにければ、何ともなきを、十月ばかりにまうづるに、道の程の山の氣色、此頃はいみじうぞまさる物なりける、山の瑞錦をひろげたるやうなり、たぎりて流れ行く水、水晶を散すやうに湧きかへるなど、いづれにもすぐれたり、まうでつきて僧坊にいさつきたる程、かきしぐれたる紅葉の類なく見ゆるや、

奥山の紅葉の錦外よりもいかにしぐれてふかく染めけん
とぞ見やらるゝ。」

落葉 (更科日記)

菅原孝標女

十月晦日がたに、あからさまに來て見れば、こぐらう茂れりし木の葉
ども、のこりなく散りみだれて、いみじくあはれげに見え渡りて、心
地よげにさいらき流れし水も、木の葉にうづもれて、跡ばかり見ゆ、
水さへにすみ絶えにけり木の葉ちるあらしの山のこゝろぼそさに

松 (四季物語)

鳴長明

唯松のみ千年の操ありはし、色は六位の袖に思ひたどられて、秦の
るし色とはいへども、さもなきつらだましひ、かへりては佛の御心に
も違へつべく思ひなされ、唐土にありけん、齡千年を保つならはし、
人のみ物おぼえぬ。」

もづる葉 (枕草紙三)

清少納言

樛のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う清げなるに、思ひか

けず似るべくもあらず、萱の赤うさらしくしう見えたるこそ、賤けれ
どもをかしけれ、なべての月ころは露も見えぬもの、十二月の晦日
にしも時めきて、亡人のくひ物にもしくにやと哀れなるに、又齡延ぶ
る齒固めの具にもしてつかひたぬめるは、いかなるにか、紅葉せん世
やといひたるものもし。」

○第六節 邸園

居所 (徒然草)

兼好法師

家のつくりやうは夏をむねとすべし、冬はいかなる所にもすまる、暑
き頃わろき住居は堪へがたきものなり、深き水はすいしげなし、浅く
て流れたる遙にすいし、こまかなるものを見るに、遣戸は蔭の間より
もあかし、天井の-highきは冬寒くともしびくらし、造作は用なき所をつ
くりたる、見るもおもしろく、よろづの用にもたちてよしとて、人の
さだめあひ侍りし。」

隠れ家 (方丈記)

鴨 長明

いま日野山の奥に、跡をかくして後、南に假の日かくしをさし出して、竹の簀子すのこを敷き、その西に關伽棚かたがたなだを作り、中には西の垣を添へて、阿彌陀の畫像を安置しまつりて、落日を請けて、眉間のひかりとす、かの帳のとびらに、普賢並に不動の像をかけたり、北の障子の上に、ちいさき柵かまへて、黒き皮籠かわかご三四合を置けり、すなはち和歌、管絃、往生要集おんしやうじふごときの抄物を入れたり、傍に箏、琵琶、おのゝく、一張をたつ、いはゆるをり箏、つぎ琵琶これなり、東にそへて、わらびのほを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす、東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり、枕の方に爐あり、これを柴折たきりくふる便とす、庵の北に少地をしめ、おはらなる姫垣を圍ひて圍とす、すなはちもろくの藥草をうるたり、假の庵のありさまかくのことし。

同 (全上)

鴨 長明

その家のありさまよのつねにも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が

庵室 (平家物語灌頂の卷)

作者詳ならず

内なり、所を思ひ定めざるが故に地をしめて造らず、土居を組み打ち、おほひを葺きて、繼目つぎめごとの掛金をかけたり、もし心に叶はぬことあらば、安く外に移さんがためなり、その改め造る時、いくばくの煩ひわづらひもある、積むところわづかに二輛なり、車の力をむく、ゆる外は、更に他の用途もちいらす。

女院の御庵室を窺のぞむるに、軒には蔦あさがは、這ひかゝり、しのぶ交りの忘れ草、瓢箪ひょうたん屢しばしばむなし、草顔くさご満が巷にしげし、藜蘆れいろう深くござせり、雨原あまの憲がとぼそを濕すともいひつべし、すぎのふきめもまばらにて、時雨も露もおく霜も、洩る月影に争ひて、たまるべしとも見えざらけり、後は山前は野べ、い笹をさしに風さわぎ、世に絶えぬ身のならひとて、うきふし茂き竹柱、都の方の音づれば、間遠まのに結むすべるませ垣かきや、僅に言ふものとは、峯に木傳きでんふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、是等が音づれならでは、まさきのかづら青つら、來る人稀なる

所なり、(中略)さてかなたこなたを叡覽あるに、庭の千草霧重く、籬に倒れかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、しぎ立つひまも見え分かず、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします、中尊の御手には、五色の糸をかけられたり、左に普賢の畫像、右にせんたうくわしやう、並に先帝の御繪をかけ、八軸の御文、九てう御書も置かれたり、蘭麝の匂ひに引きかへて、香の烟ぞ立ちのぼる、かのしやうみやう居士の方丈の室内に、三万二千の床を並べ、十方の諸佛を請し給ひけんも、かくやとぞ覺えける、障子には諸經の要文ども色紙もて書きて、所々におされたり、その中に大江の定元法師が、せいりやうせんにて詠じたりけん、せいが遙に聞ゆこらんのう、しやうしも來迎すあく室の前、ともかくれたり、少し引きのけて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきやみ山の奥にすまゐして雲井の月をよそに見んとは
さて傍を叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御筭に麻の御衣、紙の

ふすまなどかけられたり、さしも本朝漢土の妙なる類敷をつくし、綾羅錦繡の装ひ、さながら夢にぞなりにける、法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼりける。」

前 裁 (源氏物語少女の卷)

紫 式 部

八月には、六條の院造りはて、渡り給ふ、坤のまちは中宮の御古宮なれば、やがておはしますべし、辰巳には殿のおはすべきまちなり、良は東の院に住たまふ臺の御方、乾のまちは明石の御方と、おぼしおきてさせ給へり、もとありける池山をも便なき所なるをばくつしかへて、水の趣山のおもむきのおきてをあらためて、さまざまに御方々の御ねがひの心ばへをつくらせ給へり、南ひんがしは山高く、春の花の木、敷をつくしてうゑ、池のさまおもしろくすぐれて、お前近き前裁に五葉、紅梅、櫻、藤、やまぶき、岩つゝじなどやうの、春のもてあそびをばわざとは植ゑて、秋の前裁をば、むら／＼ほのかにませたり、中

宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色こかるべき植木をも植ゑ、泉の水遠くすまし、やり水の音まさるべき岩をたてくはへ、瀧おとして秋の野を遙につくりたる、其頃にあひて盛にさきみだれたり、嵯峨の大井のわたり野山、むとくにけをされたる秋なり。北のひんがしは涼しけなる泉ありて、夏のかげによれり、御前近き前栽、くれ竹、した風涼しかるべく、木だかき森のやうなる木をも、木深く面しろく、山里めきて、卯の花垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花たちはな、撫子、薔薇、くれになどやうの、花のくさくさを植ゑて、春秋の木草、その中にうちませたり、東おもては、分て馬場の御殿つくり、埒ゆひて、五月の御あそび所にて、水のはどりに菖蒲うゑしげらせて、むかひに御願して、世になき上馬をもと、のへたてさせ給へり。西の町は北おもて築わけて御藏町なり、へだての垣に、松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり、冬のはじめ朝霜のむすぶべき菊のまがき、われは顔なるは、そ原、おさおさ名も知らぬ深山木をも

木深きなどをうつしうゑたり。」

移 徒 (榮華物語)

作者詳ならず

此度は、姫宮の御方、しつらはせ給へり、綾にうすもの重ねたる紫の末濃の御凡帳をも、御帳のかたびらも同じやうにて、村濃の紐して、紺青緑青、泥などして繪がきたり、御凡帳いとさ、やかにてをかしけなり、何事もいとうつくし、大宮の御方は寢殿の東の方なり、それはいとうるはしうしつらはせ給へり、東の對は殿ばらの参り給ふ折の料なり、北の對は御めのとの内侍のすけ、又其むすめの五の宮の内侍、東宮のすけ業任朝臣の女なり、その局どもなり、西の一二の對は御くしけ殿、五の御方、一品宮の御乳母たち、女房などのつばねなり、東の對の北のはし、東おもてはさぶらひにせさせ給へり、三日のぼせめでたう打ちあげあそびてすぎぬ、一品の宮の御方のわらはべ、をかしき、やさしき、ちひさき、をさなき、めでたきなど、さまざまにつけさせ給へり、いとうつくしうす奉り、ことさらめきをかしう見えさ

せ給ふ。」

○第七節 人事

君 臣 (伊勢物語)

作者詳ならず

昔水無瀬みなせに通ひ給ひし惟喬の皇子、例の狩しにおはします、供に馬の頭なる翁つかうまつれり、日頃經て宮に歸り給ひけり、御送して、さくいなんと思ふに、大御酒賜ひ祿賜はんとて、遣はさざりけり、此馬の頭心もとながりて、

枕とて草引結ぶこともせし秋の夜とだにたのまれなくに

と詠みたる、時は彌生のつごもりなりけり、皇子おほさのもらで明し給ひてけり、かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、思の外に御髪下させ給ひて、小野といふ所に住給ひけり、睦月むつきに拜み奉らんとて、まうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し、しひて御室にまうで、拜み奉るに、つれづれといと物悲しくて、おはしましければ、や

久しく侍らひて、古の事なと思ひ出で聞えけり、さても侍らひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、えさふらはで夕暮に歸るとて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏分けて君を見んとはとてなん、泣くく來にける。」

親 (更科日記)

菅原孝標女

親となりなば、いみじうやんむとなく、我身もなりなんと、唯行くべき事を、うち思ひ過すに、親からうじて、遙に遠き東あづまになりて、年どろはいつしかと思ふやうに、近き所になりたらば、まづ胸あくばかりかしづきたて、率てくだりて、海山の氣色も見せ、それをばさるものにて、我身よりも高うもてなしかしづきて、見んこそ思ひつれ、われも人も、宿世のつたなかりければ、ありくとも、遙なる國になりたり、幼かりし時、東の國に率て下りてだに、心ちもいさゝかあしければ、これをやこの國に見捨て、惑はんとすらんと思ふ、人の國

のおそろしきにつけても、我身ひとつならば、やすらかならましを、所せうひき具して、いはまはしき事もえ言はず、せまほしき事もえせずなほあるが佗しうもあるかなど、心をくだきしに、今はまいて、成人になりたるを率て下りて、わが命も知らず、京の中にてさすらへんは、例の事、東の國、田舎人になりて惑はんはいみじかるべし、京とても、たのもしう迎へ取りてんと思ふ類親族もなし、さりとして、わづかなりたる國を、辭し申すべきにもあらねば、京にとめて、長き別にて止みぬべきなり、京にもさるべきさまにもてなして、とゞめんとは思ひよる事にもあらずと、夜晝なげかるゝを聞く心地、花、紅葉のおもひも皆忘れて、悲しくいみじく思ひなげかるれど、いかがはせん。」

孝行 (古今著聞集)

橘成季

いて、や、日數ふるまゝに、老の力いよいよわたりて、今はたのむ方なく見えけり、僧かなしみの心深くして、尋ね求むれども得がたし、思ひあまりて、つやく魚とるすべもしらねども、みづから川の邊に望みて、衣にたまだすきして、魚をうかひて、はえといふちひさき魚を、一つ二つ取りてもちたりけり、禁制重き比なりければ、宮人見あひて、からめとりて、院の御所へ率て参りぬ、先づ子細をとほる、殺生禁制の世にかくれなし、いかでか其由をしらざらん、いはんや法師のかたちとして、その衣を着ながら、この犯をなすこと、一方ならぬ科遁るゝ所なしと、仰せ含めらるゝに、僧涙を流して申すやう、天下にこの制重き事、皆承る所なり、たとひ制なくとも、法師の身にて、このふるまひ更にあるべきにあらず、但我年老いたる母をもてり、只我一人の外頼めるものなし、齡長け身おとろへて、朝夕の食物たやすからず、我又家まづしく財もたねば、心の如くに養ふに力たへず、中にも魚なければ物食はず、此頃天下の制によりて、魚鳥のたぐひ、い

よく得がたきによりて、身力既によりたり、是を助けんために、心のおき所なくて、魚とる術も知らざれども、思ひのあまりに川のはたに望めり、罪に行はれん事、案のうちに侍り、但この捕る處の魚、今ははなつとも生きがたし、身のいとまゆりかたくば、この魚を母のもとへ遣して、今一度あざやかなる味をすゝめて、心安くうけ給ひおきて、いかにも罷りならんと申すに、是を聞く人々、涙を流さずといふことなし、院聞しめして、孝養の志淺からぬを、あはれみ感せさせ給ひて、さまざまの物どもを馬車に積み給はせて、ゆるされにけり、ともしき事あらば、重ねて申すべきよしをぞ、仰せられけるとなり。」

恩 愛 (全上)

橘 成 季

式部大輔大江匡衡朝臣息、式都權大輔舉周朝臣、重病を受けて、たのみすくなく見えければ、母赤染衛門住吉に詣で、七日こもりて、此度助かりがたくは、速に我命にめしかふべしと申して、七日に満ちける日、御幣のしてにかきつけ侍りける、

かはらんといのる命はをしからでさてもわかれんことをかなしきかくよみて奉りけるに、神感ありけん、舉周が病よくなりけり、母下向して、悦びながらこのやうを語るに、舉周いみじく歎きて、我いきたりとも、母をうしなひては何のいさみかあらん、かつは不孝の身なるべしと思ひて、住吉に詣で、申しけるは、母われにかはりて、命をわるべきならば、速にもとの如くわが命をめして、母を助けさせ給へど、段々のりければ、神あはれみて、御たすけやありけん、母子共に事もえなく侍りけり。」

生 産 (落窪物語)

作者詳ならず

正月十三日、いとたひらかに男子産み給へれば、いと嬉しとおぼして、若き人のがぎりして、うしろめだして、男君の御乳母むかへ給ひてうへなごのし給ひけんやうに、よろづ仕奉れとて、めづけ奉り給ふ御湯どのなごしむたり、女君のうちとけ給へるを見て、うべなりけり、男君のあだわざし給はぬと思ふ、御産やしなひ、我もくとし給へれ

と、委しく書かず、思ひやるべし、唯しるがねをのみ、よろづにした
りける、遊びの、しる、かくめでたきまゝに、衛門、いかで北の方に
知らせばやと思ふ、御乳母は、少納言、子産みあはせたりければ、せ
させ給ふ、これを寵しがり、かしづきものにし給ふ、司召に引き超え
中納言になり給ひぬ、藏人の少將、中將になり給ひぬ、大將殿は、か
けながら大臣になり給ひぬ、左の大臣の、給ふ、かく子のうまれたる
に、祖文、父、よろこびをする、かしこき子なりと申し給ふ。」

喪事 (源氏物語桐壺の卷) 紫式部

限われれば例の作法にをさめ奉るを、母北の方、同じ煙にもものぼりなん
と泣きこがれ給ひて、御おくりの女房の車に、慕ひ乗り給ひて、愛宕
といふ所に、いと嚴めしう其作法したるに、おはしつきたるこゝち
かばかりかはありけん、空しき御からを見る、猶おはする物と思ふ
が、いとかひなければ、灰になり給はんを見奉りて、今はなき人といた
ふるに思ひなりなんと、さかしうの給ひつれど、車より落ぬべう感ひ

給へば、さは思ひつかじと人をもてわづらひ聞ゆ、うちより御使あり、
三位の位贈り給ふよし、勅使來て其宣命讀むなん、悲しき事なりける、
女御とだにいはずなりぬるが、あかず口惜しう思さるれば、今一さ
ぎみの位をだにと、贈らせ給ふなりけり。」

哀慕 (土佐日記) 紀貫之

家にいたりて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ、聞
きしよりも増りて、いふがひなくぞばれ破れたる、家を預けたりつ
る人の心も、荒れたるなりけり、中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれ
ば、のぞみて預れるなり、さればたよりごとくに、物も絶えず得させた
る、こよひかゝること、聲高にもものはす、いとほつらく見ゆれ
ど、志をばせんぞす、さて池めいてくぼまり水つける所あり、邊に松
もありき、五年六年のうちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりに
けり、今生ひたるぞまじれる、大方皆あれにたれば、あはれとぞ人々
いふ、思ひ出でぬことなく、思ひ戀しさがうちに、この家にて生れし

女子の、もろとも、に歸らねば、いかい、はかなしき、船人も、皆、子抱きて、の、い、し、る、か、い、る、う、ち、に、猶、か、な、し、み、に、堪、へ、ず、し、て、密、に、心、知、れ、る、人、い、へ、り、け、る、う、た、

うまれしもかへらぬものを我やとに小松のあるを見るがかなしき猶わかずやあらん、又かくなん、

見し人を松の千歳にみましかばとほく悲しき別れせましや
忘れがたくくちをしき事多かれど、えつくさず、とまれかくまれ疾く破りてん。

○第八節 變 災

雷 雨 (源氏物語須磨の卷) 紫 式 部

俄に風ふき出で、空もかきくれぬ、御祓もしはて立ちさわぎたり、ひちかき雨とかふり来て、いとあわたしければ、皆歸り給はんとするに、足もとりあへず、さる心もなきに、よろづ吹散し、又なき風な

り、波いといかめしう立来て、人々の足も空なり。海のおもては、ふすまを張りたらんやうに、光り満ちて、神なりひらめく、おちかいる心地してからうじてたどり来て、かゝるは見ずもあるかな、風などは吹けど、けしきづきてこそあれ、あさましう珍らかなりと感ふに、猶止まず鳴りみちて、あめのあしあたる所、通りぬべくはらめきおつ、かく世は盡きぬるにやと、心ぼそく思ひ惑ふに、君はのどやかに經うち誦じておはす、暮れぬれば神少しなり止みて、風を夜もふく。」

火 災 (方丈記) 鴨 長 明

去ぬる安元三年四月廿八日かどよ、風烈しく吹ききて静かならざりし夜、成の時ばかり都のたつみの方より火出で来りて、いぬるに至る、終には朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜が間に灰塵となりにき、火本は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で来けりどなん、吹き迷ふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く、末廣になりぬ、遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら焰を地に

吹きついたり、空には灰を吹きたてたれば、火の光りに映じて、普く紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰、飛ぶがごとくにして、一二丁を越えつゝ、移り行く、その中の人現心ならんや、或は煙にむせびて斃れ伏し、或は焰にまぐれて忽に死しぬ、或は又僅に身一つ辛くして遁れたれども、皆財を取り出づるに及ばず、七珍萬寶、さながら灰燼となりなき、その費いくばくぞ、このたび公卿の家十六焼けたり、ましてその外は數を知らず、すべて都の中三分が一に及べりぞ、男女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず、人の營みな愚なる中に、さしもき危き京中の家を作るとて、寶を費し心をなやますことは、勝れてあぢなくぞ侍るべき。」

旋 風 (全上)

鴨 長 明

治承四年卯月廿九日のころ、中御門京極のほとりより大なる旋風起りて、六條わたりまで、厳しく吹きけること侍りき、三四町をかけて吹きまぐるに、その中に籠れる家ども、大なるも小きも、一として破れざ

るはなし、さながら平に倒れるもあり、桁柱ばかり残れるもあり、又門の上を吹き放ちて、四五町が外に置き、又垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり、況てや家の内の寶、數を盡して空にあがり、檜皮葺の類、冬の木の葉の風に亂る、がごとし、塵を煙の如くに吹き立てたれば、すべて目も見えず、夥しくなり動む音に、物いふ聲も聞えず、かの地獄の業風なりとも、かばかりにはあらしとぞ覺ゆる、家の損亡せるのみならず、これを取り繕ふ間に、身を害ひて片輪づけるもの數を知らず、この風未申の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり、旋風は常に吹くものなれど、かゝることやはある、たゞごとにあらず、さるべき物のさとしかなとぞ、疑ひ侍りし。」

地 震 (全上)

鴨 長 明

元暦二年のころ、大地震ふること侍りき、そのさま尋常ならず、山崩れて川を埋め、海かたぶきて陸をひたせり、土さけて水湧きあがり、巖われて谷にまろび入り、渚こぐ船に浪にたゞよひ、道行く駒は足の

立處をまよはせり、况や都の邊には、在々所々堂舎塔廟、一として全からず、或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰立ち上りて、盛なる煙のごとし、地の震ひ家のやぶる、音、雷に異ならず、家の中に居れば、忽にうちひしげなんぞす、走り出づれば、また地われ裂く、羽なれば空へもわがるべからず、龍ならねば雲にのぼらんこと難し、おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりぞ覺え侍りし、その中にある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作り、はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りしが、俄に崩れ埋められて、あとかたなく平にうちひさがれて、二つの目なぞ、一寸ばかりうち出されたるを、父母かへて、聲もをしまさず、かなしみあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしが、子のかなしみには、猛きものも耻を忘れけりと覺えて、いとほしく道理かなぞぞ見侍りし、かくおびたしくふることは、暫時にて止みにしが、その餘波しばし絶えず、尋常に驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はな

し、十日廿日過ぎにしかば、やうく間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日ませ、二三日に一度なぞ、大かたそのなごり、三月ばかりや侍りけん、四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。むかし齊衡のころかどよ、大地震ふりて、東大寺の佛の御首、落ちなぞして、いみじきこといも侍りけれど、猶このたびには如かずとぞ、即ち人皆あぢきなきことを述べて、いさゝか心の濁も、うすらぐかと見しほとに、月日かさなり、年越えし後は、言の葉にかけて、いひ出づる人だになし。」

饑 饉 (全上)

鳴 長 明

養和のころかどよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間、世の中飢渴して、あさましきこと侍りき、或は春夏日でり、或は秋冬大風大水なぞ、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實らず、空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋かり冬收むるぞめきはなし、これによりて國々の民、或は地を捨て、堺を出で、或は家をわすれて山に住む、種

々の御祈禱始りて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にその効なし、京の習慣何わざにつけても、源は田舎をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやは操を作りあへん、念じわびつゝ、さまざまの寶物、かたはしより捨つるが如くすれども、更に目みたつる人もなし、たましく易ふる者は、金を軽くし、粟を重くす、乞食道の邊に多く、愁ひ悲しむ聲耳にみたり、さきの年かくの如く、辛くして暮れぬ。明くる年は、立ちなほるべきかと思ふに、剩へ疫病うちそひて増るやうに跡方なし、世の人皆飢え死にければ、日を経つゝ、窮り行くさま、少水の魚のたどひに叶へり、終には笠うち着、足ひきつゝみ、よろしき姿したるもの、一向家ごとに乞ひありく、かくわびしれたるものども、歩くかと思れば則ち斃れ死ぬ、築地のつら、路頭に飢え死ぬる類は數も知らず、取り捨つるわざもなければ、臭き香世界にみちゝて變り行くかたちありさま、目もあてられぬこと多かり、况や河原などには、馬車の行きちがふ道だになし。賤、山がつも、力盡きて、薪に

さへ乏しくなりゆけば、頼むかたなき人は、みづから家を毀ちて、市に出で、賣るに、一人が持ち出でたる價、猶一日が命を支ふるだに及ばずとぞ、怪しき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白金黄金の箔など所々につきて見ゆる、木のわれあひまじれり、これを尋ねれば、術なき者の、古寺に至りて佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、わりくだけるなりけり、濁惡の世にしも生れ逢ひて、かゝる心しうわざを見侍りし。又あはれなること侍りき、さり難き女男など持ちたるものは、その思ひ増りて、志深きは必先ちて死しぬ、その故は、我身をば次にして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たましく乞ひ得たる物を、まづ讓るによりてなり、されば父子あるものは定める事にて、親を先ちて死にける、また母が命つきて臥せるをも知らずして、いとけなき子のその乳房に吸ひつきつゝ、臥せるなともありけり。仁和寺に、悲尊院の大藏卿隆曉法師といふ人、かくしつゝ、數しらす死悲みて、聖を數多談ひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書

きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける、その人数を知らんとて四五兩月が間數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四万二千三百餘なんありける、況やその前後に死ぬるもの多く、河原、白河、西の京、もろくの邊地なぞを加へていは、際限もあるべからず、いかにいはんや、諸國七道をや、近くは崇徳院の御位るとき、長承のころかよ、かゝる例はありけると聞けど、その世のありさまを知らず、まのあたりいとめづらかに、かなしかりしことなり。」

名立崩 (東遊記)

橋 南 鑑

越後の國糸魚川と直江津との間に名立といふ驛あり、上名立下名立と二つに分れ、家數も多く屋建も大にして、此邊にしては繁昌の所なり、上下ともに南に山を負ひて、北海に臨みたる地なり、然るに今年より三十七年以前に、上名立のうしろの山、二つにわかれて海中に崩れ入り、一驛の人馬雞犬、ことごとく海底に没入す、其われたる山の跡、

今にも草木無く、眞白にして壁のごとく立てり、余も此度下名立に宿して、所の人にそのありし事をも尋ぬるに、皆々舌をふるはしていへるは、名立の驛は海邊の事なれば、惣じて漁獵を家業とするに、その夜は風静にして天氣殊によくありしかば、一驛の者ども夕暮より船を催して、鱈の類を釣りに出でたり、鱈の類は沖遠くて釣ることなれば、名立を離る事八里も十里も出で、皆々釣り居たるに、ふと北方の空を顧みれば、名立の方角と見えて、一面に赤くなり、おびたしく火事と見ゆ、皆々大に驚きすはや我家の焼け失せぬらん、一刻も早く歸るべしといふより、各我一と舟を早めて家に歸りたるに、陸には何のかはりたることもなし、此近きあたりに火事ありしやと問へば、さらにその事なしといふ、みなくあやしみなながら、まづく目出たしなといひつゝ、圍爐裏の側に茶なごのみ居たりしに、時刻はやうく夜半過ぐる頃なりしが、いづくとももなく只一つ大なる鐵鉋を打ちたるごとき音聞えしに、その跡はいかなりしか知るものなし、

その時うしろの山二つにわけて海に沈みしとぞおもはる、上名立の家は一軒も残らず、老少男女牛馬雞犬までも海中のみくづとなりしに、その中に只一人ある家の女房、木の枝にかゝりながら波の上に浮みて、命たすかりぬ、ありし事共皆此女の物語にて、鐵砲のごとき音せしまでは覺え居しが、その夜は只夢中のごとくにして、海に沈みし事もしらざりしとぞ、誠に不思議なるは、初の火事の如く赤くみえしことなり、それもゑに一瞬の者ども残らず歸り集りて死に失せしなり、もし此事無くば、男子たる者は、大かた釣りに出でたりしことなれば、活き残るべきに、一つ所に集めて後崩れたりしは、誠に因果とやいふべき、あはれなることなりと語れり、余その後人に聞くに、大地震すべき地は、遠方より見れば、赤氣立ちのぼりて、火事のごとくなるものなりと云へり、松前の津波の時、雲中に神佛飛行し給ひしなどいふことも、此たぐひなるべしや。」

○第九節 日紀記行

茅渚の海 (土佐日記)

紀 貫 之

二月朔日、朝の間雨降り、午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出でて漕ぎ行く、海の上昨日の如くに、浪風見えず、黒崎の松原を経て行く、所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くにしろく、貝の色は蘇枋にて、五色に今ひとつ足らぬ、この間に、今日は箱の浦といふ所より、綱手ひきて行く、かく行くあひだに、ある人の詠める歌、

玉くしげ箱のうらなみた、ぬ日は、海をかゝみとたれか見ざらん
又船君のいはく、この月までなりぬることとて、歎きて、苦しさに堪へずして、人もいふこととて、心やりに云へる歌。

ひく船の綱手のながき春の日をよそかいかまで我はへにけり
聞く人の思へるやう、なぞたゞごとなる密にいふべし、船君の辛く

ひねり出して、ふと思へる事を、えしもこそしひへとて、さゝめきて
やみぬ、俄に風なみたかければ、とままりぬ。

二日、雨風止まず、日ひとひ、夜もすがら神佛をいのる。

三日、海のうへ昨日のやうなれば、船いださず、風の吹くことやまね
ば、岸の浪たちかへる、これにつけてよめる歌、

緒をよりてかひなきものは落ちつゝもる涙のたまをぬかぬなりけり
かくて、今日も暮れぬ、

四日、楫取、けふ風雲のけしきはなはだあしといひて、船いださずな
りぬ、然れども終日に浪風たゝす、この楫取は、日も得計らはぬかた
るなりけり、この泊の濱には、くさくさの麗しき貝石など多かり、か
れば、唯昔の人をのみ戀ひつゝ、船なる人の詠める、

よする浪うちも寄せなんわが戀ふる人わすれ貝おりてひろはん
といへれば、ある人堪へずして、船の思ひやりによめる、

わすれ貝ひろひしもせし白玉を戀ふるだにもかたみと思はん

となんいへる、女兒のためには、親をさなくなりぬべし、玉ならずも
ありけんぞ、人いはんや、されども死にし子、顔よかりさといふやう
もあり、猶おなじ所に、日を経ることを歎きて、ある女のよめるうた、

手をひて、寒さも知らぬ泉にぞ汲むとはなしに日頃經にける

五日、けふ幸くして、和泉の灘より、小津のどまりをおふ、松原目も
はるく、なり、かれこれ苦しければ、詠めるうた、

ゆけぞなは行きやられぬはいもがうむをつの浦なるさしの松原

かくいひつゝくる程に、船疾くこげ、日のよきにと催せば、楫取、船
子どもにいはいはく、御船より仰せ給ふなり、あさぎたの出で來ぬさきに
綱手はやひけといふ、この詞の歌のやうなるは、楫取のおのづからの
詞なり、楫取はうつたへに、われ歌のやうなる事いふとにもあらず、
聞く人のあやしく歌めきてもいへるかな、とて書きいだせれば、實に
三十文字あまりなりけり、今日浪なたちそと、人々終日に祈るしるし
ありて、風浪たゝす、

今し鷗むれ居てあそぶ所あり、京のちかづくよろこびのあまりに、あ
る童のよめる歌。

いのりくる風間かまきと思ふをあやなくに鷗さへだになみとみゆらん
といひて行く間に、石津といふ所の松原、おもしろくて濱邊遠し、又
住吉のわたりを漕ぎ行く、ある人の詠める、

今見てぞ身をば知りぬる住のえの松よりさきにわれは經にけり
こゝにむかしつ人の母、一日片時ひとひかたときも忘れねばよめる、

住の江に船さしよせよわすれ草するしありやとつみて行くべく
となん、うつたへに忘れなんどにはあらで、戀しき心地暫時しばしやすめて
又も戀ふる力にせんとなるべし、

かくいひて、ながめつゞくる間に、もくりなく風吹きて、たげどもく
しりへ退きにしどきて、ほどくしくうちはめつべし、楫取の曰く、
この住吉の明神は、例の神ぞかし、ほしき物ぞおはすらん、とは今め
くものかさて、幣ひらを奉り給へといふに隨て幣たてまつる、かく奉れど

も、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風浪の危ふければ、
楫取又いはく、幣には御心のもかねば、御船もゆかねなり、猶うれし
と思ひ給ふべき物奉り給へ、といふに隨ひて、いかゞはせんとして、眼
もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡を奉るとて、海にうちはめつれば、
くちをし、さればうちつけに、海は鏡のごとなりぬれば、或人のよめ
るうた、

ちはやふる神のこゝろをある、海に鏡を入れてかつ見つるかな
いたく住の江の忘れ草、岸の姫松なといふ神にはあらずかし、目もう
つらく、鏡に神の心こそは見つれ、楫取の心は、神の御心なりけり、
六日、濤標みをつくしのもとより出で、難波の津をきて河尻に入る、みな人々、
女をさなきもの、額に手をあて、喜ぶこと二つなし、かの船酔の淡
路の島の巨子おほいこ、京近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげて、
かくぞいへる、

いつしかにいぶせかりつる難波瀉蘆あしこぎそけて御船さにけり

いとおもひの外なる人のいへれば、人々あやしがる、これが中に心地なやむ船着、いたく愛で、船酔し給ひし御顔には似ずもあるかな、といひける、(下略)

稻荷詣 (枕草子)

清少納言

稻荷におもひおこして参りたるに、中の御社みやしろのはと、わりなくくるしきを念じてのぼるほどに、いさゝか苦しげなく、おくれてくを見えたるものども、たいもきにさきだちてまうづる、いとうらやまし、二月午まごひの日のあかつきに、いそぎしかど、坂のなからばかりあのみしかば、巳の時ばかりになりけり、やうく暑くさへなりて、まことにわびしう、かゝらぬ人も世にあらんものを、何しにまうでつらんと、泪もおつるまでおぼれれば、やすむとてゐたるに、年四十あまりなる女の、つばさうぞくなどにはあらで、たい引はこえたるが、まろは七度まうでし侍るなり、三度はまうでぬ、今四度はことにもあらず、ひつじには下向しぬべしと、道にあひたる人に、うちいひかけて下りゆ

きしこそ、たいなる所にては、目もとまるまじき事の、かれが身にた
い今ならばやとおぼえしか。

足柄と富士 (更科日記)

菅原孝標女

足柄山と云ふは、四五日かねて恐ろしげに暗がり渡れり、やうく入りたつ麓のほどに、空の景色はかたくしくも見えず、得もいはす茂り渡りていと恐ろしげなり、麓に宿りたるに月もなく、暗き夜の闇に惑ふやうなるに、遊び三人、何くよりともなく出できたり、五十ばかりなる一人、二十ばかりなる、十四五なるとあり、菴の前に傘さして居るたり、男ども火を燈して見れば、昔こばたと云ひけんが孫といふ、髪いと長く額いとよくかゝりて、色白くきたなげなく、さても有りぬべき下仕なとにもありぬべしなど、人々哀れがるに、聲すべて似るものもなく空に澄み登りて、めでたく歌をうたふ、人々いみじう哀れがりて、け近くて人々もて興するに、西國の遊びはえかゝるらじなと云ふを聞きて、難波わたりにくらぶればと、めでたく歌ひて、

さばかり恐ろしげなる山中にたちて行くを、人々飽かず思ひて皆泣く
 を、幼き心地にはまして、此宿を立たんことさへ飽かず覺ゆ、又曉よ
 り足柄を越ゆ、まいて山の中の恐ろしげなる事云はん方なし、雲は足
 の下に踏まる、山のなからばかりの木の下にわづかなるに、葵の唯三
 筋ばかりあるを、世ばなれてかゝる山中にしも生ひけんよと、人々哀
 れがる、水は其山に三所に流れたり、辛うじて越え出で、關山にさま
 りぬ、是よりは駿河より、横走りの關の傍に岩壺と云ふ所あり、得も
 云はず大なる石の、四方なる中に、穴の明きたる中より出づる水の、
 清くつめたき事限りなし、富士の山は此國なり、我生ひ出でし國にて
 は西面に見えし山なり、其の山の様いと世に見えぬ様なり、様異なる
 山の姿の紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば
 色濃き衣に白き袖きたるやうに見えて、山の巔のすこし平らぎたるよ
 り、烟は立ち登る、夕暮は火の燃え立つと見ゆ、富士川と云ふは富士
 の山より落ちくる水なり、其國の人の出で、語るやう、一とせ頃物に

まかりたりしに、いと暑かりしかば、此水の面に休みつゝ見れば、川上
 のかたより黄なるもの流れ来て、物につきてとゞまりたるを見れば反
 古なり、取りあげて見れば黄なる紙にして濃くうるはしく書かれたり、
 怪しく見れば、來年なるべき國をも、除目のこと皆書きて、此國來年
 あくべきにも守なくて、又添へて一人をなしたり、怪しあさましと思ひ
 て取り上げて乾して收めたりしを、歸る年の司召に、此文に書かれたり
 し一つ違はず、此國の守とありしまゝなるを、三月の中になくなりて、
 又なり代りたるも、此傍に書きつけられし人なり、かゝる事なんあり
 し、來年の司召などは、今年此山にそこばくの神々集りて、ない給ふ
 なりけりと見給へし、めづらかなることにはさぶらふと語る、清見が關
 は、片つ方は海あるに、關屋も數多ありて、海までくぎぬきたり、
 烟りあふにやあらん、清見が關の浪も高くなりぬべし、面白き事限り
 なし、田子の浦は浪高くて船にて漕ぎぬぐる、沼尻といふ所もするす
 ると過ぎて、大井川と云ふ渡あり、水の世の常ならず、すりこなを
 濃くて流したらんやうに、白き水早く流れたり、いみじくわづらひ出

で、遠江にかゝる、小夜の中山なぞ越えけん程も覺えず、いみじく苦しければ、天龍といふ川の面に假屋造り設けたりければ、そこにて日頃過ぐる程にぞ、やうくおこたる、冬深くなりたれば、河風烈しく吹き上げつ、堪へがたく覺えけり、其渡りつ、濱名の橋に着いたり、濱名の橋、下りし時は黒木を渡したりし、此度は跡だに見えねば船にて渡る、入江のいたづらなる洲どもにこそものもなく、松原の茂れる中より浪の寄せかへるも、いろくの玉のやうに見え、實に松の末より浪は越ゆるやうに見えて、いみじく面白し、それより上は井の鼻といふ坂の、得も云はずわびしきを登りぬれば、三河の國の高師の濱といふ、八幡は名のみして橋のかたもなく、何の見所もなし、二村山の中に泊りたる夜、大なる柿の木の下に菴を作りたれば、一夜菴の上には柿の落ちかゝりたるを、人々拾ひなぞす、宮路の山と云ふ所越ゆるほど、十月晦日なるに、紅葉して盛なり、

嵐こそ吹きこざりけれ宮路山までもみぢ葉の散らでのこれる

三河と尾張となるしかすがの渡、實に思ひ煩ひぬべくをかし、尾張の國鳴海の浦を過ぐるに、夕沙たい満ちに満ちて、今宵宿からんもちうげんに、沙満ち來なばこゝをも過ぎじと、ある限り走り惑ひ過ぎぬ、美濃の國なる境に洲股といふ渡りして、野上といふ所に着きぬ、そこに遊びども出で来て、一夜歌うたふに、足柄なりし思ひ出でられて哀れに戀しきこと限なし、雪ふり荒れ惑ふに、物の興もなくて、不破の關あつみの山なぞ越えて、近江の國沖中と云ふ人の家に宿りて、四五日あり、みつさか山の麓に、夜晝時雨霰降り亂れて日の光もさやかならず、いみじうもむつかし、そこを立ちて犬上、神崎、やす、くるもと、なぞ何となく過ぎぬ、湖の面はるばるとして、なで島、竹生島、なぞ云ふ所々の見えたる、いと面白し、瀬多の橋皆崩れて渡り煩ふ、栗津にとまりて、十二月の二日京に入る、暗く行き着くべしと、申の時ばかりに立ちて行けば、關近くなりて山づらに、かりそめなるさりかけと云ふ物したる上より、丈六の佛の、未だ荒作りにおはすが、顔

ばかり見やられたり、哀れに人ばなれて、いづくともなくおはする佛かなど、打見やりて過ぎぬ、こゝらの國々を過ぎぬるに、駿河の清見が關と逢坂の關ばかりはなかりけり、いと暗くなりて、三條の西なる所に着きぬ。

石山詣 (蜻蛉日記)

藏原道綱母

石山に十日ばかりと思ひ立つ、忍びてと思へばちからといふばかりの人にも知らせず、心一つに思ひ立ちて、明けぬらんと思ふほどに出で走りて、加茂川のほとりばかりなほにぞ、いかで聞きあへつらん、追ひてものしたる人もあり、有明の月はいとあかけれど、逢ふ人もなし、河原には死人も伏せりと見聞けど、恐ろしくもあらず、粟田山といふほどに行きざりて、いと苦しきをうちやすめば、ともかくも思ひわかれず、唯涙ぞこぼる、人や見ると涙はつれなしづくりて、たい走りて行きもて行く、山科にて明けはなるにぞ、いとけせうなる心地すれば、あれか人かにおぼゆる、人は皆おくらかし先だてなほして、

かすかにて歩みいけば、逢ふ者見る人あやしげに思ひて、さゝめき騒ぐぞいとわびしき、からうじていき過ぎて、走井にてわりをなほものすどて、幕引きまはしてどかくするほどに、いみじくの、しるもの來、いかにせん誰ならん、供なる人見知るべき物にもこそあれ、あないみじと思ふほどに、馬に乗りたる者あまた、車二つ三つひき續けての、しりてく、若狭の守の車なりけりといふ、立ちも止まらで行き過ぐれば、思ふ事なげにても行くかな、さるは明暮ひざまづきありく物ぐして行くにこそはあめれと思ふにも、胸さくる心地す、下衆ども車のくちにつけるもさあらぬも、此幕近く立ちよりつゝ、とめ見さわぐ、ふるまひのなめうおぼゆる事物に似ず、我供の人わづかに有る、立ちのきてなほいふめれば、例も往來の人よる處とはしり給はぬか、とがめ給ふはなほいふを見る心地は、いかゝある遣り過して今は立ちて行けば、關うち越えて打出の濱に死にかへりて至りければ、先立ちたりし人、船に菰屋形引きて設けたり、物もおぼえずはひ乗りたれば、はる

くも出だして行くほど、心地いとわびしくも苦しうも、いみじう物悲しう思ふことたぐひなし、申の終りばかりにて、寺の中につきぬ、齋屋に物なと敷きたりければいきて伏しぬ、心地せん方知らず苦しきまゝに、ふしまるびてが泣く、夜になりて湯なとものして、御堂にのぼる、身のあるやうを佛に申すにも、涙にむせぶ、とかくいひもやられず、夜うちふけて外の方を見出だしたれば、堂は高く下は谷と見えたり、高き軒に木も生ひこりていと木闇かりける、廿日月夜更けていとあかるければ、木陰にもりて、ところくくに来し方を見えわたりたる、見おろしたれば、麓にある泉は鏡のごと見えたり、高欄におしかゝりてとばかりまもりぬれば、片岸に草の中にそよく鳴らしたるもの、あやしき聲するを、何ぞと問ひたれば、鹿といふなりといふ、なとか例の聲には鳴かざらんと思ふほどに、さしはなれたる谷の方よりいとうらわかき聲に遙かにも鳴きたんなり、聞く心地そらなりといへばおろかなり、思ひ入りて行ふ心地、物おぼえて猶あれば、見やりな

る山のあなたばかりに、田守の物おひえる聲、いふかひなく情なげにうち呼ばひたり、斯うしも取り集めて肝をくだく事多からんと思ふははてはあきれてぞ居たる、さて後夜おこなひつれて下りぬ、身よわければ齋屋にあり、夜の明くるまゝに見やりたれば、東に風はいとのどかにて、霧立ちわたり、川のあなたは書に書きたるやうに見えたり、川づらに放ち馬とものあさりありくも、遙かに見えたる、いとあはれなり。

あづま路 (十六夜日記)

阿 佛 尼

栗田口といふ所より車はかへしつ、ほどなく逢坂の關越ゆるほどに、さだめなき命は知らぬたびなれとまたあふ坂とたのめてぞゆく野路といふ所は、來しかたゆくさきの人も見えず、日は暮れかゝりて、いと物かなしと思ふに、時雨さへうちそとぐ、

うちしぐれ故郷おもふ袖ぬれてゆくさきとほき野路のしのはら
 今宵は、鏡といふ所に着くべしとさだめつれど、暮れはて、行き着か

ず、守山といふ所に着くべしとさだめつれど、暮れはて、行き着かず、いといなほ袖ぬらせとや宿りけん間なくしぐれのもる山にしも今日は十六日の夜なりけり、いと苦しくて臥しぬ、いまだ月の光は、かすかに残りたる曙に、守山を出で、行く、野洲川わたるほど、さきだちて行く旅人の、駒の足音ばかりさやかにて、霧いとふかし、

旅人はみなもろともに朝立ちてこまうちわたす野洲のかはざり十七日の夜は、小野の宿といふ所にとまる、月出で、山の峰に立ちつゝいきたる松の木の間、けぢめ見えていとおもしろし、こゝは夜ふかき霧の迷にたどり出でつ、醒井といふ水、夏ならばうち過ぎまじやと思ふに、歩人は猶立ちよりて汲むめり、

むすぶ手に濁るこゝろをすゝぎなばうき世の夢やさめが井の水十八日、美濃國關の藤川わたるほどに、まづ思ひつゝけける、

わが子ども君につかへんためならでわたらましやは關のふじ川不破の關屋の板廂は、今もかわらざりけり、

ひまおほき不破の關屋はこのほどの時雨も月もいかにもるらん關よりかきくらしつる雨、時雨に過ぎて降くらせば、道もいとあしくて、心より外に、笠縫の驛といふ所に、暮れはてぬとこいまる、

たび人はみうちらはらふもふぐれの雨にやどかるかさぬひの里

十九日、又こゝを出で、行く、終夜ふりける雨に、平野かやいふほど道いとわろくて、人通ふべくもあらねば、水田の面をぞ、さながら渡り行く、明くるまゝに、雨は降らずなりぬ、晝つかた過ぎ行く道に、目に立つ社あり、人に問へば、結ぶの神とぞきこゆるといへば、

まもれたちぎりむすぶの神ならば、解けぬうらみに我迷はさで、洲俣とかやいふ川には、船を並べて眞辟の繩にやあらん、かけとめたる浮橋あり、いと危ふけれど渡る、この川、堤のかたはいと深くて、かたゝは浅ければ、

片浦のふかきこゝろはありながら人目づゝみにさぞせかるらん
かりの世のゆきと見るもはかなしや身を浮船を浮橋にして

とぞ思ひつゞけける、又一宮といふ社を過ぎて
 一の宮名さへなつかしふたつなくみつなき法を守るなるべし
 二十日尾張國下戸といふ驛を行く、よきぬ道なれば、熱田の宮へ参り
 て、硯取り出で、書きつけて奉るうた、

いのるぞよ我おもふことなるみ瀉かたひくしほも神のまに
 鳴海がた和歌のうら風へだてずはおなじこゝろに神もうくらん
 みつしほのさしてぞ來つる鳴海瀉神やはれとみるめたづねて
 雨かせも神のこゝろにまかすらん我もくささのさはりあらずな
 鳴海の瀉を過ぐるに、干潮のはなれば、障りなく干瀉を行く、をり
 しも濱千鳥いと多くさき立ちて行くも、しるべかほなる心ちして、
 濱千鳥なきてぞさそふ世の中にあど、めんとはおもはざりしを
 隅田川の邊にこそ、ありと聞きしかど、都鳥といふ鳥の、嘴と足と赤
 きは、この浦にもありけり、

こと問はん嘴と足とはあかざりしわが住むかたのみやて鳥かど

二村山を越えて行くに、山も野もいと遠くて、日も暮れはてぬ、
 はるくくと二村山をゆき過ぎてなほすゑたどる野邊のゆふやみ
 八橋にとまりまらんといふ、暗きに橋も見えずなりぬ、

さゝがにのくもてあやふき八橋をゆふぐれかけて渡りぬるかな
 廿一日、八橋を出で、行くに、いとよく晴れたり、山遠き原野を分け
 ゆく、晝つ方になりて、紅葉いと多き山に向ひて行く、風につれなき
 所々、朽葉に染めかへてけり、常盤木とも立ち交りて、青地の錦を
 見るこゝちす、人に問へば、宮路山といふ、

しぐれけり染むるちしほのはてはまた紅葉の錦いろかへるまで
 山の麓野に竹のある處に、萱屋のひとつ見ゆる、いかにして、何のた
 よりにかく住むらんと見ゆ、

ぬしやたれ山のすそ野に宿しめてあたりさびしき竹のひとむら
 日に入りはて、猶物のあやめもわかぬほそに、渡津とかやいふ所に
 といまりぬ、(下略)

初瀬詣 (更科日記)

菅原孝標女

道、けんどうならぬさきにと、夜ふかう出でしかば、立ち後れたる人々も待ち、いとおそろしう、深き霧をも少しはるけんとして、法性寺の大門口にたちどまりたるに、田舎より物見にのぼる者ももの、水の流るゝやうにぞ見ゆるや、すべて道もさりあへず、物の心知りげもなき、あやしの童まで、ひきよきて行き過ぐるを、車を驚きあざみたることかぎりなし、これらを見るに、實にいかに出で立ちし道なりとも覺ゆれど、一向に佛を念じ奉りて、宇治のわたりにいき着きぬ、そこにも猶しもこなたざまにわたりする者ども立ちこみたれば、船の楫取りたる男ども、船をまつ人の數知らぬに、心をぞりしたる氣色にて、袖をかいまくりて、顔にあて、竿に押しかゝりて、頓に船もよせず、うそぶいて見まはし、いとみじうするたるさまなり、むごにえ渡らで、つくくを見るに、紫の物語に、宮治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならんぞ、ゆかしく思ひし所ぞ

かし、實にをかしき所かなと思ひつゝ、辛うじて渡りて、殿のさふらふ所の、うち殿を入りて見るにも、浮船の女君の、かゝる所にやありけんなど、まづ思ひ出でらる、夜深く出でしかば、人々困じてや、ひるうちといふ所にとまりて、物食ひなせするはせにしも、供なるものども、かうみやらの栗駒山にはあらずや、日も暮方になりぬめり、ぬしたち、調度どりはさうせよやといふを、いと物おそろしう聞く、その山越え終て、にへの池の邊へ行き着きたる程、日は山の端にかゝりにたり、今は宿されとて、人々あかれて宿もとむる、所はしたにて、いとあやしげなる下種の小家なんあるといふに、いかゞはせんとして、そこに宿りぬ、皆人々京にまかりぬとて、あやしの男二人を居たる、その夜もいもねず、この男いで入りありくを、奥の方なる女ども、なぞかくしありかるゝぞと問ふなれば、いなや、心も知らぬ人を宿し奉りて、かまはしもひきぬかれなば、いかにすべきぞと思ひて、えねでまはりありくぞかして、寝たると思ひていふ、聞くに、いとむ

くくしくをかし、翌朝、そこを立ちて、東大寺によりて拜み奉る、
 いそのかみも、誠にふりにける事思ひやられて、無下に荒れはてにけ
 り、その夜、山の邊といふ所の寺にやどりて、いとくるしけれと、經
 すこし讀み奉りて、うちやすみたる夢に、いみじくやんとなく清ら
 かなる女の、おはするにまゐりたれば、風いみじく吹く、見つけてう
 ち笑みて、何しにおはしつるぞと問ひ給へば、いかでかは參らざらん
 と申せば、そこはうちにこそあらんとすれ、はかせの命婦をこそ、よ
 くかたらはめと、の給ふと思ひて、嬉しくたのもしくて、いよく念
 じ奉りて、初瀬川なぞうち過ぎて、その夜御寺にまうでつきぬ、板な
 どしてのぼる、三日さぶらひて、曉にまかでんとてうちねぶらるるに、
 夜さり御堂のかたより、すは、稻荷より賜はるしるしの松よとて、物
 を投げ出づるやうにするに、うち驚きたれば夢なり、曉夜ぶかく出で
 、えとまらねば、奈良坂のこなたなる家を尋ねて宿りぬ、これもい
 みじけなる小家なり、こゝはけしきある所なんめり、ゆめいぬな、れ

家に立ち入りたる、障子に物かきたるを見れば、「旅衣すそ野の庵のさ
 むしろにつもるもしろき富士の白雪」と云ふ歌なり、心ありける旅人
 のしわざにやあるらんと、むかし香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり、
 冬の朝すだれをあげて峰の雪をのぞみけり、今は富士の山のあたり
 宿かる行客あり、さゆる夜をるもをかたしきて、山の雪おもへるかれ
 これも、ともに心すみておぼゆ、

さゆる夜は誰こ、にしも臥わびて高根の雪を思ひやりけん
 田子の浦にうち出で、富士の高根を見れば、ときわかぬ雪なれども
 なべていまだ白妙にはあらず、あをうして天によれり、すがた、るの
 山よりもこよなう見ゆ、貞觀十七年の冬のころ、白衣の美女ありて、
 二人、山の岑にならびまふと、都良馨が富士の山記に書きたる、いか
 なるゆゑかと覺束なし、

富士の根の風にたゞよふしら雲をわづまをとめが袖かどぞ見る
 浮島が原は、いづくよりもまさりて見ゆ、北はふじの麓にて、東西に

はるくそながき沼あり、布をひけるがごとし、山のみどりかげをひ
 たして、そらも水もひどつなり、蘆かり小舟處々に掉さして、雲の波烟
 るとりのおほくさりきたり、南は海、面どほく見わたされて、はつかに
 の浪いとふかき眺なり、すべの孤島のまなこに遮るなし、はつかに
 んばんのそらにつらなれるをのぞむ、こなたかなたの眺望、いづれも
 どり、心に心ばそし、はらははし、昔は海の上にかびて、蓬萊の三つの島
 風松の梢にむせぶ、此はら、昔は海の上にかびて、蓬萊の三つの島
 のごくとく有りけるによりて、浮島となん名づけたる、ときくにもお
 のづから神佛のすみかにもや有らんと、いとおいおくゆかしくみゆ、

かげうつす波の入江のふじの根の煙も空にうき島がはら

やがて、此原につきて、千本の松原といふあり、海のなごさ遠からず、
 松はるかにおひわたりて、みどりのかげきほもなし、沖には船ども行
 きちがひて、木のはのうけるやうにみゆ、かの千株の松の下の雙峰寺
 一葉の舟の中の萬里の身、とつくれるに、かれも是れもはづれず、眺

いかいの事あらんに、あなかしこ、おびえさわがせ給ふな、息もせで
 ふさせ給へといふを聞くにも、いとみじう、佗しくおそろしうて、
 夜を明すほど、千歳を過ぐすこちす、辛うじて明けたつほどに見れ
 ば、盗人の家なり、あるじの女、けしきある事をしてなんありけると
 いふ。

あづま路 (鎌倉紀行)

鴨 長 明

(上略)清見が關も過ぎうくて、しばしやすらへば、おきのいしむらむ
 らしほひにあらはれて、波にむせぶ。磯の鹽屋處々に、風にさそはれ
 て、けぶりなびきにけり、あづまぢのおもひともなりぬべきわたりな
 り、むかし朱雀天皇の御時、將門と云ふ者、あづまにて逆謀起しける、
 是を平げんためにうちの民部卿忠文をつかはしける、此關に至りてと
 いまりけるが、清原重藤といふもの、民部卿伴ひてぐんかんと云ふつ
 かさにて行きけるが、漁舟の火の影は、寒うして浪を焼き、驛路の鈴
 の聲は、夜山を過ぐといふ唐のうたをながめければ、涕を民部卿なが

しけりと聞くも

清見がた關とはしらで行く人も心ばかりはとめおくらん

此關遠からぬほそにおきつといふ浦あり、海にむかひたる家にやどり
てとまりたれば、磯邊によする浪の音も、身の上にかゝるやうに覺え
て終夜いねられず、

清見がた磯邊にちかきたびまくらかけぬ波にも袖はぬれつゝ、
今宵は、更にまどろむ間だになかりつる、草の枕のまるぶしなれば、
寢覺もなきあかつきの空にいでぬ、くきが崎と云ふなる荒磯の岩のは
さまをもき過る程に、おきつかせはげしきに打よる浪もひまなければ
いそぐしほひのつたひ道かひなき心ちして、はすまもなき袖のしづく
までは、かけても思はざりしたびの空ぞかしなぞ、うちながめられつ
ゝいと心ばそし、

おきつ風けさあらいその岩づたひ浪わけどろもぬれくぞゆく
蒲原といふ宿のまへを通る程に、おくれたるものまちつけんとて、ある

望いづくにも勝れたり。

見わたせばちもとの松のすゑ遠みみどりもつゞく浪のうへかな
車がへしといふ里あり、或る家に宿りたれば、網つりなほいとなむい
そもの、すみかにや、夜のやどりかごとにして、床のさむしろにかけ
るばかりなり、彼の縛戎人の夜半の旅寝もかくや有りけんぞ覺ゆ。

これぞ此つりするあまの筈びさし厭ふありかや袖にのこらん
伊豆の國府にいたりぬれば、三島の社のみしめうちをがみたてまつる
に、松のあらしこぐらくおとづれて、庭のけしきも神さびわたり、こ
のやしろは、伊豫の國三島の大明神をうつし奉ると聞くにも、能因入
道、伊豫守實綱が命によりて、歌よみてたてまつりけるに、炎旱の天
より雨暴かにふりて、かれたる稲葉もたちまちにみどりにかへりける、
あら人がみの御なごりなれば、ゆふだすきかけまくもかしこくおぼゆ、
せきかけし苗代水のながれきてまたあまくだるかみぞこの神
かぎりある道なれば、此のみぎりをも立ち出で、猶行き過ぐるほそ

に、筥ばかりなる山の中に至りて、水うみひろくたへたり、箱根の湖水となづく、亦あまのうみといふもあり、権現垂跡のもどるけだかくたうとし、朱樓紫殿の雲にかさなれるよそほひ、唐家の騁山宮かとおどろかれ、巖寶石龕の浪にのぞめるかげ、錢塘の水心寺ともいひつべし、嬉しきたよりなれば、浮身のゆくへしるべをせさせ給へなごいのりて、法施奉る次に、

今よりはおもひみだれし蘆の海のふかきめぐみを神にまかせて此山をもこえおりて、湯本といふ處にとまりたれば、太山みやまおろしはげしくうちしぐれて、谷河みなぎりまさる、岩せの浪たかくむせぶ、惕臥房のよるのさへにも過ぎたり、かの源氏の物語の歌に、「泪もよほすたきのおとや」といへる、おもひよせられておはれなり、

それならぬたのみはなきをふる郷の夢路ゆるさぬ瀧のおとかな、此しゆくをも立ちて鎌倉につく、日の夕つかた雨にはかにふり、みかさもますほそなり、いそぐ心にのみすゝめられて、大磯江島もろこし

が原なご、聞ゆる處々を、見とひむる隙もなくて、うち過ぎぬるこそ心ならず覺ゆれ、暮れかゝるほそにくだりつきぬれば、なにがしのいりどかやいふ處に、あやしの賤が庵をかりてとまりぬ、前は、道に向ひて門なし、行人征馬すだれのもとに行きちがひ、後は、山近くしてまよにのぞむ、鹿の音虫の聲、かきのうへにいそがはし、旅店の都にことなるやうかはりて心すごし、かくしつゝ明しくらす程に、つれづれもなぐさむやとて、わかえのつきしに、みうらのみさきなごいふ浦々を行きてみれば、海上の眺望あはれをもよほして、こしかたに名だかく、おもしろき處々にもおとらず覺ゆ、(下略)

長崎 (長崎紀行)

長赤水

六日、辰の刻より漕ぎ出だし、沖に出づれば順風なり、周防灘三十四里を過ぎて、夜半に豊前の田浦に着く、翌朝五つ時より押し出だす、左は豊前右は長門、相距る事僅に五六町、左の海岸に早戸茂の明神あり、毎年十二月三十日夜半、社人海中に入りて和布を茹る故、めかり

の神事と云ふ、一里程行きて右は下の關なり、前に岩龍島あり、近年小倉侯の土宮本伊織、長門侯の土佐々木岩龍、兩雄武藝を角ひ、佐々木が殺されし處、左は内裏と云ふ、昔し平家此處を行宮とす、其前に日久島あり、島の邊の石の上に與次兵衛なる者の石碑あり、昔し豊太閤朝鮮陣の時、此處を渡り給ふに、御船洲に乗り甚だ危かりし故、船頭與次兵衛自害せし處と云ふ、暫の間に小倉に着く、十月七日、(こゝに殊更に「十月」のあげたるは衍なるべし)船より上る、豊前小倉城主小笠原侯十五萬石、城は海岸に有り、城樓高大にして殿守とも謂ふべし、橋の邊船頭町鹽飽又兵衛が家に宿る、夜に入りて商人ども土産の毛綿、帶、袴地等、持ち來る、皆下品なり、明石縞とて亭主又兵衛方より托の端切ども見せけり、皆上品なり、地細密とて唐さんどめの如し、其高價、紗綾縹子にも過ぎたり、袴地にて三拾目位は至極の下品なり、平家蟹の枯たるを賣る人有り、予五絶を作る、

題平家蟹

夢中在_り帝所_に。二十四年榮。豈_{はんや}意介虫小。猶遺平氏名。

八日、未明に出づ、城の際を通り、一里半ばかり行けば豊筑の境なり、黒崎、上之原、茶屋の春、などを過ぎ、木屋の瀬にて晝食す、此邊の島に黄櫨あり、漆に似て紅葉す、實は蠟になる、品々多く是あり、九州の蠟燭は皆黄櫨の實なりといふ、石炭有り、土中より掘り鑿ちて採り、焼きて軽くして用う、一櫓三四拾文なり、直方川より蘆屋の濱へ四里、舟通用宜しき故に魚多く有り、さむしと云ふ魚は鯖に似たり、やうずは常陸にていまだと云ふ魚なり、

能方村に多賀明神社領百石、大社なり、又雙林院とて福岡侯の菩提處有り、此處は黒田公先公の舊蹟なりと云ふ、飯塚に宿る、

八日、(この八日は衍にや、又は日附の誤りにや、分りがたし、原書のまゝに寫す)雨降る、冷水峠を越ゆ、風烈しく行く人甚だ苦しむ、山家驛にて饒し、四五人相伴ひて宰府へ廻る、六本松の捷徑を小川に傍ら

て上る、右の方に巍然たるは法満山、古歌によむ竈山、筑前第一の高
山なり、權現は天狗にて靈驗新たなる故、國中尊信して繁昌す、寺院
二十五坊、麓より一里餘登ると云ふ、山家より二里ばかりにて暮方に
宰府に到る、天満宮の境内古木茂りて神さびたり、石鳥居、石橋、二
王門、別殿、東西の法華堂、藥師堂、浮殿、中門、回廊、本社、神藥堂、鐘樓
等あり、後に數多の末社あり、本社の前、左に飛び梅、右に一夜の松
皆柵を以て圍めり、御詠歌によりて生じたる故に追松と云ふ、飛び梅
と云ふ、折る人つらしと惜まれしものなり、池は心の字の象なりとて
島ありて三つの橋を渡る、池邊に老楠數株あり、其中に二三本甚だ大
木にて、攝州天王寺にあるよりも大なり、池中に鴈、鴨、をしどり、
群集し、鯉、鮒、游泳して人の蹇然を待つに似たり、社地は即ち古の
安樂寺なり、延喜十九年藤原仲文建立、今の藥師寺は昔の講堂なり、
近代延壽王院と號し、神宮寺と稱すといふ、祭禮は二八月とも、廿三
日より廿八日までなり、梅の守は梅の核に經文を書きたる物なり、靈

驗新たなる故に人甚だ尊信す、六匁づゝにて是を受くる、凡そ宿願あ
る人は連歌の會を興行して神を慰め奉る、萬酌は金五兩、五十酌は三
兩、十六酌一分なり、別當社僧會集して懷紙に認め、神前へも奉納し、
施主へも遣はす、是れ即ち大に神樂の代りなり、六月十七日かささの
連歌あり、連歌師はなでつけ髪なり、

社領は、御朱印千石、筑後の水田に有り、福岡侯より給地三千石、宰
府にて寄附す、合せて四千石なり、東叡法親王に屬して僧坊五十六院
三大宮司、八禰宜有り、座主を大鳥居信歡といふ、千石を領し古來よ
り菅原氏にて妻帯なりしが、前の大鳥居より清僧になり、弟子高都よ
り來り嗣ぐ、今の信歡は高辻黃門の二男なり、次に小鳥居某も菅原氏
にて妻帯なり、檢校、勾當、萬成院とて三役僧有りて、修造一切の寺
務を主る、皆菅原氏にて妻帯なり、三大宮司は、小野伊勢守、同但馬
守、同加賀守、是も本姓は菅原氏なり、祭禮の事を主る、安樂寺の座
主は、安性院、子院十七坊別れて有るなり、半里程西の方に姥宮とて

御旅所有り、祭禮の時神輿こゝに到る、昔し麴屋の婆々にて菅家に恩ある人の蹟なりといふ、菅家の御在所は内山村の中に、聖王とて今に礎なほ有りといふ、宰府より一里ばかり東の方なり、観音寺、戒壇院、國分寺、皆宰府の村の内に有り、都府樓の迹、大門の礎、徑六尺、観音寺の西にありといふ、晩き故に尋ねず、宰府、鎮西、名のみにて今は淋しき山里なり、宰府より一里ほど西南に天拜山あり、さのみの高山には非ず、古木生ひ茂りてすさまじく見ゆ、山中に瀑布あり、菅家の祈誓し給ふ所なり、道隔たりければ遙かに拜して過ぐ、宰府にて馬を借り、二日市より春田に出で、田代に着く、時は夜半なり、

九日、神崎にて晝飯す、

佐賀城下を過ぐ、鍋島侯三十五萬石、昔は龍造寺城と云ふ、町より十町餘り南に在りて見ることを得ず、此邊より四方に高山あり、先づ西南に多羅嶽、南に温泉嶽、東南には柳川の山、東に久留米の諸山、西南に川上山、北に阿彌嶽、筑前の千部山等連なれり、其日は峰々に雪

少し有りて風寒し、牛津に宿る、

十日、此邊路傍に山梔子あり、塚崎にて晝飯す、温泉有り、山島に多く櫻欄、茶梅有り、茶梅は皆白花なり、實は油を採る、此處にては小椿と云ふ、嬉野に宿る、温泉あり、

十一日、三の瀬村の塚に十圍餘の楠有り、道中一の大木なり、園木にて晝飯す、是より時津へ舟行七里、舟を雇ふ、六反帆にて水主五人なり、此處は海口より大村まで十里餘の入海、迫門は僅に一二町ばかりにて、島原の早崎、阿波の鳴門共に、日本三所の迫門なりとぞ、折節海豚魚躍りはねて面白し、長さ一間ばかり色黒く海鱈の如し、小島數多ありて絶景なり、中にも黒島は野鼠有りて貂の如し、昔し或人猫を入れければ、却りて鼠に噛み殺されしと云ふ、向の出崎とう崎と云ふ處に竹山あり、一尺四五寸なる竹有りといふ、申の刻に時津に着きて酒屋に宿る、

十二日、朝雨降る、髮月額など用意して靜かに出づ、一里程行きけれ

ば、長崎より迎の人麻上下にて追々五六人来る、馬次の先徇にて、知られたりと云ふ、此邊路傍に豕或は羊兒を放ち飼ふ、所々に徘徊す、是を問へば長崎へ唐人共の食料に賣る故に、多く飼ひ置くと云ふ、八つ時長崎に着く、兼ねて宿割定まり、小林氏、堅田氏、我輩は櫻町伊勢屋理左衛門所なり、鳥羽氏、坂部氏の旅宿は、田中菊左衛門とて櫻町の乙名なり、又其隣家組頭加藤次衛に宿る者も有り、凡て饗應膳部丁寧にて、亭主は勿論給仕人まで、皆上下なり、奉行所の役人並通事人等、かはるゝ來りて遠勞を感ず、就中通事目附高尾嘉左衛門は、本藩恩顧の者なれば、屢伺候し、漂流の事異國の物語など有れど、余が輩は遠慮有り、唯目撃して打ち過ぎぬ、十三日、予嗜の道點止難く、高尾嘉左衛門へ一通の名刺を通じ、詩を贈り、今客館の清客に文才の人有りよし、詩文贈答の紹介をなし給はらんやと言ひ送る、其日の入つ時漂流人の引渡し有りとして、諸役人中我等まで禮服等改め、案内者有りて御奉行の廳に行く、漂流四人の吟

味畢り、船子どもを引きつれ旅舎に歸る、其夜亭主が物語に、長崎學者の中にて、熊代太郎左衛門文章の名ありと云ふ、高尾氏より返翰未だ來らず、清客へ紹介の事もおぼつかなきにより、夜中詩文を認め、翌朝熊代方へぞおくりける、十四日、奉行所より馳走の爲め、案内者有りて異國人の館舎に入りて一見す、先づ阿蘭陀の屋敷は、出島とて内海へ築き出だし、四方石垣甚だ嚴密なり、石橋一つにて出入す、門の側に番所有り、入口に禪寺の刹竿の如き旗柱あり、舍々に樓有り、樓の窓より阿蘭陀人どもさしのぞくを見れば、目光り眉毛赤さび、人相甚だ怪し、側に女も見ゆ、此地の遊女なりと云ふ、同行の人皆厨下より入りて階を登る時に、紅毛人も出で迎へて嚮導す、其顔色甚だ白し、頭髮を剃りて黒髪の假髻を被る、衣服は此方の股引の如く、手足をくるみ釦にてしめ、上衣も袖なく、前は釦にて合はせ、腰下分開きて此方の輕業裝束に似たり、皆羅紗の類なり、

又節季を量る時計なりとて、硝子の筒二本内へ水を入れ、板につけて壁に掛く、其板に文字あれども蕃字なるが故に讀め難し、蘭人常に四壁に其本國の畫を額の如く數多く掛けたり、畫面に硝子を張りたれば透き徹りて見ゆ、周りの莊嚴甚だ美麗なり、畫は山水人物と、いろいろ有り、筆細密にして、倉卒には見分け難し、又大鏡を所々に掛け置く、皆びいどろづくりにて、座中の人影相うつり、堂上甚だ玲瓏なり座敷惣じて樓上にて、この方の如く疊を敷き、中央に凡案を設け、フラスコの注子の類をならべ置く、皆名酒なりと云ふ、フラスコの中に龍吟蛤たけなまがひを葉水にて蓄ふ、鱗動くが如く見ゆ、側に交椅きやくい數々あり、船頭と筆者は生平にこれに座すなり、此時筆者リュウトルフロイトマンといふもの出で、上客に對して長揖す、通事人數多從ひ行く中にも、西善三郎蕃語を以て言語しければ、彼筆者頓首拜伏して畢つて、復起つて交椅に座す、其前に書案を出す、筆者即ち筆を把つて蕃字を七八紙書く、文字の形も雲を畫くが如し、左方より書き始めて右の方へ横

行に書く、通事人の譯文なければ何の字と云ふ事を知らず、紙は此方の奉書に似たり、筆は石筆の如く、鳥の羽莖の本の枯にて、尖所に刻目有つて墨けを含むなり、紅毛とも種々の乾菓子を持ち出し、茶を勸む、又葡萄酒其色赤黒なり、アテン酒(味甘辛砂金入)、フッロウ酒(色薄白くしてあわもりに似たり)、肴はカチンの實、生姜密漬、肉菴豆等、フラスコの注子すず硝子のコップと云ふ盃にて酒を勸む、暫ありて階を下り、又花園の上なる樓に上る、座敷の中央に床のやうにて足高きもの、横六尺長は一丈ばかり、羅紗にて包み四方の隅に穴あり、通事人に問へば紅毛人の丸まわを弄し、賭勝負をする所なりと云ふ、厨下に到り見れば、豕牛等を屠撃して甚だ腥し、竈の前に鬼奴くわんぬ四五人居る、其中に童子も有り、年を問へども通せず、予雙手の指を開きて見せければ點頭して退く、十歳ばかりと見えたり、面色は薄黒く髪は巻きて茜の木綿切にて包めり。

吉野 (菅笠日記)

本居宜長

九日、疾く起き出で、端近く見出たせば、空は塵ばかりも曇なく、晴れ渡りたるに、朝日の花やかにさし出でたるほど、木々の木の芽も春深き山々の景色、霞だに今朝はかいらで、物あざやかに見渡されたり。吉水院は唯はひ渡るほどにて、行きかふ人のけはひまで眞行く目の前に見ゆ、大方此里はかの水分の峠より片下りに續きて、細き尾の上になん有んめれば、左右に立ちなみたる民の家居ども、前よりこそさりげなく、唯世の常の屋の様に見入れらるれ、後は皆谷より作り上げて、三階の屋になん有りければ、何れの家も見渡しの景色よし、さる客やとせし、又物賣りなんぞするは、上の屋にて、道より直に入る所なり、次に家人の住居は、中の屋にて、其下なれば戸口より階を下りてなん入るめる、今一つ階を下りて又下なる屋は、床なんどもなくて、唯土の上に、物打ち置きなんぞ、妄りがはしくむつかしきに、浴湯むる所、廁なんどは、そこにしもあんなれば、日一日あるき困じたる旅人の足は、八重山越え行く心地して、此階ども上り下るなんいと苦し

かりける、されど所の様の言ひ知らず面白きには、さる事は物の數ならず、花散りなばとまつらん人も打ち忘れて、やがて止まりても住みなばやとさへこそ思はる、今日は瀧ども見にもせんとして、例の道しるべ先に立て、かれいひ酒なんぞ持たせて出で立つ、かの竹林院なんどいふわたりまではいかめしき僧坊どもなんぞ立ち交りて、ひたづまの町屋なるを、末はやうくまばらになりもて行きて、子守の御社より奥は人の家もなく、唯杉の生ひ茂りたる中をぞ分け行く、さてやうち晴れたる所に出で、左に遙の谷と名づけたる所、又いと櫻多くて盛なり、

高根より程も遙の谷かけて立ち續きたる花の白雲

なほ行きて大なる朱の鳥居あり、二の鳥居、又修行門とも名づくとかや、金御峯神社、今は金精大明神と申して、此山しろしめす神なりとぞ、此おまへを少し左へ下りて、けぬけの塔とて古めかしき塔のあるは、昔し源義經が敵に追はれて、此中に隠れたりしを、探し出だされ

たる時、屋根を蹴放ちて逃げいにける跡なんと言ひて、見せけれぬ、すべてさる事はゆかしからねば、目とゆめても見ずなりぬ、なほ深く分け入りて、茶屋ある所に到る、其前を右へいさゝか下れば安禪寺なり、藏王堂、大坂の右大臣の建て給へるとぞ、東の方に木茂き山は青根が峰なりとて、此堂の前より向ひに近く見えたり、二三町奥に、何とかや事々しき名つきたる堂あり、其後ろへ木の下道を二町ばかり下りたる谷陰に、苔清水とて岩間より水の滴り落つる所あり、西行法師が歌とてまねび言ふを聞くに、更にかの法師が口つきにあらず、むげに賤しきえせ歌なり、なほ一町ばかり分けゆきて、彼の住めりし跡と云ふは、少く平かなる所にて、一丈ばかりなるかりそめの庵今も在り、櫻もこゝかしこに見ゆ、

花見つ、住みし昔の跡問へば苔の清水に浮ぶ面影

此近き頃、ある法師も、三とせばかりこゝに籠り居けるとぞ、京にて高野槇と云ふ木を、こゝ人は唯に槇とぞ云ふ、是を思へば古へ檜の外

に槇と言ひしは此木なべし、是はこゝに必ず言ふべき事にもあらねど、此わたり山の山に此木の多かるに就きて、人の尋ねけるに、いらへつる言葉を聞きて、ふと思ひ寄れる故、筆のついでに書き付けつるぞ、本の道を安禪寺の前の茶屋まで歸りて、御嶽へ詣ぐる道にかゝり、三丁あまりも来つらんと思ふ所に、しるべの石ぶみ立てたる道を、左へ分れ行く、御嶽の道へは、是より女は登らずとぞ、かの見えし青根が峰は即は此山なりけり、少し行きて東の方の谷の底遙かに夏箕の里見ゆ行きく、又東北の谷に見下さるゝ里を問へば、國栖とぞいふ、此わたり打ち離れたる山の背を傳ひ行く程いと遠し、さて下る坂路のけはしさ物に似ず、されど登るやうに苦しくはあらず、此坂を下り果つれば西河の里なり、安禪寺より一里と言ひしかといと遠く覺えき、山の中に包まれて何方も見はるかす處もなき里なるを、家毎に紙をすきて門に多くはせる、こゝは未だ見ぬ業なれば、ゆかしくて足も休めがてら立ち入りて見るに、一枚づゝすき上げては重ねゝする様、いと珍ら

かにて、立つ事も忘れつ、さて右の方へ三町ばかり里を離れ行きて、谷川に渡せる板橋の下より分れて、左へいさゝか登り、山のかひをわなたへ打ち越ゆれば、即ち大瀧村なり、此間は五町ばかりもあらんか、此大瀧のあなたのはづれは即ち吉野川の川の邊にて、瀧と云ふも、やがて川づらなる家の前より見やらるゝ早瀬にて、上より直様に落つる瀧にはあらず、此瀧は遠くては異なる事もなし、近く寄りて見よと貝原の翁が教へ置きつる事もあれば、岩の上をとかく傳ひ行きて、せめて間近くのぞき見るに、其わたりすべて得も言はず大なる巖をもこのいら立ち重なる間を、さしも大きな川水の走り落つる様、岩に觸れて碎けあがる白波の景色など、面白しとも恐ろしとも言はんは中々愚になりぬべし、昔は筏も此瀬を唯に下しけるを、餘りに水の烈しくて度毎に下しわづらひし故に、いははのやゝなだらかなる所を切り通して、今はかしこをなん下すなる、と教ふる方を見れば、あなたさまに一通分れて落ち行く水、實に下方の瀬より少しは長閑やかに見えたり、あ

はれ今下し來ん筏もがな、いかで此早瀬下す様見んと言ひつゝ、かれいひ食ひ酒なんぞ飲み居る程に、水上遙かに此筏下しくる物か、やうく近づきて此瀧の際になりぬれば、乗りたる者共は左右の岩の上に飛び移りて、先なる一人網をひかへて皆流に沿ひて走り行くに、筏の早く下る様は矢なんどの行くやうなり、さて岩のさぢめの處にて、人ども皆筏へ歸る、そこは殊に水の勢烈しくて、ほとばしり上る浪にゆられて浮き沈む丸木の上へ、いたはりもなく飛び移る様、いといと危き物から、珍らかに面白き事類ひなし、皆人此筏に見入りて盃の流は何ちならんとも問はずなりぬ、さて此筏瀧を離れてひら瀬に下りたるをよく見れば、一丈二三尺ばかりの長さなる樽を三つ四つづゝ組み並べて、つぎ／＼に十六つなぎ續けたるは、いと／＼長く引きはへたり、人は四人なん乗れりける、川瀬は此瀧の下にてあなたへ折れて、向ひの山あひへ流れ入る、右も左も物を突き立てたるやうなる岩岸の下にさる筏をしも下し行く景色、唯繪に書けらんやうに見ゆ、斯かる處に

ては中々に口ふたがりて歌も出で來ぬを、わざと打ちかたぶきつゝ思ひ廻らさんも様悪しければ、さて止みぬ、古へ吉野の宮と申して、帝のしばしおはしまし、處、柿本人麿主の御供にさぶらひて、瀧の都とよみけるも、此大瀧によれる處なりけんかし、其折々の歌をも合はせて思ふに、蜻蛉あきつの小野なんぞ云ひしも、又瀧の上の御舟の山も必ず此わたりなりけん事疑ひもなければ、今もさ言ふべき様したる山やあると心付けて見廻はすに、此川づらより左の少し顧みる方に、さも言ひつべき山あり、船にして言はんには前後平らに長くて、中央なからばかりに一際高く、屋形と言ひつべき處ある山なり、これやさならんとは思ひよれど、如何にあらんおぼつかなし、そは瀧の處より少し下さまにし有んなれば、瀧の上と云へるには、いさゝか違へるやうにもあれど、なべて此わたりならん山は、などかさいはざらん、古へ忍ばん人またくも此處に來まさば、必ず試み給人、やかて此里の上なる山ぞかし、かくて又里の中を通りて、西河の方へ歸り、此度は先の板橋を渡りて、

石の階を一町ばかりも登り、木茂き谷蔭を分け入りて、謂はゆるせいめいが瀧を見る、是はかの大瀧とはやう變りて、しげ山の岩のつらより、十丈ばかりが程ひた下りに落る瀧なり、此見る處は傍よりさし出でたる岸の上にて、近う瀧のなからに當りたれば、上下を見あげ見おろす、上は狭きがやうくに一丈餘りにも廣びりて落ち行く、末は此方彼方より深山木も生ひ懸りて、小暗き谷の底なれば、穴なんぞをのぞくやうなる處へ、山もとよみて落ちたぎる景色、け恐ろしくをいふ、少し登りて瀧の上を見れば、水はなほ上より落ち來て、岩淵に入る、此淵の水の餘りに落つるなりけり、こゝに里人の岩飛びと云ふ事して見するよし、兼ねて聞きしかば、先に西河にてさる業するものやあると尋ねしかど、此頃は長雨の名残にて水いと多ければ、危ふしとてする者なかりき、さるは此かたへなる岩の上より淵の底へ飛び入りて、浮

び出づる事をして錢を取るなるを、水多くて烈しき時には、浮み出づる際に、若し押し流されて銚子の口にかゝりぬれば、命堪へずと云ふなる、銚子の口とは淵より瀧へ落ちんとする際を云ふなりけり、抑も此瀧を清明が瀧としも云ふは、蜻蛉の小野によりたる名にて、虫の蜻蛉ならんと云ひし人もあれど、さにはあらじかし、里人は蟬の瀧とも云ふなれば、初めはなべてさ言ひけんを、後には清明とはさかしらにぞ言ひ爲しつらん、今瀧の様を見るに、上は細くてやう／＼下さまの廣きは、蟬の形にいとよう似たるに、鳴る音はた、かれが聲に通ひたんなれば、さも名づけべきわざぞかし、又其蟬の瀧は是にはあらず、異瀧ことなきなりとも云へど、里人は即ち此瀧の事なりと言ひける、そはとまれかくまれ、かの虫の蜻蛉はひが事なるべし、蜻蛉かひらふの小野とはかのあきづ野を誤りたる名にて、もとよりさる處はなき上に、其あきづ野はた、此わたりにはあらじ物をや、さて此瀧の流を音無川といひて萬よりも怪しきは、月毎の初めながらは、上津瀧に水と云ふものなく、

後のなからは、又下津瀧に水なしとかや、さて上より来る水は、いつちへ如何にして流れ行くぞと云ふに、石のはざま砂の下なんぞへやう／＼浸み入りつゝ、なくなりては遙かに下に到りて、又やう／＼に湧き出でつゝ流れ行くなりと云ふは、さる事も有りぬべけれど、頃をしも違へで、上津瀧と下津瀧と互にしか代らん事は、猶いと怪しきわざなりかし、されど今は、たゞ世の常の川にて、さうりげも見えぬは、此頃水の多き故なりとぞ云ふ、即ちかの板橋の懸れるも此川にて、下は西河の里中をなん流れ行くめる、彼里に歸りて、又今朝下り來し山路に懸る、今朝はさしもあらざりしを、登るはこよなく苦しくて、同じ道とも思はれず、さて登り果て、右に付きたる道へ分れて又しも登る、山は佛が峯とかいひて、いみじうけはしき坂なり、さて下る道はなだらかなれど、足疲れたるけにや、猶いと苦しくて、茶屋の有る處に暫しとて休む、こゝにて鹿鹽神社の御事をたづねたれば、そは檜尾、西河、大瀧と三村の神にて、西河と檜尾とのあはひなる山中に、今は大

藏明神と申しておはするよし語る、此道よりは程遠しと聞けば、得詣
 せず、猶坂路を下り行く程、右の方を見下せば、山の腰を廻りて吉野
 川流れたり、國栖夏箕なんども川邊に沿ひて、こゝよりは近く見ゆ、
 さて下り果てたる處の里を桶口といひ、その向ひの山本なる里は宮瀧
 にて、吉野の川は此二里の間をなん流れたる、西河よりこゝまでは一
 里餘りも有りぬべし、かの國栖夏箕なんどは此少し川上なり、下は上
 市へも程近しとぞ、此わたりも古へ御假宮有りて、おはしましつゝ道
 遙し給ひし處なるべし、宮瀧と云ふ里の名も、さるよしにやあらん、
 こゝの川邊のいはは、又いと怪しく珍らかなり、かの大瀧のあたりな
 るはなべて稜なくなだらかなるを、こゝのはかどありて皆するときか
 ひた續きに續きて、大かた川原は岩の限りなり、此岩どもに附きても
 例の義經が古事とて、何くれと得も言はぬ事どもを語りなせども、う
 るさくて聞きも留めず、此わたり川の様、さるいははの間迫りて、
 水はいと深かれど、長閑やかに流れて、早瀬にはあらず、さて岩より

岩へ渡せる橋、三丈ばかりもあらんか、宮瀧の柴橋と云ひて、柴して
 あみたる、渡ればゆるぎて、習はぬ心地には危し、又こゝにもかの岩
 飛びする者あり、語らひ來て飛ばす、飛ぶ處はやがて此橋の下なる、
 こなたかなた岸は皆岩にて、屏風なんど立てたらんやうに、水ぎはよ
 り二丈四五尺ばかりの高さなるを、かなたの岩岸の上より飛ぶを、こ
 なたの岸より見るなり、其男先づ着物を皆ぬぎて裸になりて、手をば
 垂れて、ひしと腋に付いて、目を塞ぎ、うるはしく立ちたる儘にて、
 水の中へつぷりと飛び入る様、珍らしき物からいと恐ろしくて、先づ
 見る人の心を消え入りぬべき、此頃は水高ければ深さも二丈五尺ばか
 り有りとなん、暫しありて、やゝ下へ浮び出で、岸の岩に取り懸り
 て、上り來て、苦しげなるけしきもなく、猶飛びてんやと言へど、恐
 ろしさに又は飛ばさで止みぬ、さるは始めの如して、後ろざまに向き
 ても、頭を下にさかさまにも、すべて三度まで飛ぶなりとぞ、大かた
 此業は、こゝらの年を繼て、習ひ得る事にて、おぼろけならねば、一

里の中にも、僅かに一二人ならでは仕得る者なしとぞ、此男は言ひける、是より歸るさの道の程は、一里に足らずとは云ふなれど、日も山の端近くなりぬれば、今はとて宿りに赴く、川邊を離れて左の谷陰に入り、四五町も行きて、道の邊に櫻木の宮と申すあり、御前なる谷川の橋を渡りて詣づ、さて川邊をのぼり、佐喜谷村といふを過ぎて、山路にかゝる、少しのぼりて高瀧といふ瀧あり、宜しき程の瀧なるを、一續きにはありで、つぎくはさざまれ落つるさま、又いと面白し、象の小川といふは此瀧の流にて、今過ぎ來し道よりかの櫻木の宮の前を経て、大川に落つる川なり、象山といふも此わたりの事なるべし、櫻いと多かる、今はなべて青葉なるなかに、おのづから散り残れるも、處々に見ゆ、

大方此吉野の中にも殊に櫻の多きは、かのにくき名づきたる處、さては此わたりと見えたり、瀧を右の方に見つゝ、猶坂を登り行きて、あなたへ下る道はなだらかなり、其ほとにも櫻はあまた見ゆ、されど古へ

にくらぶれば、いづこもいづこも今はこよなう少なくなりたらんとぞ思はるゝ、さるは此山の習ひとて、此木を伐る事をいみじく戒むるは、神の惜み給ふ故なりとこそいふなるに、今は杉をのみ何處にも多く植ゑ生ふしたるが立ちのびて茂り行く程に、櫻は其陰に押し消たれて、多くは枯れもし又さらぬもかじけ行きて、枝朽ち折れなんどのみすめるを、神はいかがおぼすらん、まるが心には、かく杉植うるこそ伐るよりも櫻の爲めには心憂き業とおぼゆれ、斯くて暮れ果てゝ宿りに歸り着きぬる、まことや大瀧の歌、歸るさの道にて辛うじてひねり出でたる、

流れての世には絶えける三吉野の瀧の都に残る瀧つ瀨
宮瀧のも、

いにしへの跡はふりにし宮瀧に里の名忍ぶ袖を濡れける

成田詣 (相馬日記)

高田 興清

廿六日、今日も天氣よし、文伯、傳四郎などに別れを告げて、馬を成

田さまへ進む、林兵衛、由右衛門はなほ坂東道廿里ばかり送り來つ、酒詰村にて水戸路を横様に經て、用水に沿ひて下る、馬手の方の見やりなる山は、相馬郡小文間の第六天山と云ふ、こゝに昔は盜人の數多籠り居て、往來の人を引き剃ぎなせしに、今はあまねきおほん恩みによりて、さる煩ひもなしと云へり、取手の宿も遠からぬ程なれば、吾友澤近嶺が家をとぶらは、やと思ひしかど、急ぐ道なればさて止みぬ、近嶺は口面白き歌人にて、消息の度毎に便り嬉しく眼の拭はる、を、訪はでしも過ぎぬるは本意なきわざなりけり、彼聞かば怨むべし我もいと悔し、戸田井のわたりにて、方丈が送りの人も馬も歸し遣りつ、舟の設まで兼ねて文伯がおきてせしかば、たひらかに布佐の津にはてぬ、布川の里は東北の岸に見ゆ、此頃順行、傳四郎、文伯などかまめしきあるじまうけの心ばへは、詞にも筆にも述べ盡し難し、戸田井は小文間の内なれど、堤を隔て、子飼川の河邊に住む田居なれば、外田居なれば外田居といへるにや、子飼川と刀禰川との落合にて、此

所を塞き留めたらんには、相馬は昔の淡海の中島ともなりぬべきありさまなり、享保十三年と云ふ年に、わが遠つおやの友清の翁、功しき心を起し、千万の金を捨て、堤を築きなされしが故に、二万石あまりの新田開けしと云ふ相馬郡の手賀沼も、遠からぬ所にあり、其堤を今も高田堤と呼べりとなん、

つきなせし手賀沼堤つゝ、むとも功高田の名やはかくる、

印幡郡竹袋など云ふ里を過ぎて、埴生郡の安食川を渡る、此河は印幡沼の流れなり、安食の里より道を右に取りて、印幡沼の邊りを行く、道興准後の稻穂の海と書かれし所なるべし、今は渚の方、田となれるが多かり、

むべしこそ稻穂の海とおほせけれ田となる岸に満てる富草

松崎村と云ふ所より、九折坂を登るに、駒も行きなやみつ、鞍の上平かならずしていとむつかし、此近きはどなる天竺山龍角寺に龍神の社あり、月毎の朔日十五日廿八日には、印幡の海の真中なる百丈穴と云

ふより、龍燈飛び揚りて、此社の御前に懸れるとぞ、又大なる洞穴三つありて、中に石壘を敷き設け、昔は人住みけん跡とおぼしきに、隠れ座頭といふ妖怪住めりとなん、其洞穴の上に、國內第一の大なる松の樹の、根一つにて七本に分れたるがさし掩へりとぞ、行きくして谷に下れば、千杷が池とて水多くもなきがあり、野となれる所に松一本立てり、こは或る鄙つ女が、此池の淺みへ一日千杷の苗を植ゑんとかせぎけるに、疲れ困じて死にけるを、埋みしするしの松にて、千杷が池と云ふも、それより負へる名なりと云へり郷部村に埴生大明神の社ありて、鳥居に當國三宮と云ふ額を懸く、此は神名帳には見えぬ神なり、やうく日に日も傾き行けば心急ぎせられて、はしりうちも爲まほしけれど、あやふげなる坂道なればいかせせん、駒の歩みに任せつゝ、とかくして成田の里の不動尊の御あらかに詣で着く、昔見しには様變り、棟を並べ、薨をかさねて、堂塔の莊嚴たぐひなき靈場のありさまなり、別當を成田山新勝寺と云ふ、眞言宗の大寺なり、縁起のことは

をよむに、此不動尊の木像は、弘法大師刻み奉らして、高雄の神護寺の護摩堂に年久しくたせたまひしを、平の將門が騒ぎの時、勅を奉はりて、數多の驗者たち、賊徒降伏の祈禱をせられしに、廣澤の寛朝僧正は、此靈像を請じ、難波津より南の海を舟にて送りまゐらせ、此里に居る奉りて丹誠を凝らされけるが、其驗し有りて、將門遂に貞盛秀郷が爲めに首を獲られぬ、又下総國生實郷の大嚴寺の開祖道譽上人が奇瑞を蒙られし事など、其外の靈驗いちじるしきためし、擧げて數ふべからず、抑も坂東に不動明王の古靈場三所あり、相摸國大住郡の大山寺と、武藏國多摩郡の高幡寺と、この新勝寺となり、大山寺は吾妻鑑に出で、世人あまねく知れり、高幡寺は鎌倉大草子に見え、また寺に傳はれる文永十年の金鼓の銘、康永元年に修理しまゐらせし懿の記文、應永廿年の勸進狀、などに委しく由縁をしるして、鎌倉公方家の崇敬ならびなかりし御佛なり、今三所の中こよなう參詣人の多かるは、此成田の靈場なり、今日も裸詣、斷食籠など云ふ恐ろしき行

を勤めて、いりもみ奉る輩さへ少からず、暮れはて、御前の町家に宿りしに、隣に集れる男女ども、騒がしう物言ひ打ちさるがひて、うまいもせさせず、夜追の馬の鈴の音耳近く聞え、くちどりらが丑のくびどなを言ひ過ぐるは、いとう更けぬるなるべし。

香取まうて (香取日記)

加藤 千 蔭

廿六日、朝晴れつるが、晝より曇りわたりて、風烈し、惟堅、政孝、正慶など訪ひ來、夕つかた節之あるじとて、荒野村のかどかなる所につとへり、寶滿寺堅賀大徳は千枝子の子息なれば、殊に睦みて物携へて來て、是彼共に題を探りて歌よむ、瞿麥の花咲きそめたるを、春海、かつくも咲きそめしより常夏にははん花は朝にけに見ん、釣殿に螢の飛ぶを見て、千蔭、

釣殿は涼しかりけり螢飛ぶ水草の露を袖にかけつ、

荒野村にはひまつれるは、味麩高彦根の神にまし〜て、白幡の宮と申し奉れり、其御社に額てふものもなければ、書きてよと、田護が

乞ひぬれど、額など書かんはいとおほけなしとて、いなみつれを許さず、已さきに夢みし事あり、何處とも知らず舊びたる社の前に至れるに、そこに有りつる翁に問へば、白幡の太神と申すと答ふ、已ぬかづきて、歌よみ奉れりと覺えて、夢さめつ、其歌いかよみけん忘れつ、其夢こと人に語らんもあとなしとて、人笑へなれば、もだし居りき、しかすがに其神の御名は忘れざりければ、みそかに心に懸けて、さる神やおはすると、人にも問ひ自らも尋ねし事も有りき、さるを斯かる神おはして、殊に其御社の御名書きてよと人の云ふも、人しき事にしあれば、いかで書きて奉らんと思ひなりて、手洗ひなどして敬ひ書きて、田護に與へつ、さて夢の歌は忘れつればせんかたなくて、今なん

東路の國安かれと海上にしづまりいます白幡の宮

子うまごを守りまさなん海上の宮居に立てる松の常盤にと書きて、みてくらしるに奉れり、

廿七日、堅賀大徳の寺へ招かる、ふりたる松こもりかに立ちなみて、堂の樣いとへぎつきし、例の人々と共に歌よむ、帶を、春海、

かりそめに解けし花田の帶もうし結びもあへぬ契りと思へば書と、千蔭

信路濃や木曾のかけはし踏み見すはかしてかる世の事を知らめや其夜猶節之がり宿れり、

廿八日、正度がり招かる、家居をかしく住みなし、庭に年舊りたる松ありて、郁子はひかゝれり、春海、

松影に根はなかつらのうべしこそ千とせをこめし宿には有りけれ千蔭

海上や磯山松の陰しめん千とせ榮えん宿にも有るかな

香取の伊能美之も海上に來りて、初めて對面す、美之はもと江戸の山川喜寛が子にしていと若かりし程に、香とりへ來りて、人の家を繼ぎつるよし語る、秋になりなば江戸へ出で、物問はんなど云へり、其夜

も節之がり宿りたるに、美之より春海の許へ消息す、文のはしに、

故郷を思へば同じ武藏野の草葉の露をあはれとは見よ

とて已へもことづてせり、春海かへし。

今日とて立ち別ることも武藏野の草のゆかりを忘れましやは

其父喜寛は歌好みて、已若かりし時たいめせし事もあれば、唯ならず覺えて、其たよりに歌よみてやる、

かりがねのとわたる秋を今よりは待ちやわびなむみよしの、里廿九日、朝くもれり、節之けふ舟出して先づ江戸に至り、それより都へ趣きなんどす、已も春海も其舟に乗りて歸らんとて、節之が家の前で川の面平かなり、申の時ばかり常陸の息栖の御社を拜みつゝ行く、こゝは今いさすと云へど、ふるくはおきすと唱へしとなん、此わたりは川づらいと廣く、そこより鹿島瀉かけて、十餘りの島々有りて、小さき家ども處々に見ゆ、是等も古は洲にてや有つらん、大海もや、近

ければ、洲といふなるべし、夕つかた西の空晴れわたり、入日輝きて平らかに廣らかなる水の面には、唯むかへる香取わたりも、過ぎ來しうながみの方も、雲井に見ゆる様、いとをかし、暮過ぐる頃鹿島の大舟津に舟はつく、暗くなりたれば、御社はあす拜みてんとて、岸なる家に宿る、

明くれば五月の朔日、空晴れたり、つとめて鹿島の神宮に詣づ、御社の様いとかうとくしく、木高き松杉は、いくばくの年を経にけん、いと舊りに舊りて、さるをかせ枝に垂れたり、こゝら紅の花見ゆるは、丹躑躅なりけり、猶春覺えて盛なり、春海、

あられふり鹿島が崎のいはひ杉いはひそめしは神の御世かも
千蔭

鹿島根に神さび立てる松が枝の日蔭のかづらかけていく世ぞ

宮居の前よりや、下りてみたらしあり、緑深きとこなめに、清水いと清らか澄めり、かたどく見廻りて、又大舟津より舟にて、潮來の小川

を上る、此川も利根川の下津瀬の分れて流るゝなり、其川中にいくつともなく網代の床を搦へ、床の前に簀を立て、簀の中にて大きなさでして、小さな魚を取る、いさり人は小舟にて通ふとおぼしくて、床のしりへに舟繋げり、

利根川や網代の床に一夜寝て涙にいざよふ月を見てしか、

氷魚は冬のみ寄るめれば、宇治田上などの網代は河風寒き折なるを、こゝはいつといふ時もしとぞ、河沿ひの新墾は早苗青み渡れり、常陸には田をこそ作れと歌ひつゝ行く、うし堀といふ處にてしばし息ひ神崎へ漕ぎ上る頃、日暮れぬ、同じくそこに舟寄せし人は、香取より江戸へ上る人にて、伊能景明とて早くより歌など教へつるいね子が夫なるを、其人とも知らず有りつるが、何くれと語らひぬ、木おろしの早瀬をさかのほれば、舟いと遅し、誰も誰も笛引きかづきて伏しつる程、川中にて夜明けたり、舟人おり立ちて綱手引き上る、郭公はいかなる事にか、門出せし日より聞かず、殊に海上の方はいと稀なりとて

一聲をだに聞かざりしをこゝにて初めて、さやかに鳴き渡るを聞きて、
こがれ行く利根の川原の早き瀬に聲もよどまぬ郭公かな

木おろしの岸より上りて、大森白井などを経て八幡に至る、中河を上
らんは夜をこめてたよりわろしとて、市川を渡り、關を過ぎて行く程
に、日暮れぬ、たどるたどるさかさるの渡りに至りて、舟に乗りて、
二日の夜の亥の時ばかりに歸り着きぬ、後の思ひ出ぐさにとてなむ。

身延と久能 (甲斐日記)

清水 濱 臣

四日、天氣よし、廣養父がり出で、眞文、宜風は田中大塚へ歸る、
己は身延山へと志す、國秀、啓行はなほ付き従へり、十町ばかり西南
へ行くに、大門村に弓削神社おはす、式内の神にて、式には八代郡に
見え、今も八代郡なるを、古本日本後記殘篇には、延暦廿四年十二月
乙卯、甲斐國巨摩郡弓削社、預宮社以有靈驗也とあり、郡さかい
いと近き所なれば、時によりて堺のまがへるにや、いぶかし、鵜澤よ
り、あし川、笛吹川と落ち合ひて、富士川と名かはる、啓行足を害ひ

たりといへば、こゝより舟に乗せて富士川を下さす、己は國秀と從者
と、川に沿ひたる崖路を行く、舟路は浪かしく坂路は岩さかし、互に
見かはして行く、珍らしくをかきふしも、又互に有るべし、岸の岩
根に掉さしあて、早瀬を廻らし行く流あれば、岩のはさまを切り開き
てくぐり抜くるやうの所あり、舟は早く着きて陸路はおくれたり、下
山の宿の北に早河といふ流あり、二瀬に分れたり、一瀬は人の肩を頼
みて渡りぬ、渡瀬は流の烈しさたへんに物なし、唯白浪のたぎり落
つるばかりにて、水の色を見ず、川原の此方彼方、水烟霧り合ひて袖
を濡はす、舟の舳に太き麻繩を二筋づ、結び付けて、川向に二人づ、
立ちて、此繩を取り持ちて引き緩むる即ち、舟の川下へ歸る事一町ば
かり、中には舟人二人掉させど、浪の勢強くして掉さしあへず、岸な
る四人引き付くるに瀧浪の落しかゝる様、恐ろしとも恐ろし、おのれ
此處彼處の旅ありきして、數多の早瀬渡り見しかども、かゝるばかり
なるは見し事もなく、渡りし事もなし、市川の縣司へ要の事有りて行

きしなりといひしかば、渡守等心の限りいそしみたるだに、かくこそあれ、大方の旅人如何に渡り惱むらんかし、とかくして向の岸へ引きつけぬ、嬉しさ言はん方なし、舟路も此川の落口の水さきには、屏風岩と云ふ有りて、この瀬いと恐ろしとぞ、未のさがりに身延山に到り着きぬ、身延は古へは篁生と書きしなるべし、篁は草の名にて、延喜式、新撰字鏡、和名抄などにも見え、生は淺茅生蓬生の生にて、草おひの様を云ふ詞なり、此草の葉もて作れば、蓑をもやがてみのは云ふなりけり、西行上人の、雨しのぐみのぶの里の柴垣に、巢立ちとはじむる鶯の聲、とよまれしも蓑と續けられたり、旅屋を定め置きて、先づ羅漢閣に入りて、菩提梯と云ふ、石階三百餘級を登り、白毫樓に詣づ、本堂、祖師堂、位牌堂、いと大きやかなり、本堂に古鐘をかけたり、文字は無けれど、千歳の古物と覺ゆ、鐘樓、法鼓樓、寶淨籠、其外燈籠幾十基と云ふ數を知らず、位牌堂のかたへの板蕙より、通水橋を渡る、光悦の筆して通水橋と書けるを掲げたり、谷の底に水幽かに

響きて、杉の梢を見下しつゝ、渡る、香積厨と云ふは庫裏なり、檜皮葺ひばたの軒の大きなる、棟木の太さ、聞きしにも勝りて目驚かれぬ、今日は日も山の端に傾けば、歸りて旅屋に宿る、五日、朝日さし登るに驚かれて、脚結あしむすつくるひ立ち出づ、羅漢閣のかたへより奥院へ行く、其道に坊とも數多し、鬼子母神、大黒天、三光堂、鐵佛など數へ盡し難し、五重塔殊にうるはし、山路五十町と云ふ、富士見坂と云ふより富士山よく見ゆ、奥院なる思親閣に到り着きぬ、こゝぞ日蓮上人の遺骨をさめし所なる、草山不可思議の髪も、此堂の柱に結び付けありと云へり、堂の後ろより西谷へおりて、七面へ謁づべき一の鳥居にいづ、七面をば遙に拜み置きて、くれ橋を一つ渡りて、澤に沿ひ下れば、涅槃塔に到る、こゝに日常母塔、日得塔、並び立てり、釋迦堂の前に狗子石あり、又澤水に渡せる橋を過ぐれば、該所に到る善學院と云ふ有り、此左右に、月の寮、雪の寮、竹の寮、柳の寮など云へる有り、とかく廻りくつてあり果てぬれば、羅漢閣のかたへ

出でたり、旅屋へ歸り物食ひ、よろづ取り認めなごして、こゝより國秀啓行に別れぬ、二人は吉田へ歸るなりけり、分きて國秀は江戸より伴ひて、今日まで十八日の間伴ひ慣れたれば、別れがてにす、されど二人共に、淺間の御社恒例の祭、卯月の初申にて、今年は十一月なれば、己の日より神わざありとて急げば、留め難し、二人とも歌多くよみ連ねて別れ惜みあへり、身延山の惣門を出で、南部を經萬澤に到る、山に登り澤に下り、富士川のかたそばを傳ひ行く、いと歩み苦し、すべて山の側蔭を、此あたりの里人はをねと云へり、をはをのへのをにして、ねは根なるべし、今宵は萬澤に宿る、

六日、明方より雨降り出でたれど、さらぬだに旅屋のわびしきを、ゆき、稀なる片山里なれば、暫くもたゆたふべきならず、明くるを待ち出で立つ、萬澤の關をいづ、こは例の四十八關の一つなり、境川と云ふを渡れば、駿河國蘆原郡なり、長嶺のをねを傳ひて完原に到るはど、雨いよく強く風まじて歩み苦し、山駕と云ふ物にもものして急がず、雨

しぶき入りてわびしともわびし、されど人の足を借りたれば、疾く興津の宿に出でぬ、まだ未のかしらなれば、又乗りかへて急がず、江尻を經て府中に着きぬ、清見寺草薙神社なども雨おほひの中にたれ籠められて、あからめもせられず屈まり居たれば、徒らにのみ過しぬ、今宵は府中に宿る、

七日、昨日雨烈しかりしげにや、今朝は名残なく晴れ渡りたり、府の西、賤機山の麓にいつかれます淺間の御社に詣づ、其莊嚴いふばかりなし、延喜年中富士の本宮をこゝに勸請せるなりと云へど、かくばかりきらくしきは、東照大神のこゝにははしましたるよりの事ならんかし、ちらの方に古鐘あり、嘉曆の字はのかに見ゆ、銘も有りて文字多く見ゆれど、ちび消えて、讀み難し、焼津神社へも詣でまほしかれど、三里の上も横へ入らざれば到り難しと聞けば、もだしぬ、久能山へと志す、府の東南一筋の松原うるはしく並みたてるぞ久能山への大路なりける、三里には近きなるべし、有度濱のあたり、海路遙かに見

渡されて、伊豆の岬、石廊のはなわより長く島めきて霞みたり、濱路の松原一里ばかり過ぎて久能山に到る、別當德音院に就きて案内の人を請ふ、青侍一人出で来るに伴ひて、石坂十八町を登る、右左に折れ登るに、石垣いと嚴かなり、登り果て、いかめしき門あり、關屋めきて儀仗事々しく飾り立て、守人數多居なみたり、青侍事を傳へて己が名をよぶ、さて子細なし通りぬと云ふを待ちて、又青侍に具して石坂を登ること五町にして、山門に到る、こゝより藁靴をぬき素足にて宮居を拜み奉る、東照大神の御骸を葬め奉りし所にて、寶塔、拜殿、廻廊、神庫、其外すべて目も輝くばかりなり、こゝにて思へば、府の淺間の御社のさらくしかりしは、物にもあらざりけり、いとかしこけれど、心の中に思ひつけらる、

かしこきや久能山松の嵐まで静けき御代を空に知らする

拜み果て、先の門より出で、石坂をおり果てぬ、これより一里ばかり行きて、村松村に久能寺と云ふあり、かの久能山は古く大悲者の立た

せ給へる靈地なりしを、東照大神の御骸を葬め奉りし折、かの大悲者をこゝに移しすゑ奉りたりとぞ、此はと開帳とて庭參りの人つとふ頃なりければ、いと賑はし、石坂五六町登りて見かへれば、見るめいとをかしき處なり、されど龍華寺にも劣りにたり、龍華寺と云ふは久能寺の隣にて、小寺にはあれど、庭の様をかしく、鳳尾蕉の大きな幾本か有りて、霸王樹と云ふ庭樹の一本にて廻り七間ばかりあるが、枝ともに杖つかせたるあり、すがた枝ざしなつかしけなき物から、斯かるばかり大きやかなるはいと珍らし、松もふりたるあり、後ろの岡に登りて見渡せば、近く三穗の松原さし出で、こなたさまに入江たへて、清水の湊にぎはし、薩陲七難のはなわさし出でたり、遠くは足高、ふたて、箱根の峯に連なりて、雲より上に不二の嶺高く聳えたり、伊豆は又遙かに隔たりて遙かに島なせり、三穗の入海見やらんに、こゝに勝る處あらじかし、こゝの十二景と云ふは、富士泰嶽、三穗長洲、田子古濱、清見舊關、興津釣船、清水清嵐、攀山返照、久能晚鐘、村

松落雁、矢部夜雨、南方曉色、東海月花、など事々しく板にゑりて、堂の前に掲げたり、清水の湊へおりて、小舟に掉さへせて、入江のおもて甘町ばかりを渡れば、三穂の鳥居有りて、千本の松生ひ茂れる中に、一筋の道しるくて、十三四丁行けば御社に到る、大宮司は圖書頭とていと古き家なり、この一村すべて大宮司の知る處なりけり、御社いとふりて神々し、大木の楠五本有るが中に、古い朽ちたるにひこばえしたるを、神木とてませ結ひ廻はしたり、此御社へ前を南へ松原の中九町ばかり行きて、海べたに小さき石の祠あり、磯田社と云へり、羽衣の松は古い朽ちて、其かたに植ゑ置ける松もいと神さびたり、享和三年駿河の大城守らひおはす牧野成潔ぬしの建てられし碑あり、辭は龜山の君の博士中島漁と云へるが書きたるなり、もと來し道を歸りて又小舟に乗り、清水の湊へ着き、又此舟にて巴川を溯り、江尻の宿に到れり、清見が關の跡は清見寺の門前なりとかや、

守り捨てし清見が關は諸人の言の葉とむる跡となりけり

寺に入りてかたぐ見ありく、古鐘いとくめでたし、正和三年の銘あり、字いと大きく陽文にして古くみやびたり、書体はためてたし、摺らまほしかりしを、日暮れかゝりぬれば、徒らに門をいづ、口惜し、興津の宿に枕とる。

長江の旅泊 (西遊記)

橘 南 谿

肥前國大村の御城下をかなたこなたに物し終り、夫より小船を借り海に浮んで長江と云ふ所に渡りぬる船の内より、はや夜に入りぬれば、案内も知らぬ旅の空に夜に入りて宿り求めんもおぼつかなしと云へば船頭のしるべの家有りとして、川の岸なる所へ送り入れぬ、いと貧しくいぶせき伏屋なりしかども、一夜の宿り主の妻快くもてなすに嬉しくて、手洗ひ足そゝぎなどして、打ちくつるぎ、夕の食なども取りしためてやすらひたるに、其家南面にして、しかも大きな川を前に受けて、海づらさへ遠く、打ち望めば風景の面白きに、六月二十日頃の月海上にさし出で、さゝ波のきら／＼しきは黄金を散らす如く、

濱風又涼しく、限りなき輿に入り居たるに、此家の子の十二ばかりなるが、他の家の子に頭打れたりとて、此方の父親又先の子の頭を強く打ちぬ、さきの父親又怒りて此方の子を打てば、後には互に親と親とのいさかひと成りて打ち合ひしに、此方の親力強く、打ち勝ちて歸りぬ、暫くありて、さきの家の近きあたりの男ども大勢集り來りて、打ち負けたる意趣をばらさんと、纒かにせまき家の庭に込み入りぬ、此方にも又近きあたりより若き者大勢救ひ來りて、始は詞戦ひに其かまびすしき事言はん方なし、暫しが程は田舎人のいさかひ又珍らしと傍に見居たりしが、次第に大勢集り來て、纒かの家に數十百人込み入りたれば、予が居たりし所も奪はれて、座し居つべくもあらず、兩方互に怒り罵りて、棒庖丁の類を携へ來り、既に打ちかゝりぬれば、故もなきにそば杖に打れ、疵つかん事の恐ろしく、急ぎ走り出でたるに、案内は知らず立ち入るべき所もあらず、喧嘩はますますはげしく、すべきやう無くてかなたに立ちまひ居たりしに、年老いた

る者一人出で來て、旅の人不慮の事に逢ひて力なくもおはすらん、向ふに見ゆるは我家なれば、急ぎ彼舟に乗り給ひて休息し給へど、懇に言ひて、多葉粉の火なともなし呉れる、に力を得て、乗り移りたり、獵船と見えていと少く、苦少し吹きかけたり、月は隈なく澄み小夜風涼しく吹き渡りて、さし捨てたる棚なし小船、引沙にもならめきて行末と定めぬに宿りこめたるはいと心細けれど、又風景の面白さに心慰みて、出づる儘に詩歌數々書き付く、陸には猶いさかひ止まで大勢打ち合ぬれど、川中に隔たり居れば危くもあらず、然れども夢結ぶべくとあらねば、夜もすがら月と喧嘩を詠め居たるが、明方近き程には露置き添ひて風いと冷かに、ふすま戀しう思ひしかど、すべきようもなく、苦引きかづきて臥しぬれども目も合はず、とかうする間に夏の夜の短き、明け易き習ひなれば、山かづら引き渡し、鳥の聲花やかなれば、草鞋引き結びて食もせず、舟よりぞ立ちぬ、誠に旅路の習ひ、おはれにも又をかしかりき、

駿河路 (中空日記)

香川景橋

十一日、吉原を出づ、河原宿よりかりへ見れば、富士の嶺曇りなし、すべて山足東西に踏み開き、うち靡きたる袖野まで、端山繁山さのりなく残るくまなく見えわたれるは、此わたりより中郷までの間なるべし、さてうるひ川蓼川をくるはと、又立ちかくしたり、

大方は雪と雲とにうづもれぬあまりに高き富士の山かな

人もかくこそあらめ、吹上にくれば田子の浦見えわたる、坂中の榜木に、「今朝散りし甲斐の落葉や田子の浦」といへる芭蕉が句を書きつけたり、其落葉とも見るばかり、数の釣舟ちり亂れたる、いはん方なし、蒲原を過ぎて由比にとまる、さて此家の庭さきなる、汀の松なとよくく見れば、くだりつる時、あまり磯ぎはの波騒がしとてやどりあへず、立ち出でし宿なり、さるはかたはらいたく面ぶせなる心地すれど、かれは得見知らず、

契をや由比の濱松かへり来て立ちよる陰の波を見るかな

欠

MISSING

しながら、すべて身も心もいとすぐよかなるが上に、もの學もひろくしてみやびやかなる翁なり、この樓のみわたしよきのみならず、世のうきふしもしちぬ所のさまなるをめで、魚住ぬしよめる、

春秋をおくりむかへて宿の名の千と世もこゝにありへてしかなまづ養老神社のみまへを拜み、さて山をのぼりてたきを見る、聞きわたりしにたがはず、大きなはさらなり、あたりに横はれる巖も木立も、世のつねならず、ことに石には、おもしろきあやあるが多し、

老の世はさもあらばあれ雄心をまづ養ひてたきはみるべし
とほくこそ木會のみたけは仰ぎしがたもとにかゝる瀧のしらゆき
など、うたひつゝ、むかしならの帝の、大みゆきありし事を思ひて、
いできしのむかしおもへばたきのへの

ならの朽葉をふむもかしこし

こゝにかりそめなる庵を結びて、すめる尾あり素心といふ、もとは尾張の人にして、さるかたに時めきたりしが、世をすてゝ、こゝにたゞ

一人わび住みしつゝ、茶の道を樂み歌をもよむよし、柏淵翁、伊奈ぬしのかたたるまゝに、入りてしばしいこふ、もとの千歳樓にかへりて夕食などするほどに、かの素心尼も入來り、柏淵翁、伊奈ぬしどもに、夜更くるまで歌がたりなとす、伊奈ぬし、花のさかざるを口をしがりて、

くりかへしましたとひ來ませ多度山のもみぢの秋のたきのしら糸とよみてみせられたれば、かへしどもあねと、

たきつせのしぐるゝおとをまくらにて秋のちぎりも結びおかばやといひて、やがてふしぬ、

十九日、起きいで、みるに、雨そぼふれり、木むらの鳥の音も、いとしめやかにして、静けき春のあしたなり、山をくだる道すから、

なごり思ふ瀧のさぎりの末ならじかへるさ寒き袖のあさあめ

有馬の温泉

木村正辭

吾がどちは、有馬に行かんとて、午後四時過ぐる比、こゝを出で車を

雇ひていそがす、近き頃ひらきたりといふ、山ごえの新道をゆく、二人引の車なれど、猶行きぬところぐありて、おりて行くことしばくなり、とかくするうち、午后八時三十分ばかりに、有馬にはつきぬ、若狭屋といふ旅店にやどる、やがて温泉に行きたるに、浴場は近き比改め造りたるなりといへど、あまり清らかにあらず、其上あまたの人入り込みて、いと雑沓せり、跡にてたづぬれば、別に一等湯といふがありて、一人づゝ浴するといふ、抑此温泉は、いと上古よりありしものにて、遠く神代に、大己貴命のこゝに浴したまひしことありといひ傳ふ、人皇になりては、舒明天皇、孝徳天皇など、入浴し給ひし事、紀にみゆ、それよりはるかの後、文祿中震災のために浴場崩れて、温泉は熱湯に變じたりしを、豊臣秀吉公これを修造せしめて、舊の如くにはなしたりといふ、

十日、晴(月曜)、けふは一等湯のかたに入りたるに、浴場は猶清潔にはあらねど、他の人のいしまじらざれば、やゝよし、これより宿のあ

るじを案内にて、つゞみが瀧をみんとて出でたつ、湯山町より十町ばかりもけば、瀧川の上流なり、溪路屈曲、巖石崑々として、風景絶佳なり、川をへだて、西方に、城山、童子山などいふ高山、突兀として相連れり、麓は瀧川の流れを巡らし、巖石に生ひたる矮松の形は、千態萬狀、いづれも奇ならざるはなし、こなたの岡には、櫻と紅葉との古木多くありて、鬱蒼たり、春秋の眺めおもひやるべし、こゝより少しゆけば、つゞみが瀧のもとに出づ、前面は巖碧空に聳え、草木生ひしげれり、此山を灰形山といふ、瀧は巖のおくにありて見えず、そのおつる音のみきこも、むかし此瀑流の山谷に響ける音、恰も鼓をうてる如くなりしによりて、鼓が瀧の名をおひしを、寛文の頃、山水あふれて山を崩し、風景を變せしより、その音響も失せたりとぞ、入口の巖の間に、まだはしやうのものをつくりて、うちわたしたり、これによりてつたひゆけば、瀧壺はみゆめり、夏なれど、はだひやゝかになりていとものすこし、此所にさゝやかなる茶店あり、しばしやすらふ、

歸路山道をたどりゆくに、かたへの竹むらの中に、鶯のさへづりなくことしきりなり、山谷の氣候おもふべし、

有馬山うちこえくれば夏ながら聲もすゞしくうぐひすのなく

薬師山のうしろに鑛泉あり、炭酸水なり、此所、孝徳天皇の行宮の跡なりといふ、こゝより遠く望めば、向ふに有馬富士と稱する名山あり、その形富士に似たればなり、此鑛泉、むかしは毒水なりとて近よる人もあらざりしを、明治八年大坂の司薬場の試験を乞ひて、はじめて炭酸水なることを知れりとぞ、鑛泉の上に小家を構へて、雨露を防ぐ爲めにす、少し下りたる所に一屋を造り、この内に槽を置きて、炭酸水の流れ出でたるものを、こゝに注ぎ入れて冷浴すべき設けとせり、こゝをくだりて又のぼりたる所に、湯山神社あり、もとはいと小さき社にて麓にありしを、維新の後こゝにうつして、宮も新に造れるなりといふ、温泉寺は麓にあり、行きて寶物などを観る、光明皇后、弘法大師の寫經などの外は、させるものはなし、かくて午前十時ばかり、有

馬を立ち出づ、中村ぬしのよめる、
 有馬山切れせつきせぬくれ竹のひとよばかりをおもひ出にして
 かくすうしつゝ、車はしらせ、もときし山路をつたひて、午後二時ば
 かり神戸に歸りぬ。

○第十節 雜 部

學 問 (源氏物語少女の卷) 紫 式 部

うちつゞき入學といふ事せさせ給ひて、やがて此院のうちに、御曹子
 つくりて、まめやかに才深き師にあづけ給うてぞ、學問せさせ奉り給
 ひける。「大宮の御もとにもをさし、まうで給はず、夜晝うつくしみて、
 猶ちこのやうにのみもてなしきこえ給へれば、かしてにては、え物な
 らひ給はじとて、靜なる所にこめ奉り給へるなりけり、月に三度ばか
 りをまゐり給へとぞ、評しきこえ給ひける、つとこもり居給ひて、い
 ぶせきまゝに、殿をつらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高

き位にのぼり、世に用ひらるゝ人はなくやはあると、思ひきこえ給へ
 ど、大方の人がらまめやかに、あだめきたる所なくおはすれば、いと
 よく念じて、いかでさるべき書をも、とくよみはて、まじらひもし
 世にも出たらんと思ひて、たゞ四五月のうちに、史記なといふ書は讀
 はて給ひけり。「今は寮試うけさせんとて、まづ我お前にて試みさせ給
 ふ、例の大將、左大辨、式部大輔、左中辨なとばかりして、御師の大
 内記をゆして、史記の難き卷々、寮試うけんに、博士のかへさふべき
 ふしゝを引いで、一わたりよませ奉り給ふに、いたらぬくまもな
 く、かたゝに通はし讀み給へるさま、つまじりしものこらず、あさま
 しきまで有がたければ、さるべきにこそおはしけれと、誰もく涙お
 とし給ふ、大將はまして、故大臣おはせましかばと聞え給ひて泣き給
 ふ、殿もえ心づようもてなし給はず、人の上にてかたくなゝりを見さ
 侍りしを、子のおとなぶるに、親の立かはりしれゆく事は、いくば
 くならぬ齡ながら、かゝる世にこそ侍りけれなとのたまひて、おしの

ごひ給ふを見る御師の心地、嬉しく面目ありと思へり、大将盃さし給へば、いたう酔しれてをる顔つき、いとやせしなり、世のひが者に才の程よりは用ひられず、すげなくて身貧しくなんありけるを、御覽じうる所ありて、かくとりわきめしよせたるなりけり、身にあまるまで、御かへりみを給はりて、此君の御とくに、忽に身をかへたると思へば、ましてゆくさは、並ぶ人なき御おぼえぞあらんかし。大學にまゐり給ふ日は、寮門に上達部の御車ども、數知らずつとひたり、大方世に残りたる人あらじとみえたるに、又なくもてかしづかれて、のくろはれ入給へる冠者の君の御さま、げにかゝるまじらひにはたへず、あてにうつくしげなり、例のあやしき者どもの立まじりつゝ、さ居たる坐の末を、からしとおぼすと、いとことわりなるや、こゝにても又、おろしの、しる者どもありて目ざましければ、すこしも臆せず読みはて給ひつ、昔おぼえて大學の榮ゆる頃なれば、上中下の人、我もくど此道に心ざしあつまれば、いよく世の中に、才ありはかく

しき人おほくなんありける、文人擬生などいふなる事どもよりうちはじめ、すがくしうしはて給へれば、ひとへに心にいれて、師も弟子もいといはげまし給ふ、殿にも文つくりしげく、博士才人ども所えたり、すべて何事につけても、道々の才の程、あらはるゝ世になんありける。

文具 (枕草紙九)

清少納言

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つかたに、しどけなくすりひらめかし勞多きになりたるに、つゝしなごしたるこそ、心もとなしとて覺ゆれ、萬の調度はさるものにて、女は鏡硯こそ心のほを見ゆるなんめれ、かさぐちのはざめに、塵ゑなぞ打ち捨てたるさま、こよなしかし、男はまして、文机清けに押し拭ひて、重ねならずば、二つ懸子の硯のいとつぎくしう、詩繪のさまもわざとならぬをかしうて、墨筆のさまなごも、人の目とむばかり、したてたるをかしけれ、とあれどかれどおなじ事とて、黒箱の蓋も片しおちたる硯、わづかに墨のゑた

る、塵のこの世には拂ひがたげなるに、水うち流して、青磁の龜の口
おちて、首のかぎりあなのはと見えて、人わろきなともつれなく、人
の前にさし出づかし、人の硯を引き寄せて、手ならひをも文をも書く
に、その筆な使ひたまひぞ、と言はれたらんこそ、いとわびしかるべ
けれ、うち置かんも人わろし、猶つかふもあやにくくなり、さ覺ゆるこ
とも知りたれば、人のするもいはで見ると、手などよくもあらぬ人の、
さすがに物かまほしうするは、いとよくつかひかためたる筆を、あ
やしのやうに、水がちにさしぬらして、假字に細櫃の蓋などに書きち
らして、横ざまに投げ置きたれば、水に頭はさし入れて、ふせるもに
くき事ぞかし。」

琴 (夜半のねざめ)

菅原孝標女

箏の琴引よせ給ひてかきならし給ふに、所からあはれまさり、松風も
さと吹あはせたるにそのかさされて、物哀におぼさるまゝに、聞く
人あらしとおぼせば、心やすくて心ゆくかぎりひき給ひたるに、入道

殿の佛のおまへにおはしけるが聞給ひて、あはれにいふにもあまる御
琴の音かなと、うつくしきなき、あまりて、おこなひさして渡り給ひ
たれば、ひきやみたまひぬるを、猶あそばせ、念佛し侍るに、極樂の
むかへ近きかと心とさめさせられて、たづねまうできつるぞやどのた
まふ。」

都遷り (方丈記)

鴨 長 明

治承四年の三月の頃、俄に都遷り侍りき、いと思ひの外なりし事なり、
大方この京の初を聞けば、嵯峨天皇の御時、都を定りにけるより後、
既に數百歳を経たり、異なる故なくて、容易く改まるべくもあらねば、
これを世の人、たやすからず憂ひあへるさま、理りにも過ぎたり、さ
れどとかくいふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣、公卿悉く攝
津國難波の京に遷り給ひぬ、世に仕ふる程の人、誰か一人故郷に残り
居らん、官位に思ひをかけ、主君の蔭を頼む程の人は、一日なりとも、
疾く轉らんと勵みあへり、時を失ひ世にあまされて、期する所なき者

は、愁ひながら留り居たり、軒を争ひし人の住居、日を経つ、荒れ行く、家は毀れて淀川に浮び、地は目の前に島となる、人の心皆改りて、唯馬鞍をのみ重くす、牛車を用とする人なし、西南海の所願をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。」その時、おのづから事の便ありて、津の國今の京に到れり、所のありさまを見るに、その地はせせばくて、條里をわるに足らず、山は北にそひて高く、南は海に近くて下れり、浪の音道にかまびすしくして、鹽分殊に勵しく、内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、なかなか様かはりて、優なるかたも侍りき、日々に毀ちて川もせきあへず、運びくだす家はいづくに作れるにかあらん、猶空しき地は多く、作れる屋は少し、故郷は既に荒れて、新都はいまだ成らず、ありとしある人、皆浮雲のおもひをなせり、本より此處に居たるものは、地を失ひて愁ひ、今うつり住む人は、土木の煩ひあることを歎く、道の邊を見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を着たり、都のてぶり忽に改りて、唯鄙びたる武

士に異ならず、これは世の亂る、瑞相とか、聞きおけるもしるく、日を経つ、世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の愁ひ遂に空しからざりければ、同年の冬、猶この京に歸り給ひき、されど毀ちわたりせりし家どもは、いかになりけるにか、悉く本のやうにも作らず、はのかに傳へ聞くに、いにしへの賢き御代には、憐みをもて國を治め給ふ、即ち貢物をさへ免されき、これ民を恵み、世をたすけ給ふによりてなり、今の世の中のありさま、昔に准へて知りぬべし。」

才 能 (徒然草)

兼 好 法 師

人の才能は、文あきらかにして、ひじりの教を知れるを第一とす、次には手かくこと、旨とすることはなくともこれを習ふべし、學問にたよりあらんためなり、次に醫術を習ふべし、身を養ひ人をたすけ、忠孝のつとめも醫にあらざればあるべからず、次に弓射、馬に乗ること六藝にいたせり、必ずこれを窺ふべし、文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず、これを學ばんをば、いたづらなる人とはいふべからず、

次に食は人の天なり、よく味をと、のへ知れる人、大なる徳とすべし、次に細工よろづの要多し、この外の事ども、多能は君子のばづること、るなり、詩歌にたくみに絲竹にたへなるは、幽玄の道、君臣これを重くすとはいへども、今の世にはこれをもちて世を治むること、漸く愚なるに似たり、金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかざるがごとし。

養子女の勤め (座右の銘)

蒞戸太華

寐間の壁に破れがあれば、濕をうけ風をひき病の爲に百年の身を誤つ、夫婦の間に疵があれば、訛を生じ咎を得て、不知の爲に身を辱しめ家を破る、壁の破れには、時に氣を付て反古を張べし、夫婦の交には、常々心にかけて慎を加ふべし。

寐間の物語には、夫婦互に父母に事る孝行の相談なるべし、何をか孝といふ、いとをしみうやまひて事々能く御志をつきまゐらするなり、何をかいとをしむといふ、眞實に父母を御大事に思ひまゐらするなり、何をかうやまふといふ、天地の間父母より尊きはあらぬ事を知りてつ

かふるなり、何をか志をつくとといふ、常に氣を付け心を用ひ、父母の御内心を窺ひみて、其おぼしめしのまゝにするなり。

瓜のつるには瓜が生り、葡萄の蔓には葡萄の生る、然らば親子は同じ心に同じ味ひなるべきに、實の親子も好みかわれば、志のあわぬも多くなり、況てや人の子と養はれ、人の家によめるをや、おぼしめしの已が心になはぬもあらでかなはぬ事なり、勤めてしたがひまゐらすべし、己が心にまかせぬをも枉げてなし、己が力に及ばぬをも強ひてするなり。

人の子と養はれて、其家をつがんものは、上は其父母其家のため、下は子孫榮え行く末々にかれば、止む事なくしては、父母にも諫めをすゝめて、父母を不義におとしいれまゐらせざるも、亦た孝の一なり、しかれども此事をのみ常と心得て、事々己がまゝならんと、細行に大道を論じ、小事に理窟立てするは、父母の顔ばせを損し、父母の心を安んじまゐらせぬ不孝なるべし。

人のもとによめるは、夫と共に其父母に事へまゐらすためなり、三従の道とて、われを立てず、只したがふといふが婦人の道なり、されば古人も婦は影響の如しといひて、影の物にうつるごとく、打ては響の出づるごとく、只速にしたがふを婦徳とするなり、女の智慧ありがはなるは、見て面にくさきものなり、氣にのらぬも、心になはぬも、すべてしたがふが、いたひけにしほらしきぞかし。

人の子となり人の妻となるからは、其家の兄弟姉妹はいと親しく、殊にいとをしまほしきものなり、實の妹すら兄には恐れあり姉には並びがたく、常に氣を取り身をへりくだりては、常々のみにまかせざる事の多き、誠に不便なるものなり、親の子を思ふ事、男女長少の差別なし、是れを親しくいとをしまば、父母何か嬉しからざらん、況て他家よりゆきて兄となり、餘所より入りて姉となるをや、兄弟姉妹のむつまじきは、いたひけに樂もしきものなり。

父母の怒り腹立ちあるは、我をおもひ教ゆる心のあまれるなり、人の

家にゆきてつかへまゐらすもの、其父母に呵られまゐらすは、隔なき子に成り遂ふせて、うつくしく目出度さまなり、さて召しつかふ男女をば、腹立ち呵るべからず、思ひやりいたはり、不便をかけて遣はし、たとへおろかなるも、其れ相應の誠をもて勤むべきぞかし、呵られてすると思ひよりてする、其さかひいかいぞや。

閑居 (方丈記)

鴨 長 明

それ人の友たる者は、富めるを貴み、懇なるを先とす、かならずしも情あると、直なるを愛せず、たゞ糸竹花月を友とせんにはしかず、人の奴たるものは、賞罰の甚しきを願み、恩の厚きを重くす、更にはごぐみあはれふといへども、やすく閑なるをば願はず、たゞ我身をやつとするには如かず、もしなすべきことあらば、則ちおのづから身をつかふ、たゆからずしもあらねど、人をしたがへ人をかへりみるよりはやすし、もしありくべきことあれば、みづから歩む、苦しといへども、馬鞍牛車と心を惱ますにはしかず、今一身を分ちて二の用となす。

手のやつて、足の乗物、よくわが心になへり、心また身のくるしみ
 を知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ、つかふとて
 もたびし過さず、ものうしとて心も動かすことなし、いかに況や、
 常にありき常に動くは、これ養生なるべし、何ぞいたづらにやすみ居
 らん、人を惱ますは罪業なり、いか、他の力をかるべき。
 衣食のたぐひまた同じ、藤の衣、麻のふすま、得るに随ひて肌をか
 し、野邊の茅花峰の木の實、僅に命をつぐばかりなり、人にまじはら
 ざれば、姿を耻づる悔もなし、糧乏しければおろそかなれども、猶味
 をあまくす、すべてかやうのこと、楽しく富める人に對していふにあ
 らず、たわわが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり、
 大かた世を遁れ、身を捨てしより、恨みもなく恐れもなし、命は天運
 にまかせて、をしましむはせず、身をは浮雲になすらへて、たのまず
 まだしとせず、一期のたのしみは、うた、ねの枕の上にきはまり、生
 涯の望みは、をりし、の美景にのこれり。

それ三界は、たゞ心一つなり、心もし安からずば、牛馬七珍もよしな
 く、宮殿樓閣も望みなし、今さびしき住居、一間の庵、みづからこれ
 を愛す、おのづから都に出で、は、乞食となれることをはづといへど
 も、かへりてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ、も
 し人このいへることを疑は、魚鳥のありさまを見よ、魚は水に飽か
 ず、魚にあらざればその心知らず、鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば
 その心知らず、閑居の氣味もまたかくの如し、住まずして誰かさど
 らん。」

女房の評 (紫式部日記)

紫式部

宰相の君は、(中略)やうだいなもてなし、らうく、しくをかし、たけだ
 ちよきばとにふくらかなる人の、顔いと匂ひをかしけなり。大納言の
 君は、いとさ、やかに小さしと云ふべき方なる人の、白う美しくしげに
 つぶし、と肥えたるが、うはべはいとそびやかに、髪たけは三寸ばか
 り餘りたる、すそつき、かんざしなども、すべて似るものなく細やかに